

石 川 遺 跡
石 川 塚
旧百里原海軍飛行場掩体壕群

茨城空港テクノパーク整備事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

平成 21 年 3 月

茨 城 県
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第320集

石^{いし} 川^{かわ} 遺 跡
石^{いし} 川^{かわ} 塚^{づか}
旧^{きゅう} 百^{ひゃく} 里^り 原^{げん} 海^{かい} 軍^{ぐん} 飛^ひ 行^{こう} 場^{じょう} 掩^{えん} 体^{たい} 壕^{ごう} 群^{ぐん}

茨城空港テクノパーク整備事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 I

平成 21 年 3 月

茨 城 県
財 団 法 人 茨 城 県 教 育 財 団

序

茨城県は、地域の航空需要に対応し、首都圏の航空需要の一翼を担う役割を果たすとともに、本県のさらなる発展を支える陸・海・空の広域交通ネットワーク形成を図るため、平成22年開港をめざし、百里飛行場の民間共有化事業を進めています。

その一環として、地域住民の方々の雇用拡大や企業誘致による地域活性化を図るため、臨空型の産業団地「茨城空港テクノパーク」の整備事業が計画されました。

しかしながら、この事業地予定地内には埋蔵文化財包蔵地である石川遺跡・石川塚・旧百里原海軍飛行場掩体壕群が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が茨城県から同遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成17年10月から平成18年7月まで10か月にわたってこれを実施しました。

本書はその調査成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、小美玉市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

- 1 本書は、茨城県企画部空港対策室の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年10月から平成18年7月まで発掘調査を実施した、茨城県小美玉市（旧小川町）大字下吉影字石川2164番地ほかに所在する石川遺跡、同市大字下吉影字石川2189番地の1ほかに所在する石川塚、同市大字下吉影字新田出口四番2408番地の2ほかに所在する旧百里原海軍飛行場掩体壕群の発掘調査報告書である。

- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調 査

石川遺跡	平成17年10月1日～平成18年3月31日
石川塚	平成17年10月1日～11月30日
旧百里原海軍飛行場掩体壕群	平成17年10月1日～11月30日 平成18年4月1日～7月31日

整 理 平成20年4月1日～5月31日 平成20年7月1日～11月30日

- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

石川遺跡

首席調査員兼班長	川又清明	平成17年10月1日～平成18年3月31日
主任調査員	柴山正広	平成17年10月1日～平成18年3月31日
主任調査員	寺内久永	平成17年10月1日～平成18年3月31日
主任調査員	杉澤季展	平成18年2月1日～2月28日
副主任調査員	胸澤悦郎	平成18年3月1日～3月31日

石川塚

首席調査員兼班長	川又清明	平成17年10月1日～11月30日
主任調査員	松本直人	平成17年10月1日～11月30日
主任調査員	市村俊英	平成17年10月1日～11月30日

旧百里原海軍飛行場掩体壕群

平成17年度	首席調査員兼班長	川又清明	平成17年10月1日～11月30日
	主任調査員	松本直人	平成17年10月1日～11月30日
	主任調査員	市村俊英	平成17年10月1日～11月30日
平成18年度	首席調査員兼班長	川又清明	平成18年4月1日～7月31日
	主任調査員	荒蒔克一郎	平成18年4月1日～7月31日
	主任調査員	田月淳一	平成18年4月1日～7月31日
	主任調査員	照山大作	平成18年4月1日～7月31日
	主任調査員	小川貴行	平成18年4月1日～7月31日





- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員小野政美、調査員前島直人が担当した。執筆分担任は、以下のとおりである。

主任調査員 小野政美 第1章、第2章、第3章第1・2節第3節1・4、第4章、第5章
調 査 員 前島直人 第3章第3節2・3

- 5 石川塚の墓坑から出土した人骨の同定については、国立歴史民俗博物館考古研究部教授の西本豊弘氏に依頼した。成果は、本文中の第4章第3節1(3)に記載した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X=+21,200\text{m}$ 、 $Y=+53,400\text{m}$ の交点を基準点(A 1a1)とした。なお、地区設定にあたっては、事業予定地内の遺跡全体を包括できるようにした。
この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」「B 2b2区」のように呼称した。
- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。
遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SK-土坑 SD-溝跡 UP-地下式坑 SY-炭焼窯跡
ST-墓坑 FP-竈穴 SX-不明遺構 P-ピット K-掘乱
遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品
G-ガラス製品
土層 K-掘乱
- 3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。
 - (1) 遺構全体図は400分の1と150分の1、遺構実測図は原則として60分の1で掲載した。ただし、掩体壕については、遺構実測図は平面図と断面図を200分の1、土層断面図を100分の1で掲載した。
 - (2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
 - (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩	 炉・火床面・繊維土器断面
 竈部材・粘土・黒色処理	 煤・柱あたり痕・油煙
●土器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ☆ガラス製品 ---硬化面	
- 5 遺物観察表及び遺構一覧表の表記については、次のとおりである。
 - (1) 計測値の()内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m、cm、gで示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。
 - (2) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- 6 竈穴住居跡の「主軸」は炉・竈を通る軸線とし、また、掩体壕の「主軸」は、格納部の奥壁から開口部を通る軸線とした。主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 $N-10^{\circ}-E$)。

目 次

序	1
例言	5
凡例	6
目次	7
遺跡の概要	7
第1章 調査経緯	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査経過	7
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 石川遺跡	13
第1節 調査の概要	13
第2節 基本層序	13
第3節 遺構と遺物	14
1 縄文時代の遺構と遺物	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 竪穴	27
(3) 土坑	28
2 古墳時代の遺構と遺物	34
(1) 竪穴住居跡	34
(2) 土坑	44
3 中世の遺構と遺物	46
地下式坑	46
4 近代の遺構と遺物	47
炭焼窯跡	47
5 その他の遺構と遺物	53
(1) 溝跡	53
(2) 土坑	53
(3) 不明遺構	77
(4) 遺構外出土遺物	79
第4節 まとめ	84
第4章 石川塚	87
第1節 調査の概要	87
第2節 基本層序	87
第3節 遺構と遺物	88
1 近世の遺構と遺物	88
(1) 塚	88
(2) 掘立柱建物跡	97
(3) 墓坑	100
(4) 土坑	103
2 その他の遺構と遺物	105
(1) 土坑	105
(2) 遺構外出土遺物	107
第4節 まとめ	109
第5章 旧百里原海軍飛行場掩体壕群	111
第1節 調査の概要	111
第2節 基本層序	111
第3節 遺構と遺物	112
近代の遺構と遺物	112
(1) 掩体壕の記載方法	112
(2) 掩体壕	112
第4節 まとめ	136
写真図版	
抄録	
付図	

【調査のあらまし】

平成22年開港予定の茨城空港にあわせて整備されているテクノパーク予定地には、石川遺跡・石川塚・旧百里原海軍飛行場掩体壕群などの遺跡があります。各遺跡の内容を記録して後世に伝えるため、工事が行われる前に茨城県教育財団が発掘調査を行いました。

【調査してわかったこと】

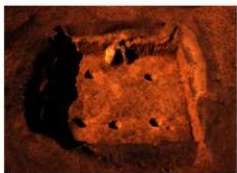
〈石川遺跡〉

石川遺跡は、東側に巴川が流れる台地上に位置しています。発掘調査の結果、縄文時代（4000～5000年前）の竪穴住居跡6軒、古墳時代前期（1600年前頃）の竪穴住居跡2軒、後期（1400年前頃）の竪穴住居跡2軒、中世の地下式坑1基、近代の炭焼窯跡6基などの遺構が見つかりました。縄文時代と古墳時代に小さな集落が営まれ、近代には炭の生産地として、人々がこの地を利用して生活してきたことがわかりました。

縄文時代中期（約4000年前）の竪穴住居跡。5軒が重なっていることから、家の増改築をしたものと考えられます。赤くみえる部分が炉（今で言えばいろり）です。ここから、縄文土器の破片や小形の磨製石斧（土を掘ったり木を切ったりする斧型の石器）がたくさん見つかりました。



古墳時代後期（1400年前）の竪穴住居跡。壁際に竈（食物を煮たり蒸したりする調理の施設）がみられます。出土した土器は土師器（素焼きの土器）の甕や坏（食べ物を盛るのに使われた古代の土器）です。



近代の炭焼窯跡。底面が黒くなっている部分に、炭材となる木を入れて、上部を粘土で覆って、炭を焼きます。電気が普及する以前、大正から昭和初期には、木炭が各家庭の燃料として使われていました。



〈石川塚〉

塚とは、土を小高く盛り上げた場所で、昔の人々が祈りや記念のしるし、または墓として造ったものを指します。小美玉市下吉影の貝谷地区にあった石川塚は、径9.7mの円形で、地面から高さ148cmに土を積み上げて造られています。塚の頂部や裾部には、石塔が8基立てられていました。これらの石塔は、刻まれた年号から、江戸時代の元禄期から安永期（1688年～1775年）にかけて建立されたものです。塚の中央部を約50cm掘り下げると人骨が出土し、鑑定の結果、江戸時代のものであることが判明しました。しかし、骨は集められた状態で出土したことから、塚の頂部は掘り返されているものとみられます。また、塚の周辺からは、堂跡とみられる掘立柱建物跡が2棟、人骨が埋葬された墓坑が1基見つかっています。このことから、当遺跡周辺は寺社の一部であった可能性があります。



石川塚の調査前状況 石塔が8基立てられていました



塚頂部にあった「秀海上人」の墓石と讀誦塔

下吉影の貝谷地区には、石川塚に関連する昔話があります。

昔、下吉影の貝谷に昌讚寺という寺があって、秀海上人という偉い僧侶がいた。ある年の夏、日照りが続き農作物が枯れる寸前となった。村人たちはとても困り、上人に雨乞いを頼むことにした。上人は村人達に茅を刈らせて広場に高く積み重ねさせると、その頂上に立ち、火を付けさせた。上人は、「もし私が雨の降る事を祈り、それでも雨が降らなかつた場合は、我が命を天に捧げる。」と、燃え上がる炎の中に立ってお経を唱え、一心不乱に祈りを続けた。火が燃えつきる頃、ついに雨が降り始め、田畑の作物はよみがえった。人々は喜び、祈りを終えて疲れ切った上人に感謝した。後日、人々は燃えた茅の灰を集めて塚を築いた。その場所を「灰塚」と呼び、秀海上人が亡くなった後、塚の上に石塔を建ててその人徳を長く称えた。

石川塚の石塔2基は、向かって左側が墓石、右側が「普門品（観音経というお経）を7200回も唱えたことを示す石塔（讀誦塔）でした。どちらにも、秀海上人の名が刻まれていることから、この昔話に関連するものと考えられます。石川塚は、昔話にあった「灰塚」なのでしょうか。また、出土した人骨は秀海上人のものなのでしょうか。今となっては定かではありませんが、当遺跡が昌讚寺という寺社の一部であった可能性はあります。また、身近な歴史の中で、この地が地域の人々の信仰の対象として大切に守られてきた場所であったことは確かです。

〈 旧百里原海軍飛行場掩体壕群 〉



上空から見た第1号掩体壕



上空から見た第2号掩体壕



第2号掩体壕の土層断面



第3号掩体壕から出土した機銃弾

今から約70年前、15年戦争（1931～1945年）の末期、日本各地の旧軍事飛行場周辺には、米軍機の攻撃から飛行機を隠し、機体を守るための施設が造られました。これを「掩体壕」といいます。小美玉市にはかつて「百里原海軍飛行場」があり、今回はその飛行場周辺に存在していた7基の掩体壕を調査しました。

掩体壕の大きさは、幅50m、奥行26m、面積は1300㎡で、オリンピックで使うプールの面積とほぼ同じくらいです。外側の土を溝状に掘って土を取り、幅7～8m、高さ3m以上の土手状に積み上げて作られています。機械を使わず、人間の手で土を掘り、水平に積み上げていった様子が、掩体壕の土層断面から分かります。

土手の内側（格納部）に飛行機を入れて置きました。天井がないため、土手の上にネットを張り、草木をかぶせて飛行機を隠していたようです。写真の様にE字形をした2機の飛行機を格納するものと、C字形をした1機を格納するものと2種類の掩体壕がありましたが、数が多いのはE字形の方です。第2・3号掩体壕の格納部付近から機銃弾（機関銃の弾丸）が出土しています。口径が12.7mmであることから、米軍機から発射されたもので、飛行場周辺への空襲があったことを示す資料といえます。



旧百里原海軍飛行場掩体壕群 今回調査した7基の掩体壕 (1947年米軍撮影 国土地理院蔵)

旧百里原海軍飛行場は、現在の航空自衛隊百里基地の西側にあり、今でも正門跡などが残っています。戦後間もない時期に米軍が撮影した航空写真を見ると、約80基の掩体壕が作られ、滑走路まで続く誘導路によって飛行場と結ばれていたことが分かりました。また、多くの飛行機を一か所に集めておくと空襲の目標になってしまうため、飛行場周辺に分散して掩体壕を配置していたことも分かりました。今回調査した掩体壕は、飛行場の東側に位置する一群の内の7基です。

掩体壕作りには多くの人手と時間が必要でした。いつ米軍の爆撃や機銃掃射を受けるか分からない危険な状況の中、シャベルで土を掘り「もっこ」で2人1組となって土を運ぶという厳しい重労働を行ったのは、地域の老人や女性や子ども達でした。青年男性のほとんどが、徴兵によって戦地に行っていたためです。1日のうちに数回響く、空襲警報のたびに作業を中断し、付近の林の中に逃げこみ、警報が止むとまた作業を続けるという大変な労働でした。

旧百里原海軍飛行場掩体壕群は、近代の戦争を伝える貴重な遺跡として、後世にも伝え続けていくことが大切であると考えます。

【難しい言葉】

たてあなじゆうきよあと
竪穴住居跡

地面を円形や方形に掘って床とし、その上方に屋根をかけた半地下式の住居です。縄文時代から平安時代までつくられた一般的な家屋です。

せきとう
石塔
えんたいごう
掩体壕

人間が信仰上の目的をもって銘文や仏像などを刻んで立てた石のことです。飛行機を爆撃から守り、隠しておく施設です。コンクリート製で天井があるものと土製で天井のないものがあります。戦争末期に、各地の軍事飛行場の周辺にたくさんつくられました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、小美玉市に茨城空港を開港させるとともに、それに伴う空港テクノパーク整備事業を進めている。

平成13年1月29日、茨城県知事から茨城県教育委員会教育長あてに（仮称）空港テクノパーク整備事業（小美玉市下吉影地内）における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は平成13年2月18・19日に現地踏査を行い、石川塚、旧百里原海軍飛行場掩体壕群については平成13年3月7日に、石川遺跡については平成16年11月15～17日に試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、平成13年4月17日、事業地内に石川塚・旧百里原海軍飛行場掩体壕群が、平成16年12月2日、同地内に石川遺跡が、それぞれ所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成17年1月26日、茨城県知事から茨城県教育委員会教育長あてに、石川遺跡、石川塚及び旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第1・2号掩体壕）について文化財保護法第57条の3（現第94条）の規定に基づく土木工事の通知が提出された。平成17年2月8日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県知事あてに、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

また、平成18年1月25日、茨城県知事から茨城県教育委員会教育長あてに、旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第3～7号掩体壕）について文化財保護法第94条の規定に基づく土木工事の通知が提出された。平成18年2月21日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県知事あてに、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

石川遺跡、石川塚及び旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第1・2号掩体壕）については、平成17年3月15日、茨城県知事から、茨城県教育委員会教育長あてに、（仮称）空港テクノパーク整備事業（小美玉市下吉影地内）に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成17年3月23日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに石川遺跡、石川塚及び旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第1・2号掩体壕）について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第3～7号掩体壕）については、平成18年2月24日、茨城県知事から、茨城県教育委員会教育長あてに、（仮称）空港テクノパーク整備事業（小美玉市下吉影地内）に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成18年2月27日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第3～7号掩体壕）について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県知事から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、石川遺跡を平成17年10月1日から平成18年3月31日まで、石川塚を平成17年10月1日から11月30日まで、旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第1・2号掩体壕）を平成17年10月1日から11月30日まで、旧百里原海軍飛行場掩体壕群（第3～7号掩体壕）を平成18年4月1日から7月31日まで、それぞれ発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

石川遺跡、石川塚、旧百里原海軍飛行場掩体壕群第1・2号掩体壕及び第3～7号掩体壕の調査の経過について、その概要を表で記載する。

石川遺跡（平成17年度）

工程		期間		10月	11月	12月	1月	2月	3月
		調査	準備						
調査	遺構	準備	確認	■		■			
遺構	調査	調査	調査				■	■	■
遺注	写真	洗作	浄業			■	■	■	■
補撤	足調	調査	査収						■

石川塚（平成17年度）

工程		期間		10月	11月
		調査	準備		
調査	遺構	準備	確認	■	
遺構	調査	調査	調査		■
遺注	写真	洗作	浄業	■	■
補撤	足調	調査	査収		■

旧百里原海軍飛行場第1・2号掩体壕
（平成17年度）

工程		期間		10月	11月
		調査	準備		
調査	遺構	準備	確認	■	
遺構	調査	調査	調査		■
遺注	写真	洗作	浄業	■	■
補撤	足調	調査	査収		■

旧百里原海軍飛行場第3～7号掩体壕
（平成18年度）

工程		期間			
		4月	5月	6月	7月
調査	遺構	準備	確認	■	
遺構	調査	調査	調査	■	
遺注	写真	洗作	浄業		■
補撤	足調	調査	査収		■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

石川遺跡は、茨城県小美玉市（旧東茨城郡小川町）大字下吉影字石川2164番地ほか、石川塚は茨城県小美玉市大字下吉影字石川2189番地の1ほか、旧百里原海軍飛行場掩体壕群は茨城県小美玉市大字下吉影字新田出口四番2408番地の2ほかそれぞれ所在している。

これら3遺跡が所在する小美玉市は、茨城県の中央部に位置し、北は巴川が東流し、南は霞ヶ浦に面している。市域の多くは標高20～35mの洪積台地に占められており、その台地には北浦に流入する巴川、霞ヶ浦に流入する園部川、鎌田川、靱無川の4河川及びその支流によって樹枝状に開析されている。また、巴川及び園部川の沿岸には、幅0.5～1.5kmの細長い沖積低地が発達しており、特に巴川右岸は幅広く低地が広がっている¹⁾。

3遺跡の位置する市の東部は、行方台地の北端にあたり、標高30mほどの一段高い台地になっている。この台地を形成する地層は、下位から、砂鉄を含む粒径差のある砂の互層からなる石崎層、下末吉海進時の堆積物である礫・砂を主とする見和層、灰色から青灰色を呈する砂質粘土の茨城粘土層、さらに関東ローム層、腐植土層が堆積している²⁾。

石川遺跡は、小美玉市の東部に位置し、巴川右岸の低地から入り込む谷津に面した標高28mの台地上に所在しており、小支谷を挟んで南西約200mの対岸には縄文時代中期中葉から後葉にかけての遺構・遺物が多数検出された石川西遺跡が所在している。調査前の現況は畑、山林である。

石川塚は、石川遺跡から西へ約200m離れた小支谷の対岸の谷津頭に位置する。調査前の現況は山林である。旧百里原海軍飛行場掩体壕群は、小美玉市の北東部に位置し、巴川右岸の標高30mほどの台地上の広域平坦地に所在している。旧百里原海軍飛行場は、現在の航空自衛隊百里基地の西側に存在していたとされ、その施設から菱形に展開する滑走路の外側に、約80基の掩体壕が所在していた。今回報告する第1～7号掩体壕は、旧百里原海軍飛行場の東部で、巴川の低地から入り込む小支谷の谷津頭付近に所在する。調査前の現況は山林である。

第2節 歴史的環境

市域は、縄文海進のため台地を開析する谷津に海水が進入していたと考えられており、海のお恵みを受けて早くから人々が生活を営んでいたことが、宮後貝塚、八幡脇貝塚、野中貝塚、南坪貝塚、部室貝塚等の存在からうかがえる。巴川水系に属する石川遺跡でも、縄文時代早期から後期及び古墳時代の遺構・遺物が確認されており、周辺にも該期の遺跡が数多く確認されていることから、その関連性が指摘できる。ここでは当遺跡が所在する巴川流域の遺跡を中心に概要を述べることにする。

巴川流域では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、市域では園部川右岸の微高地に所在する香取下遺跡、高崎地区に所在する大作台遺跡など霞ヶ浦に近い台地上で、後期旧石器時代後半に比定される石器や剥片が検出されている。しかし、石器の出土量はどの遺跡も少量である³⁾。

縄文時代の遺跡は巴川流域の台地縁辺部に広く分布している。早期では、巴川左岸に所在する梨ノ子木久保遺跡（鉦田市）〈4〉で、微量ではあるが沈線文系土器が出土している⁴⁾。その他、巴こ遺跡〈5〉、柳の木

遺跡<6>で該期の土器片が採取されている。前期は縄文海進が進み、巴川兩岸の台地上に遺跡が増加する。前述の梨ノ子木久保遺跡では、該期の土坑6基が検出されており、その他出土土器の多くは黒浜式・浮島式・諸磯式が主体であると報告されている³⁾。また、巴川右岸の前野遺跡<7>、中郷谷遺跡<8>、岡田遺跡<9>、瀬戸遺跡<10>、宮後遺跡<11>でも該期の土器が表面採取されている。中期には市域に遺跡数が増加し、市の南部にあたる玉里地区の霞ヶ浦沿岸では、部室貝塚を始めとする大規模な貝塚も形成されるようになる⁴⁾。当遺跡周辺における発掘調査例は少ないが、宿東側遺跡<12>、道海遺跡<13>、城之内遺跡<14>、南原遺跡<15>、宮後遺跡で該期の土器片が採取されている。また、当遺跡と小支谷を挟んで対岸に位置する石川西遺跡<16>では、阿玉台Ⅱ式から加曾利EⅢ式土器が多数出土し、該期の堅穴住居跡やフラスコ状土坑・袋状土坑等の遺構が多数検出されている⁵⁾。後期の市域における代表的な遺跡としては梶無川右岸に所在する南坪貝塚<17>があげられる。ハマグリを主体とする純縄貝塚で、堀之内式期から加曾利B式期の土器が出土している⁶⁾。後期から晩期にかけての市域の遺跡数は激減する。巴川流域でも、青柳貝塚<18>で晩期の土器片が採取されているだけである⁷⁾。

古墳時代の遺跡は、巴川沿岸に多く確認されており、古墳や古墳群も所在している。不二内古墳群<19>からは、「跪座する男」や「壺を捧げる女」などの人物埴輪が出土している⁸⁾。また、新堀古墳<20>では箱式石棺から人骨が出土している⁹⁾。集落跡の調査例はないが、西ノ内遺跡<21>、岡田遺跡、南原遺跡などで該期の土器片が採取されている。

律令期においては、市域は常陸国茨城郡に属し、「和名抄」にみえる田余郷・白川郷・立花郷・生園郷・山前郷に比定されている。そのうち当遺跡が所在する巴川右岸の下吉影地区は、茨城郡白川郷に属していたと考えられている。集落跡の調査例はないが、遺跡分布調査¹⁰⁾において該期の遺物が確認されている遺跡は、望前遺跡<22>、道海遺跡、城之内遺跡、宮後遺跡、南原遺跡など数多い。

中世には大掾・小田・江戸・佐竹諸氏の抗争の場となり、紅葉城跡<23>や皆谷城跡など多くの城館が築かれた。園部川・梶無川・鎌田川の流域にも城館跡が多いことから、鎌倉時代末期から戦国時代にかけての当該地周辺は、中小の在地領主層が河川流域を拠点として勢力を伸ばしていたことがうかがえる。

中世末期の佐竹氏支配ののち、同氏の秋田転封により当該地は穴戸藩領や松岡藩領に分割され、さらに水戸藩領・幕領・旗本領に細分されていった。近世の遺跡としては、巴川左岸(鉾田市)の大川・紅葉地区に勘十郎堀<28>が存在している。1706年、水戸藩は大規模な藩営工事に着手し、松波勘十郎を中心として溜沼川から巴川河岸紅葉に至る堀割工事を行った。これは、巴川及び北浦の水運を利用して奥州諸藩の物資を江戸に運ぶことが目的であったと考えられている¹¹⁾。小川地区には水戸藩の御用河岸があり、当遺跡が所在する下吉影地区にも河岸が開かれていたことから、当該地が河岸水運の要所として栄えていたことがうかがわれる¹²⁾。また、市域には市指定文化財の一字一石経塚である与沢経塚<24>、竹原中郷経塚があり、巴川右岸の鉾田市青柳には念仏塚<25>、十九夜東塚<26>、十九夜西塚<27>など民間信仰に関する供養塚が多数所在¹³⁾している。

近代には、昭和13年1月に旧百里原海軍飛行場の建設が開始されている。当飛行場の周辺は、台地上の広域平坦地となっており、飛行場が建設された要因の一つと考えられる。また、巴川と園部川に樹枝状に開析された台地縁辺部は起伏に富んだ地形となっており、飛行機を秘匿隠蔽するための掩体壕群は、こうした自然地形を利用して構築されたものとみられる。

当飛行場の歴史は、概ね次のようなものである¹⁴⁾。昭和13年12月、筑波海軍航空隊百里原分遣隊が開隊し、300名の隊員が着任した。昭和14年12月には百里原海軍航空隊として独立し、初歩飛行訓練に従事している。主に艦上爆撃機・艦上攻撃機・練習機の基地であり、中練(中間練習機教程)教育が行われていた。基地機能

が増強された昭和18年以後は、実用機の操縦訓練及び偵察教育が行われ、大航空隊へと変化していった。昭和19年頃からは、太平洋哨戒任務を追加するなど実戦訓練部隊へと移行していった。当飛行場周辺に掩体壕がつくられたのはこうした戦争末期のことである。昭和20年2月16日以降、当飛行場の軍事施設はたびたび戦略爆撃や機動部隊の強襲を受けており、飛行訓練の継続も困難となっていった。この頃になると飛行機と燃料の不足から初歩飛行訓練は中止され、艦上攻撃機による特攻訓練のみが実施されるようになった。4月には沖縄の菊水作戦に参加、その後、再び訓練再開を命じられるが、硫黄島から来襲する米軍機に制空権を奪われ、訓練のできる状態ではなくなっていった。そして、8月15日の終戦後、解散となっている。

飛行場施設の多くは、現在の航空自衛隊百里基地の西側に存在しており、正門跡、機銃試射場跡、百里神社が遺存している。滑走路は旧飛行場関連施設から東側に菱形に形成されており、この滑走路の外側に誘導路を介して80基余りの掩体壕群が構築されていた。平成17～18年度にかけて、茨城県教育委員会による近代化遺産の調査が実施され、当遺跡内に16基の無蓋掩体壕が残存していることが確認されている。その後、当財団による発掘調査が行われた際に、新たに1基が確認されており、計17基の掩体壕が残存していたことが明らかになった。掩体壕の調査は、当財団による今回の調査のほか、平成19年9月から12月にかけて、小美玉市教育委員会による第12・13号掩体壕の調査が行われている¹⁷⁾。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当番号と同じである。

註

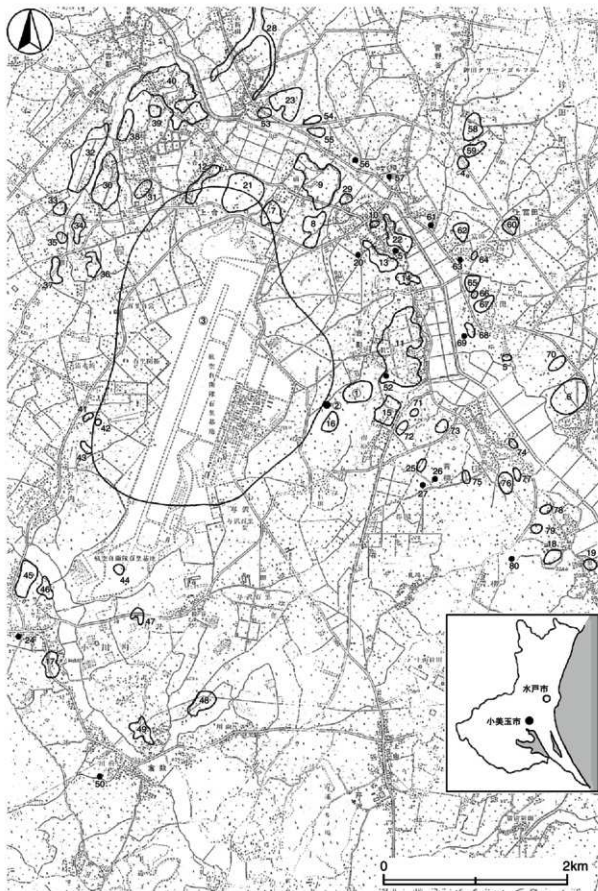
- 1) 小川町史編さん委員会『小川町史 下巻』小川町 1988年3月
- 2) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 石岡』1981年3月
- 3) 玉里村史編纂委員会『玉里村の歴史』玉里村・玉里村立資料館 2006年2月
- 4) 後藤義明『主要地方道茨城・鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 梨ノ子木久保遺跡 割塚古墳』『茨城県教育財団文化財調査報告』第47集 1988年6月
- 5) 前掲4)
- 6) a 齋藤弘道「①部室貝塚」『学術調査概報3 県内貝塚における動物遺存体の研究(3)』茨城県立歴史館 1981年3月
b 玉里村教育委員会「5 部室貝塚」『玉里村内遺跡分布調査報告書 玉里の遺跡』2004年11月
- 7) 小川貴之「石川西遺跡 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第32集 2009年3月
- 8) 齋藤弘道「⑧南坪貝塚」『学術調査概報2 県内貝塚における動物遺存体の研究(2)』茨城県立歴史館 1980年3月
- 9) 茂木雅博他「A-32 完倉台遺跡」『鉦田町史 原始古代資料編(鉦田町の遺跡)』鉦田町 1995年3月
- 10) 齋藤忠他「38 不二内古墳」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年3月
- 11) 石田幹治・宮内良隆『新堀古墳発掘調査報告書』小川町教育委員会 1988年3月
- 12) 小川町教育委員会『茨城県東茨城郡小川町埋蔵文化財分布調査報告書』1985年3月
- 13) 鉦田町史編さん委員会『国説 ほこたの歴史』鉦田町 1995年12月
- 14) 前掲1)
- 15) a 小川町史編さん委員会『小川町史 上巻』小川町 1982年3月
b 前掲9)と同じ「A-6 念仏塚 A-7 十九夜塚 A-9 十九夜西塚」
- 16) 小川町史編さん委員会『小川町史 上巻』小川町 1982年3月
- 17) 小玉秀成「旧百里原海軍飛行場掩体壕群第12・13号掩体壕発掘調査終了報告―市道115号線改良工事に伴う試掘調査」小美玉市教育委員会生涯学習課 旧百里原海軍飛行場掩体壕群発掘調査団 2008年3月

参考文献

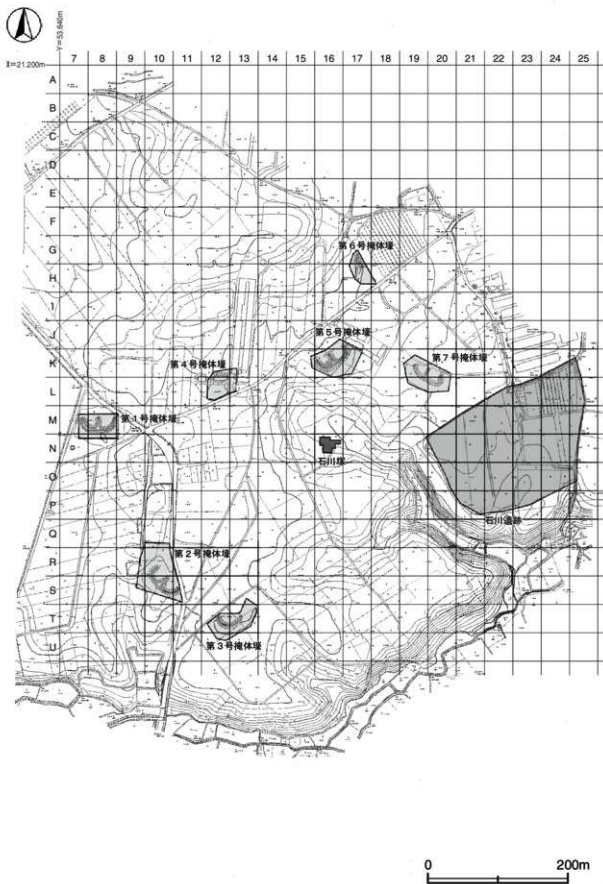
- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県道路地図』茨城県教育委員会 2001年3月

表1 石川遺跡・石川塚・旧百里原海軍飛行場掩体壕群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・中・平			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・中・平
①	石川遺跡						41	巾木免遺跡						
②	石川塚						42	与沢大山遺跡						
③	旧百里原海軍飛行場掩体壕群						43	かじや久保遺跡						
4	梨ノ子木久保遺跡(鉦田市)	○	○				44	百里基地遺跡						
5	巴ご遺跡(鉦田市)		○				45	新田後遺跡						
6	柿の木遺跡(鉦田市)		○				46	イカツチ遺跡						
7	前野遺跡		○				47	紋谷遺跡						
8	中郷谷遺跡		○				48	鷹見穴遺跡						
9	岡田遺跡			○			49	潮宮遺跡						
10	瀬戸遺跡		○				50	金久曾塚群						
11	宮後遺跡		○				51	富士見塚古墳						
12	宿東側遺跡		○				52	道海古墳						
13	道海遺跡		○				53	大乘遺跡(鉦田市)						
14	城之内遺跡		○				54	大條遺跡(鉦田市)						
15	南原遺跡		○				55	権現山遺跡(鉦田市)						
16	石川西遺跡		○				56	明神後古墳(鉦田市)						
17	南坪貝塚		○				57	松崎古墳(鉦田市)						
18	青柳貝塚(鉦田市)		○				58	吉十北遺跡(鉦田市)						
19	不二内古墳群(鉦田市)						59	吉十南遺跡(鉦田市)						
20	新堀古墳						60	外ノ山遺跡(鉦田市)						
21	西ノ内遺跡		○				61	円満寺廃寺(鉦田市)						
22	窪前遺跡		○				62	稲荷前遺跡(鉦田市)						
23	紅葉城跡(鉦田市)						63	竜子塚(鉦田市)						
24	与沢経塚						64	坂ノ上遺跡(鉦田市)						
25	念仏塚(鉦田市)						65	富田城跡(鉦田市)						
26	十九夜東塚(鉦田市)						66	香取脇遺跡(鉦田市)						
27	十九夜西塚(鉦田市)						67	香取前遺跡(鉦田市)						
28	勘十郎堀(鉦田市)						68	茂平前遺跡(鉦田市)						
29	下吉影中郷谷遺跡		○				69	茂平前塚(鉦田市)						
30	堀之内遺跡		○				70	鳥栖遺跡(鉦田市)						
31	内新田遺跡		○				71	藤久保夕イ遺跡(鉦田市)						
32	後峰遺跡		○				72	藤久保遺跡(鉦田市)						
33	飯前後峰遺跡		○				73	水貫遺跡(鉦田市)						
34	兔内遺跡		○				74	塚崎古墳群(鉦田市)						
35	飯前茂内遺跡		○				75	又久保古墳群(鉦田市)						
36	原山遺跡		○				76	大上遺跡(鉦田市)						
37	茂内遺跡		○				77	大上古墳群(鉦田市)						
38	西新田遺跡		○				78	宮山古墳群(鉦田市)						
39	新立遺跡		○				79	石神東古墳群(鉦田市)						
	すすき山遺跡		○				80	石神十三塚(鉦田市)						



第1図 石川遺跡・石川塚・旧百里原海軍飛行場掩体壕群周辺遺跡分布図 (国土地理院25,000分の1「下吉影」「常陸王造」)



第2図 石川遺跡・石川塚・旧百里原海軍飛行場掩体壕群調査区設定図

第3章 石川遺跡

第1節 調査の概要

石川遺跡は、小美玉市の東部に位置し、巴川右岸の樹枝状に開折された谷津に面した標高28mの台地上に立地している。調査範囲は南北210m、東西275mであり、平成17年度の調査面積は31,800㎡である。調査前の現況は畑地、山林である。

今回の調査では、堅穴住居跡10軒（縄文時代6、古墳時代4）、土坑172基（縄文時代6、古墳時代2、時期不明164）、炉穴1基、地下式坑1基（中世）、炭焼窯跡6基（近代）、溝跡1条（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に25箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・鉢）、土師器（坏・高坏・碗・甕・甌）、土製品（土器片円盤・土器片錘・支脚）、石器（石鏃・磨製石斧・蔽石・凹石・磨石・砥石）、石製品（紡錘車）などである。

第2節 基本層序

調査区西部のO20a7区にテストピットを設定し、深さ2mまで掘り下げて基本土層（第3図）の観察を行った。土層は9層に分層でき、観察結果は以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土で、粘性・締まりとも普通である。層厚は20～30cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層で、ローム粒子を中量含み、粘性は普通で、締まりはやや強い。層厚は15～30cmである。

第3層は褐色を呈するソフトローム層で、粘性は普通で、締まりはやや強い。層厚は14～35cmである。

第4層は褐色を呈するハードローム層への漸移層である。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は10～20cmである。

第5層は褐色を呈するハードローム層で、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は10～20cmである。

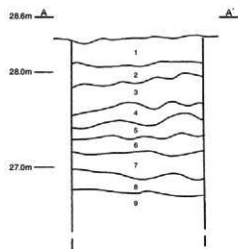
第6層は褐色を呈するハードローム層で、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は12～25cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層で、鹿沼バミスを微量含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は18～30cmである。

第8層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層で、鹿沼バミスを中量含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は15～25cmである。

第9層は褐色を呈するハードローム層で、細礫を微量含み、粘性は普通で、締まりは強い。下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構の多くは第2層上面で確認されている。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当該時代の遺構は、竪穴住居跡6軒、炉穴1基、土坑5基である。以下、遺構と遺物について記述する。

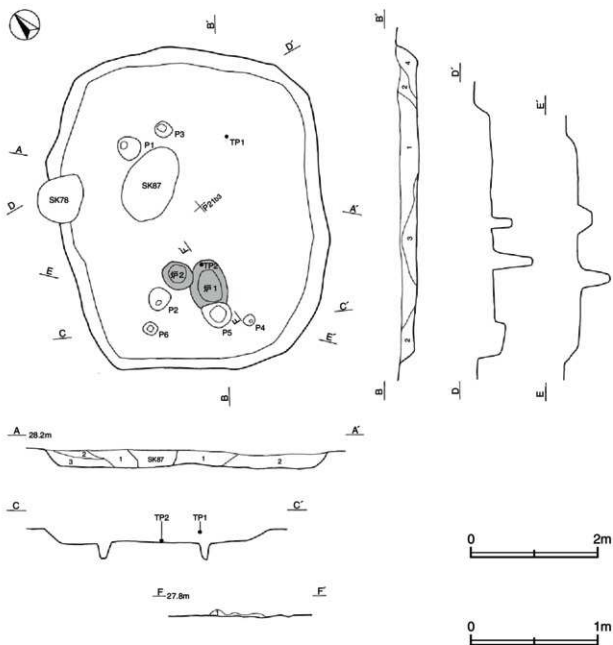
(1) 竪穴住居跡

第5号住居跡（第4・5図）

位置 調査区北西部のP21a2区、標高28.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第78・87号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.35mの隅丸長方形で、主軸方向はN-40°-Eである。壁高は20~29cmで、外



第4図 第5号住居跡実測図

傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。特に硬化した面は認められなかった。

炉 2か所。炉1は南西壁寄りの中央部に位置し、長径方向の南部をP5に掘り込まれている。長径70cm、短径60cmの楕円形で、地床炉である。長径方向は住居跡の主軸方向と同じである。炉2は炉1の西側に位置し、炉1の上端を若干掘り込んでいる。径50cmの円形で地床炉である。重複関係から炉1から炉2へ作り替えが行われたと考えられる。

炉1土層解説

- 1 におい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所。P1・P2は深さ64・52cmで、主柱穴と考えられる。P3～P6は深さ26～34cmで、本跡に伴うピットと考えられるが、性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況から埋戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片146点（深鉢）が出土している。TP1は中央部北東壁寄りの覆土上層、TP2は炉1の底面からそれぞれ出土しており、時期決定の指標となる土器である。

所見 時期は、出土土器から前期後半（浮島式期）と考えられる。



第5図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第5図）

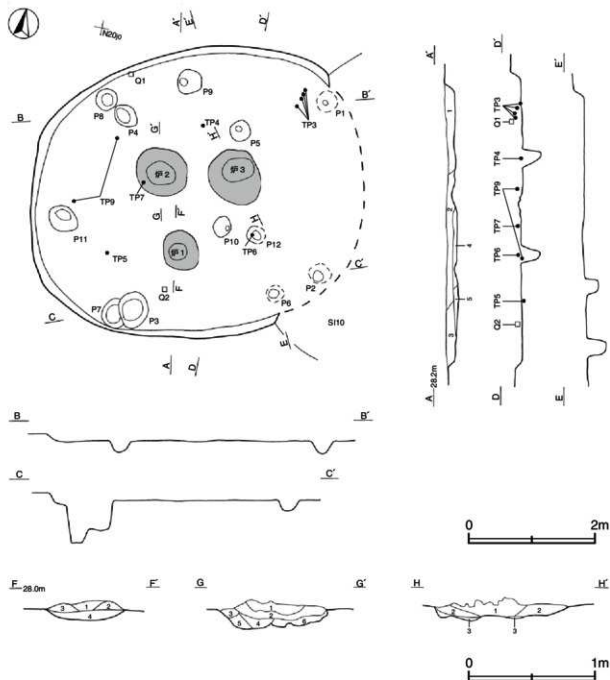
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	半縦竹管による入組文	覆土上層	PL5
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英	におい橙	普通	横位の半縦竹管文	炉1底面	

第6A・6B号住居跡（第6・7図）

位置 調査区西部のN200区、標高28.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部は第10号住居に掘り込まれており、床の遺存部とピットの位置から長径は5.34m、短径4.67mの楕円形と推測できる。床面に炉が3基確認されていること及びピットの配置から2回以上の炉の作り替えもしくは上屋の建て替えが行われた可能性がある。P5～P8を主柱穴とし、炉1・炉2を伴うものを第6A号住居跡、P1～P4を主柱穴とし、炉3を伴うものを第6B号住居跡とする。確認されたプランは第6B号住居



第6図 第6A・6B号住居跡実測図

のもので、壁高は22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 A号住居跡とB号住居跡の床面のレベル差は認められなかった。特に硬化した部分は認められなかった。

炉 3か所。炉1は中央部南寄りに位置し、長径68cm、短径58cmの楕円形で、床面を10cm掘り込んだ地床炉である。底面は皿状で、火を受けて赤変硬化している。炉2は中央部西寄りに位置し、径80cmの円形で、床面を30cm掘り込んだ地床炉である。底面は凸凹で、火を受けて赤変硬化している。炉3は中央部東寄りに位置し、長径94cm、短径80cmの楕円形で、床面を22cm掘り込んだ地床炉である。底面は凸凹で、火を受けて赤変硬化している。

炉1土層解説

1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量

炉2土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量

炉3土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 3 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 12か所。P1～P4は深さ20～35cmで、規模と配置からB号住居跡の支柱穴と考えられる。P5～P8は深さ14～34cmで、規模と配置からA号住居跡の支柱穴と考えられる。P9～P12の性格は不明である。

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックを含み、不自然な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片535点（深鉢）、土製品2点（土器片鉢、土器片円盤）、石器2点（磨製石斧、凹石）、剥片7点が出土している。その他、混入した土師器片2点も出土している。TP3は北東部の覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。TP4・TP6は中央部、TP5は南西部の床面から、TP9は北西部と西壁際の床面から出土した破片が接合したものである。TP7は炉2の覆土中からそれぞれ出土している。DP1・DP2は北東部の覆土中、Q1は北壁際の覆土上層、Q2は南壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。

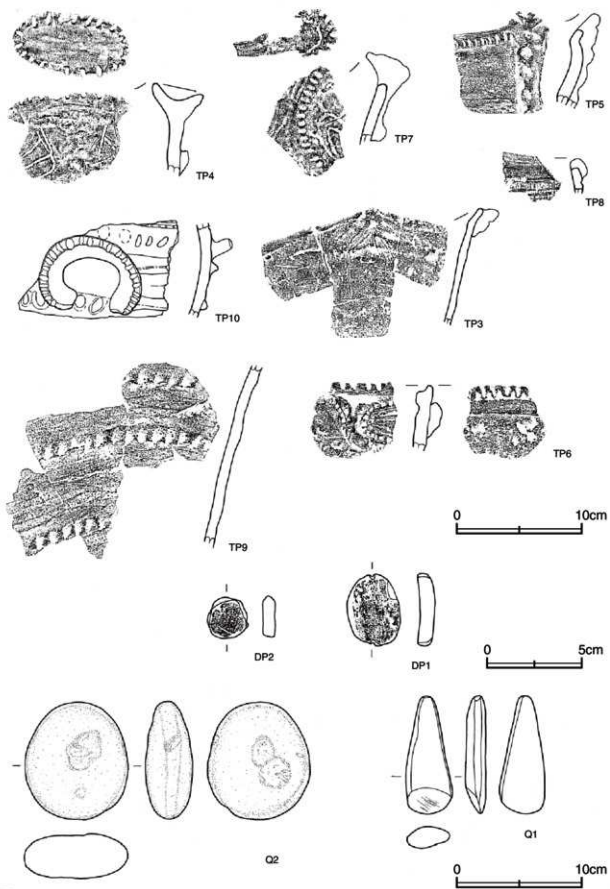
所見 A号住居跡では、炉が2か所検出されており、炉の作り替えが想定できる。B号住居跡はP1～P4を支柱穴とし、東側に拡張して建て替えられたものと考えられる。A・B号住居跡の出土土器に時期差は認められず、時期は、両住居跡とも中期前半（阿玉台I b式期）と考えられる。

第6A・6B号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部に突起 無文 補修孔あり	覆土中層・床面	PL5
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部に突起に刻目 角押文	床面	PL5
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部に刻目 首頂押圧を施した隆帯を流面厚から隆帯	床面	
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	隆帯に沿う角押文 口唇部内面に交互刺突文	P12確認面	PL5
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	流頂部に刻目のある隆帯 結節状縦文	炉2覆土中	
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口唇部直下に爪形文 横位二条の角押文	覆土中	
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	ヒダ状の輪積痕	中層から床面	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・黒曜	にぶい褐色	普通	角押文 刻目列 刻目のある隆帯文	覆土中	PL5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	土器片鉢	3.9	2.8	0.8	10.3	長石・石英・雲母	周縁部に研磨痕 上下に刻目	覆土中	PL6
DP2	土器片円盤	2.3	2.1	0.7	3.8	長石・石英・雲母	周縁部全周研磨	覆土中	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	磨製石斧	9.5	3.7	1.7	82.7	凝灰岩	刃部の表面に集中的な積層を施す以外は確面を残す	覆土上層	PL9
Q2	凹石	9.4	8.2	3.8	398.0	石英炭岩	表裏に凹み 周縁部に熱痕	覆土中層	



第7图 第6A·6B号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡 (第8・9図)

位置 調査区西部のO20a0区、標高28.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡を掘り込み、第9号住居に掘り込まれている。第177号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 東部が第9号住居に掘り込まれているため、床の遺存部とピットの位置から長径は4.45m、短径3.88mの楕円形と推測できる。長径方向はN-17°-Eである。壁高は7~10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

炉 中央部に位置している。長径80cm、短径60cmの楕円形で、床面を20cm掘りくぼめた地床炉である。底面は皿状で、火を受けて若干赤変している。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 |

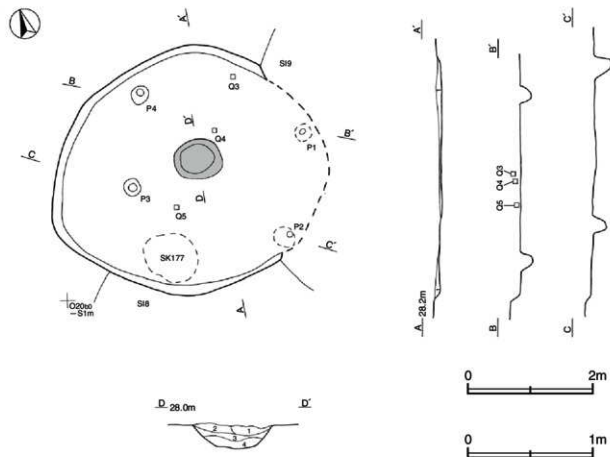
ピット 4か所。P1~P4は深さ19~30cmで、やや浅いが配置から支柱穴と考えられる。

覆土 単一層である。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

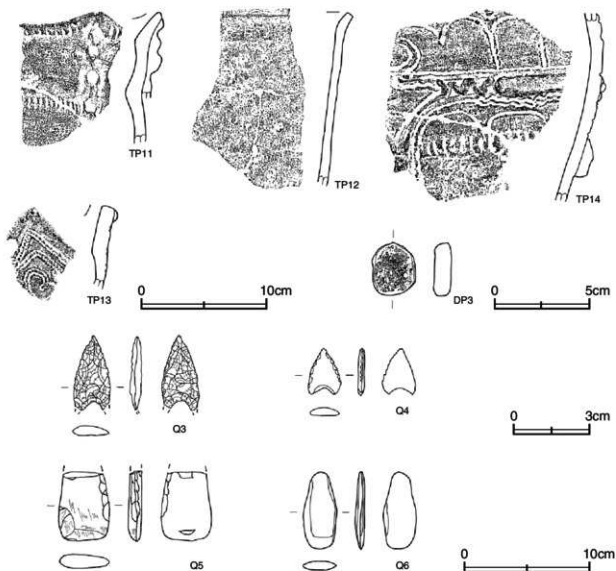
遺物出土状況 縄文土器片226点(深鉢)、土製品1点(土器片円盤)、石器4点(石鏃2、磨製石斧2)、剥片4点が出土している。土器片の多くは、炉付近の覆土中から出土している。Q3は北部、Q4は中央部、Q5



第8図 第7号住居跡実測図

は中央部南寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半（阿玉台Ⅱ式期）と考えられる。



第9図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	刻目列 指痕押圧による刻目を施した発帯	覆土中	PL5
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	無文 輪積痕を明瞭に残す	覆土中	
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁に沿って發帯貼り付け 二条の角押文	覆土中	PL6
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	發帯に沿って角押文 体部に横位の爪形文 発帯文	覆土中	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP3	土器片円盤	2.8	2.3	0.9	6.7	長石・石英	周縁部全周研磨	覆土中	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	石鏃	3.0	1.5	0.4	(1.9)	安山岩	四基無茎鏃 両面押圧剥離 基部の一部を欠損	覆土中層	PL9
Q4	石鏃	1.9	1.3	0.3	(0.6)	トロトロ石	四基無茎鏃 表面に押圧剥離痕 表面の隅整痕不明	覆土中層	PL9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	磨製石斧	(5.5)	4.0	1.0	(37.7)	凝灰岩	刃部は表面を強く研磨し、裏面は平面に研磨しており片刃に広い奥縁部欠け	覆土中層	PL9
Q6	磨製石斧	6.2	2.6	0.7	18.5	凝灰岩	小断面、刃部は表面を強く研磨し、裏面は平面に研磨しており片刃に広い	覆土中	PL9

第8号住居跡 (第10・11図)

位置 調査区西部のO20b0区、標高28.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7・9号住居、第178号土坑に掘り込まれている。第177号土坑とも重複しているが新旧関係は不明である。

規模と形状 北部が第7・9号住居に掘り込まれているため明確ではないが、遺存する壁から長径4.80m、短径4.30mの楕円形と推測できる。長径方向はN-53°-Wである。壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

炉 中央部の南壁寄りに位置している。床面に焼土の広がりが認められたため、床面を炉床とする地床炉と判断した。第178号土坑に掘り込まれており、西半部は失われている。平面形は、径80cmほどの円形と推測できる。

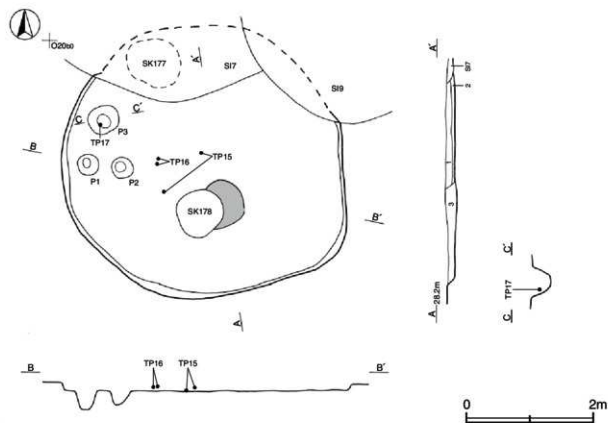
ピット 3か所。P1～P3は深さ22～30cmで、西壁際に集中している。性格は不明である。

覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック微量
2 褐色 ロームブロック中量

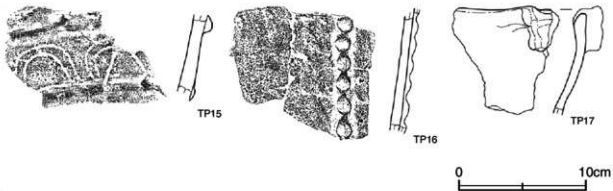
- 3 明褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量



第10図 第8号住居跡実測図

遺物出土状況 縄文土器片162点（深鉢）、石器1点（磨製石斧）、剥片1点が出土している。TP15は中央部と中央部西寄りの床面からそれぞれ出土した破片が接合したものである。TP16は中央部西寄りの覆土下層から出土している。TP17はP3の覆土中層から出土しており、時期決定の指標となる土器である。

所見 時期は、出土土器から中期前半（阿玉台Ⅱ式期）と考えられる。



第11図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・燧石	橙	普通	横位の隆帯に沿って二条の角押文	床面	PL5
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・燧石 黒色粘土	にぶい黄橙	普通	指頭押文を施した隆帯文 体部ナデ	覆土下層	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	無文 口縁部に突起	P3覆土中層	

第9号住居跡（第12図）

位置 調査区西部のO21a1区、標高28.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7・8号住居跡を掘り込んでいる。第10号住居とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 遺存する壁の様相及び炉と柱穴の配置から、平面形は長径5.60m、短径4.84mの不整楕円形と推測できる。長径方向はN-10°-Wである。壁高は20~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 は平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

炉 中央部に位置している。長径82cm、短径70cmの楕円形で、床面を浅く掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて若干赤変している。

ピット 7か所。P1~P4は深さ24~35cmとやや浅いが、配置から主柱穴と考えられる。P5~P7の性格は不明である。

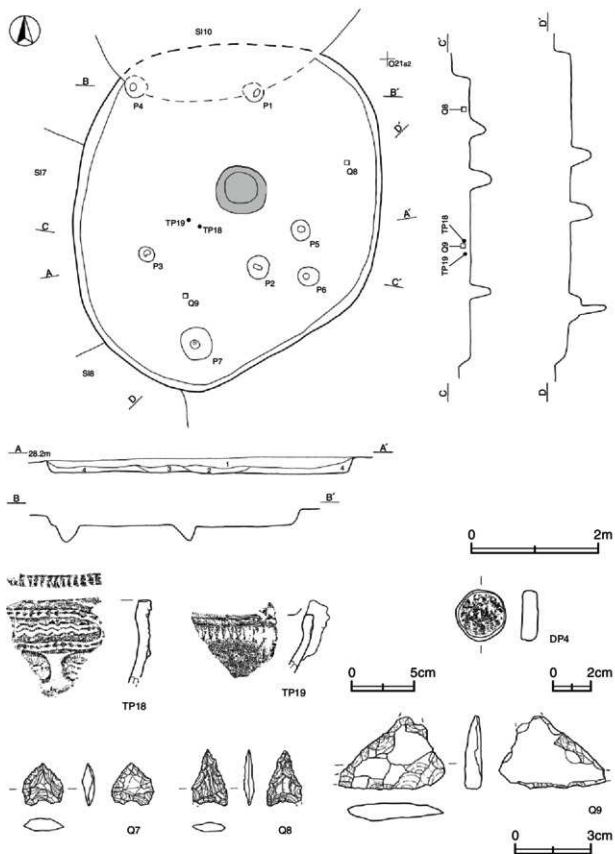
覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片243点（深鉢）、土製品1点（土器片円盤）、石器3点（石鎌2、石匙1）、剥片2点が出土している。TP18・TP19は中央部、Q8は東壁際、Q9は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半（阿玉台Ⅱ式期）と考えられる。



第12図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

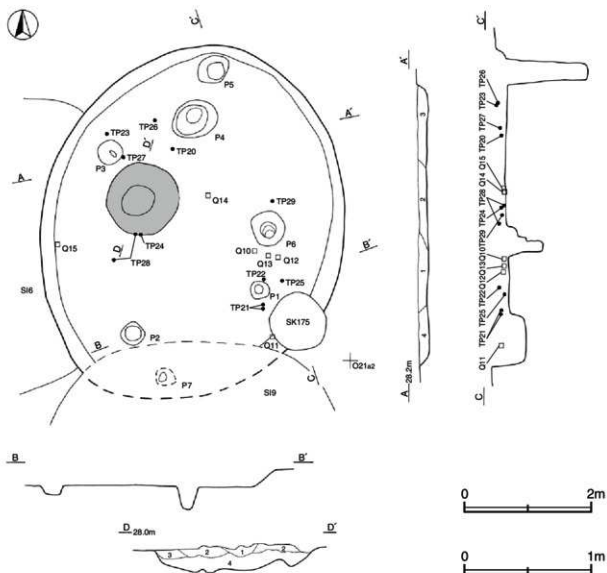
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部具動脈線による割目 口縁部輪内形の区画内に二条の角押文を施す	覆土下層	PL6
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	口縁部割目列 小突起口縁の底面部から前面三角形状の隆起を呈す	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP4	土器片円蓋	2.7	2.7	0.9	7.5	長石・石英・雲母	周縁部全周研磨	覆土中	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	石鏃	1.7	1.6	0.5	1.1	チャート	四基無茎鏃 両面押圧剥離	覆土中	
Q8	石鏃	2.2	(1.4)	0.4	(0.8)	チャート	四基無茎鏃 両面押圧剥離	覆土下層	
Q9	石匙	(2.9)	(4.2)	0.7	(6.4)	石英	横長石匙 両面押圧剥離	覆土下層	

第10号住居跡 (第13・14図)

位置 調査区西部のN21j1区、標高28.0mの台地平坦部に位置している。



第13図 第10号住居跡実測図

重複関係 第6号住居跡を掘り込み、第175号土坑に掘り込まれている。第9号住居とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 南部が第9号住居と重複しているため明確ではないが、遺存する壁から長径は5.50m、短径4.86mの楕円形と推測できる。長径方向はN-6°-Wである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

炉 北西部に位置し、径116cmの円形で、床面を22cm掘り込んだ地床炉である。底面は凸凹で、火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック中量、ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 |

ピット 7か所。P1～P4は深さ15～36cmと不均一であるが、配置から支柱穴と考えられる。P5～P7の性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |

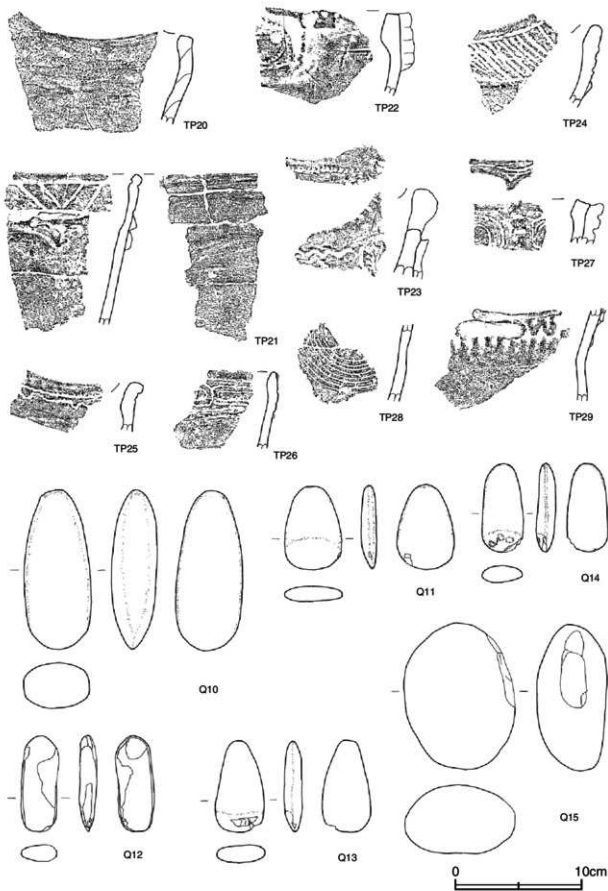
遺物出土状況 縄文土器片193点（深鉢）、石器6点（磨製石斧5、敲石1）が北西部の布付近と南東部の壁際を中心に出土している。TP20・TP23・TP26・TP27は北西部の覆土上層から下層にかけて、TP21・TP22・TP25、Q11は南東部の覆土上層から中層にかけて、Q14は中央部の床面、Q15は西部壁際の床面、TP29、Q10・Q12・Q13はP6付近の覆土下層からそれぞれ出土している。TP24・TP28は炉の覆土中から出土しており、時期決定の指標となる土器である。

所見 時期は、出土土器から中期前半（阿玉台I b式期）と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	不良	無文	覆土下層	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部隆帯による区画内角稜文 口唇部内面に横溝一条の角稜文	覆土上層	PL5
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部隆帯による楕円形区画内角稜文	覆土上層	PL5
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	稜目のある突起 口唇部に角稜文 口縁部に縦溝状の縦文	覆土上層	PL5
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	有筋沈線文 断面三角形状の隆帯	炉覆土中	
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	有筋沈線文	覆土中層	
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部断面三角形状の隆帯による区画内に角稜文 口唇部有筋沈線文 口縁部楕円形状の有筋沈線文と凹形付背文 稜目のある隆帯隆帯付背	覆土上層	
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部有筋沈線文 口縁部楕円形状の有筋沈線文と凹形付背文 稜目のある隆帯隆帯付背	覆土上層	
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐	普通	磨面状工具による角稜文	炉覆土中	
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	隆帯文 輪縁部に刻目列	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	磨製石斧	12.8	5.4	3.7	378.0	凝灰岩	全面を丁寧に研磨 刃部にわずかな刃こぼれ	覆土下層	PL9
Q11	磨製石斧	6.7	4.6	1.2	55.1	凝灰岩	小形品 刃部は表面を強く研磨し、裏面は平坦に研磨しており片刃に深い 刃部の一部欠け	覆土上層	PL9
Q12	磨製石斧	7.7	3.0	1.2	(55.1)	凝灰岩	小形品 刃部は表面を強く研磨し、裏面は平坦に研磨しており片刃に深い 刃部の一部欠け	覆土下層	PL9
Q13	磨製石斧	7.4	3.9	1.5	(60.7)	凝灰岩	小形品 刃部は表面を強く研磨し、裏面は平坦に研磨しており片刃に深い 刃部の一部欠け	覆土下層	PL9
Q14	磨製石斧	7.2	3.3	1.5	(49.7)	凝灰岩	小形品 刃部は表面を強く研磨し、裏面は平坦に研磨しており片刃に深い 刃部の一部欠け	床面	PL9
Q15	敲石	11.7	8.9	5.6	844.0	安山岩	側縁部に敲打痕	床面	



第14图 第10号住居跡出土遺物実測図

表2 縄文時代整穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長さ×幅)	壁高 (cm)	床面	段溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
								主柱穴	出入口	ピット	炉				
5	P21a2	N-40°-E	楕長方形	5.10×4.35	20~29	平坦	-	-	-	6	2	人為	縄文土器	前期後半	本跡→SK78・87
6	N20d	N-16°-W	[楕円形]	[5.34]×4.67	22	平坦	-	4	-	4	3	人為	縄文土器 磨製石斧	中期前半	本跡→S110
7	O20a0	N-17°-E	[楕円形]	[4.45]×3.88	7~10	平坦	-	4	-	1	-	縄文土器 土器片・磨製石斧	中期前半	S18→本跡→S19 SK177→新田不明 跡→S17→S19→SK78 SK177→新田区	
8	O20b0	N-53°-W	[楕円形]	4.80×[4.30]	12	平坦	-	-	-	3	1	自然	縄文土器	中期前半	
9	O21a1	N-10°-W	[不整形]	[5.60]×4.84	20~26	平坦	-	4	-	3	1	自然	縄文土器 土器片・磨製石斧	中期前半	S18→S17→本跡 S110→新田不明
10	N21j	N-6°-W	[楕円形]	[5.50]×4.86	15	平坦	-	4	-	3	1	自然	縄文土器 磨製石斧	中期前半	S16→本跡→SK175 S19→新田不明

(2) 炉穴

第1号炉穴 (SK173) (第15図)

位置 調査区南部のP23e8区、標高28.0mの台地縁部に位置している。

規模と形状 長径2.78m、短径0.97mの長楕円形で、長径方向はN-45°-Eである。深さは火焚部が38cm、足場が22cmである。火焚部は足場の東側を15cm掘り下げて使用しており、底面は火を受けて赤変硬化している。足場の底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

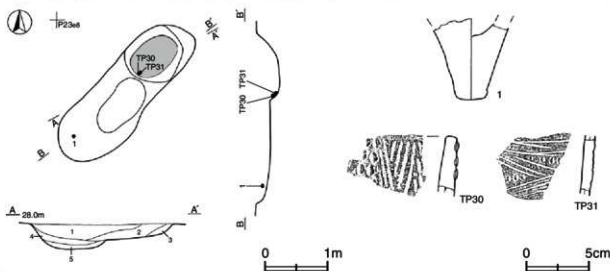
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片32点(深鉢)、石器1点(敲石)が出土している。早期の田戸下層式土器が主体で、混入した前期黒浜式土器の胴部片6点も検出されている。1は足場の西寄りの覆土下層、TP30・TP31は火焚部西寄りの底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期中葉(田戸下層式期)と考えられる。



第15図 第1号炉穴・出土遺物実測図

第1号炉穴出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	ヘラ状工具による縦位の磨き	覆土下層	5% PL5

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	縦位の沈線文 爪形文	底面	
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐	普通	斜位の平行沈線文 刺突文	底面	PL5

(3) 土坑

第74号土坑 (第16・17図)

位置 調査区南東部のO25h1区、標高26.0mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸3.50m、短軸2.80mの隅丸長方形で、長軸方向はN-54°-Eである。深さは63cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

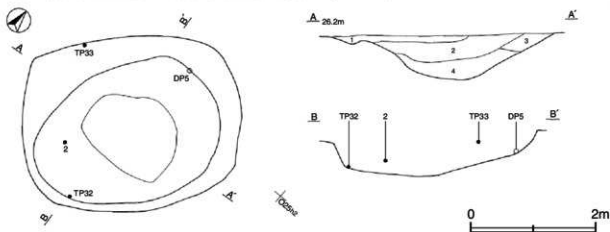
覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 縄文土器片245点(深鉢)、土製品1点(土器片錘)、石器1点(磨石)、礫1点が出土している。TP33は北西壁際の覆土上層、DP5は北コーナー部の底面からそれぞれ出土している。TP32は南コーナー部の底面から出土しており、時期決定の指標となる土器である。2は南西部の覆土中層、TP35・TP36は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台IV式期)と考えられる。



第16図 第74号土坑実測図

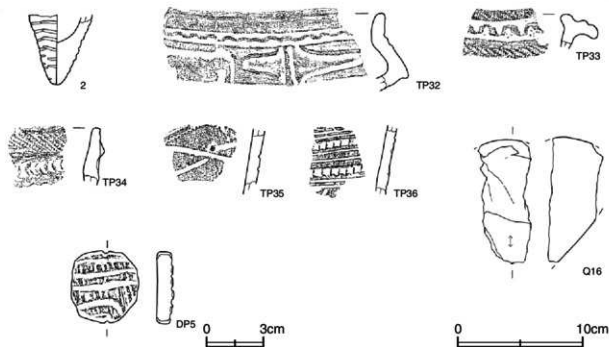
第74号土坑出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	沈線文	覆土中層	5% PL5

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部交互刺突文 押引沈線による文様施文	底面	PL6
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	幅の広い口縁部に交互刺突文 単筋縄文RL	覆土上層	
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部単筋縄文RL 横位の微帯に沿って爪形文	覆土中	
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	沈線文 貝殻腹線文	覆土中	
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線文 刺突文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP5	土器片鎌	3.9	3.5	0.9	14.7	橙	周縁部研磨 上下に割み	底面	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	磨石	(9.9)	(4.3)	(4.8)	(206.0)	砂岩	磨面1か所	覆土中	



第17図 第74号土坑出土遺物実測図

第81号土坑 (第18・19図)

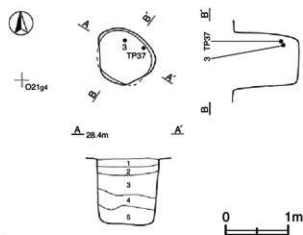
位置 調査区南西部のO21f4区、標高28.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.00m、短径0.88mの楕円形で、長径方向はN-55°-Wである。深さは100cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量



第18図 第81号土坑実測図

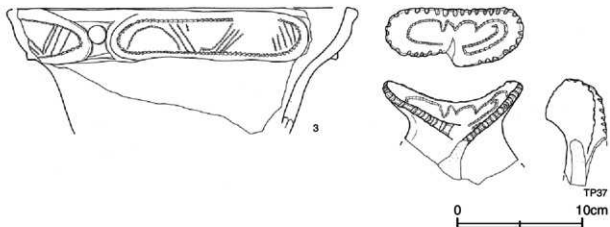
遺物出土状況 縄文土器片48点(深鉢)、剥片1点が

出土している。3は北部、TP37は北東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半(阿玉台I b式期)と考えられる。

第81号土坑出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	[28.0]	(10.0)	—	長石・石英・雲母・ 磁石	明赤褐色	普通	口縁部輪凹形区画者に筋節沈線文を施文 口縁部施文	覆土下層	10% PL5
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考			
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	波頭部に斜目のある突起 口縁部に角押文	覆土下層	PL5			



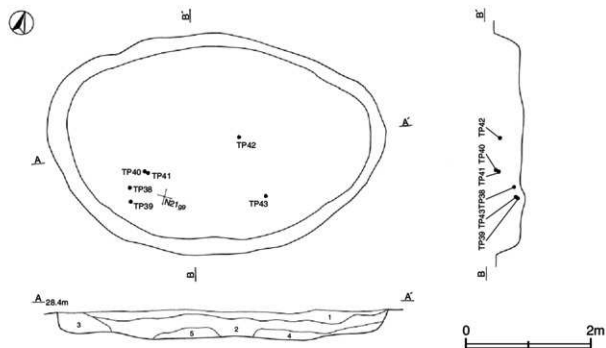
第19図 第81号土坑出土遺物実測図

第91号土坑 (第20・21図)

位置 調査区西部のN21f9区、標高28.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径5.40m、短径3.50mの楕円形で、長径方向はN-74°-Eである。深さは45cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況を示す人為堆積である。



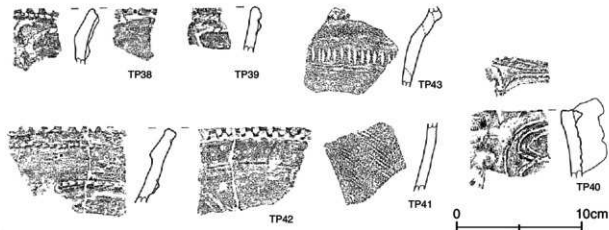
第20図 第91号土坑実測図

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	4 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック微量	5 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片190点(深鉢)、剥片4点が南半部に集中して出土している。TP38~TP43は南部の覆土上層から下層にかけて出土している。TP42は中央部の覆土上層, TP43は南東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期前半(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第21図 第91号土坑出土遺物実測図

第91号土坑出土遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP38	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に肩目と角押文 内面に角押文 口縁部楕円形区画帯に一条の角押文を施文	覆土下層	
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部楕円形区画帯に一条の角押文を施文	覆土下層	
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部楕円形区画帯に一条の角押文 口唇部二条の角押文	覆土上層	
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	単節縄文RL 結節文	覆土上層	
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部内面交互角押文と一条の角押文 口縁部楕円二条の区画帯に沿って角押文を施文	覆土上層	
TP43	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	輪横痕に沿って肩目列を施文	覆土下層	

第115号土坑(第22図)

位置 調査区西部のN20g8区, 標高28.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.25m, 短径1.82mの楕円形で, 長径方向はN-13°-Eである。深さは18cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

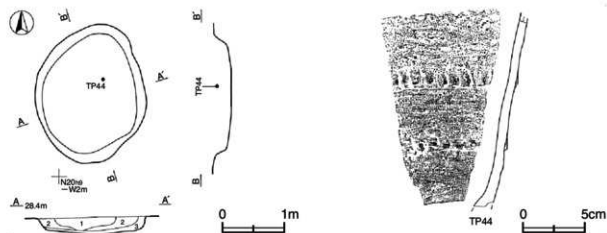
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量	3 褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 縄文土器片26点(深鉢)が北東部に集中して出土している。TP44は中央部北東寄りの覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期前半(阿玉台Ⅰb式期)と考えられる。



第22図 第115号土坑・出土遺物実測図

第115号土坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP44	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい橙	普通	ヒズ状の輪積痕 内面板状工具によるナデ	覆土中層	PL5

第116号土坑（第23図）

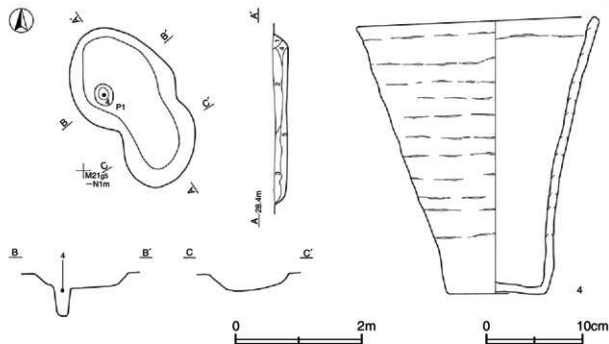
位置 調査区北西部のM21f5区、標高28.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.70m、短径1.55mの瓢箪形で、長径方向はN-30°-Wである。深さは25cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。ビット1か所が西壁際に確認でき、深さは44cmである。

覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |



第23図 第116号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器1点(深鉢), 縄文土器片28点(深鉢)が出土している。4はビット上面から、押しつぶされた状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期前半(阿玉台I b式期)と考えられる。

第116号土坑出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
4	縄文土器	深鉢	24.8	29.0	10.2	長石・石英	明赤陶	普通	無文	P4上面	80% PL8

第171号土坑(第24図)

位置 調査区南西部のP21a1区, 標高28.0mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 径1.49mの円形である。底面は有段で深さは68cmである。北西部は確認面から深さ20cmほどで平坦な面を持ち, 南東部はその平坦面から深さ40cmほど掘り込まれている。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

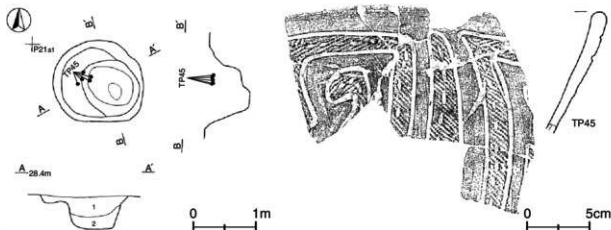
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器1点(深鉢), 縄文土器片18点(深鉢)が出土している。TP45は中央部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から後期初頭(称名寺1式期)と考えられる。



第24図 第171号土坑・出土遺物実測図

第171号土坑出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP45	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色辰子	にぶい橙	普通	扉面縄文L形縄文幾何点文 沈線文 無文部磨き	覆土上層	PL6

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向	規模(m, 深さ42cm)		壁面	底面	ビット	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
74	O25h1	隅丸長方形	N-54°-E	3.50×2.80	63	縄斜	皿状	-	自然	縄文土器 土器片鉢	
81	O21f4	楕円形	N-55°-W	1.00×0.88	100	直立	平坦	-	自然	縄文土器	

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
91	N21f9	楕円形	N-74°-E	5.40×3.50	45	外傾	平坦	-	人為	縄文土器	
115	N20g8	楕円形	N-13°-E	2.25×1.82	18	外傾	平坦	-	自然	縄文土器	
116	M21f5	楕円形	N-30°-W	2.70×1.55	25	傾斜	平坦	1	人為	縄文土器	
171	P21a1	円形	-	1.49×1.39	68	外傾	有段	-	人為	縄文土器	

2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑2基が確認されている。これらの遺構は、調査区の南東部に標高27.0mの台地縁辺部に住居跡4軒、調査区の北西部で標高28.2mの台地平坦部に土坑2基がそれぞれ分布している。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第25・26図)

位置 調査区南東部のO23c0区、標高27.0mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長軸6.95m、短軸6.75mの方形で、主軸方向はN-33°-Wである。壁高は39~52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、東部寄りと北西・南西コーナー部付近を除いて踏み固められている。

炉 中央部北壁寄りに付設された地床炉である。P1とP4の中間に位置し、長径91cm、短径58cmの楕円形で、床面を17cm掘り込んでいる。長径方向は住居跡の主軸方向と同じである。

炉土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子中量、ロームブロック少量	3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	4 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量

ピット 5か所。P1~P4は深さ67~84cmで、規模と位置から主柱穴である。P5は深さ19cmで、南壁際中央部に位置していることや硬化面の広がりから、出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 南壁側の西コーナー部に位置しており、長径91cm、短径84cmの円形で、深さは52cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 褐色	ロームブロック・炭化物微量	5 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ローム粒子多量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	焼土粒子少量、炭化物微量	7 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子微量		

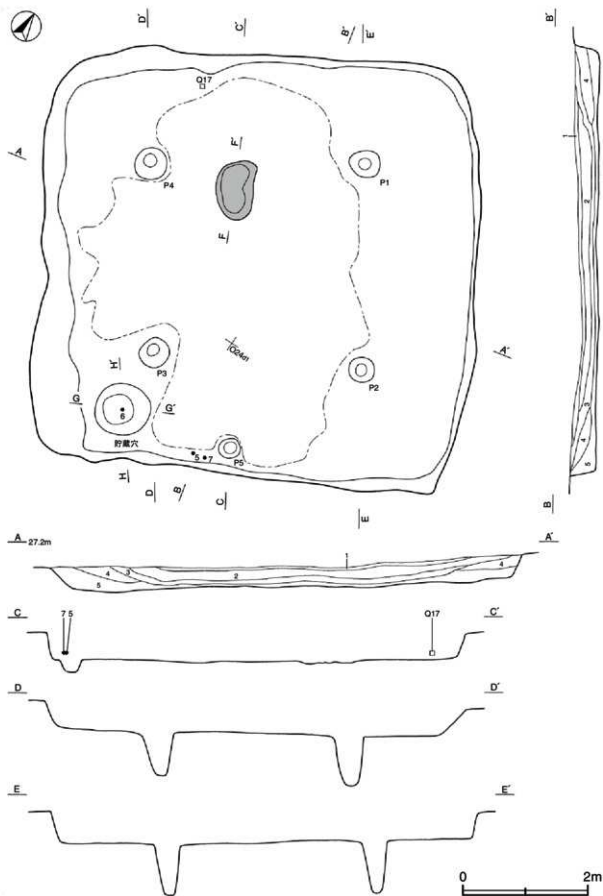
覆土 5層に分層できる。周囲から土が流入した堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

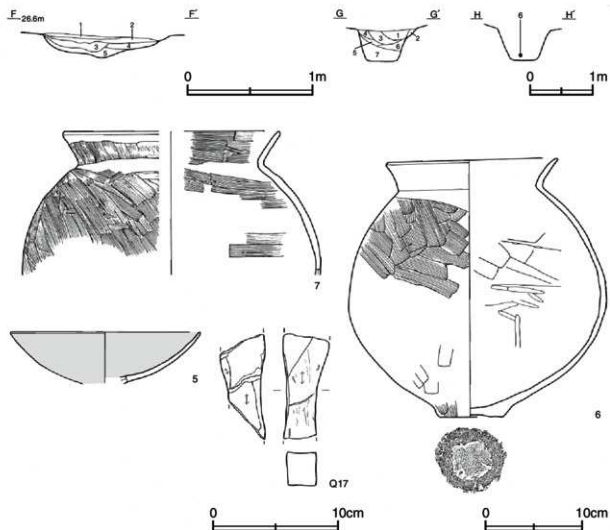
1 黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量	5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片38点(甕37、器台1)、石器1点(砥石)が出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片8点、弥生土器片5点も出土している。6は貯蔵穴の覆土下層から出土しており、時期決定の指標となる土器である。5・7は南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期後半と考えられる。



第25図 第1号住居跡実測図



第26図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土師器	高坏	15.0	(4.1)	—	長石・石英	黄橙	普通	体部へラ削り残ナデ 内面横ナデ	覆土下層	45%
6	土師器	甕	17.8	27.4	6.7	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部外面へケ目調整 内面へラナデ	貯蔵穴 覆土下層	85% PL8
7	土師器	甕	[17.0]	(11.5)	—	長石・石英・雲母・ 赤黒粘土	橙	普通	体部外面へケ目調整 内面へケ目調整残ナデ	覆土下層	15%

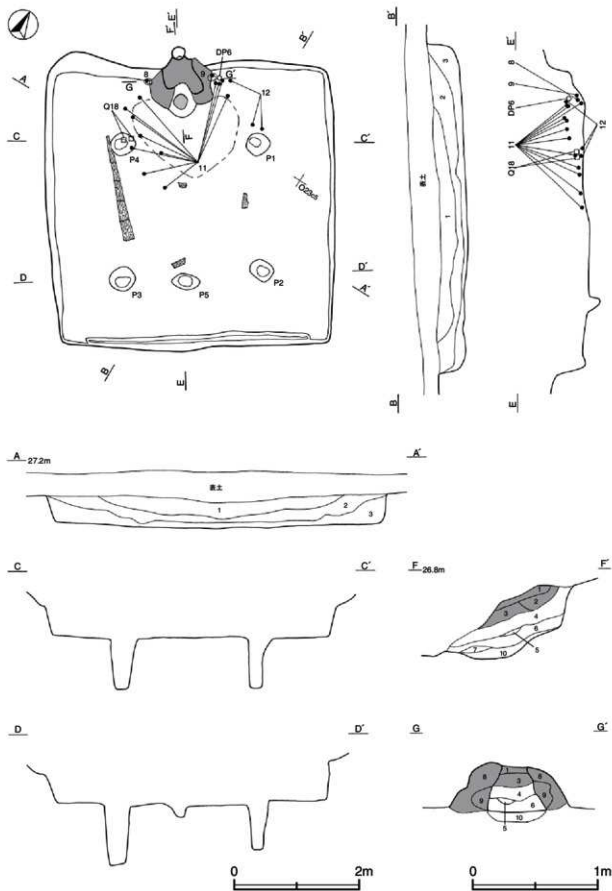
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
Q17	砥石	(8.4)	(3.5)	2.2	(78.2)	凝灰岩	端部4面を使用		覆土下層	PL9

第2号住居跡（第27・28図）

位置 調査区南東部のO23c4区、標高27.8mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長軸4.49m、短軸4.44mの方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は40~62cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈前面が踏み固められている。壁溝が南壁下にだけ確認されている。炭化材が中央部及びP3からP4にかけての床面から検出されている。



第27図 第2号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで112cm、燃焼部幅44cmである。袖部は床面と同じ高さの地山の上に粘土ブロックを積み上げて構築されている。火床部は床面から10cm掘り込み、ロームを埋め戻しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第1～3層は天井部の構築土、第8・9層は袖部の構築土であり、第10層は掘方への埋土である。

竈土層解説

1 黄褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量
2 黄褐色	粘土ブロック多量、炭化物中量、焼土ブロック少量	8 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3 黄褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 にぶい赤褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子微量
4 褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
5 褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量		
6 にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量		

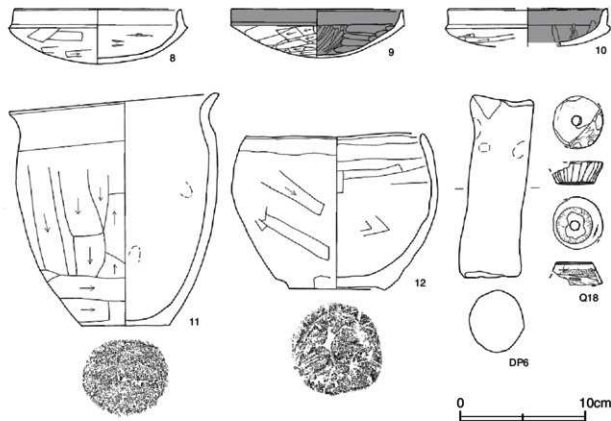
ピット 5か所。P1～P4は深さ72～92cmで、規模と位置から主柱穴である。P5は深さ15cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。

覆土 3層に分層できる。周囲から土が流入した堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	3 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片76点(坏17, 甕59), 須恵器片2点, 石器1点(磨石), 石製品1点(紡錘車), 土製品1点(支脚)が出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片11点, 弥生土器片19点も出土している。遺物は竈周辺に集中して出土しており、8・9は竈両袖脇の覆土下層, Q18は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。



第28図 第2号住居跡出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。また、床面から炭化材が出土していることから、焼失住居とみられる。

第2号住居跡出土土物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
8	土師器	坏	13.2	4.4	—	長石・石英・赤色粒子	にぶ肌	普通	体部外面へラ削り残ナデ 内面へラナデ	覆土下層	90% PL7
9	土師器	坏	13.6	3.9	—	長石・石英・赤色粒子	にぶ肌	普通	体部外面へラ削り残ナデ 内面へラ削り残ナデ	覆土下層	80% PL7
10	土師器	坏	[12.6]	(3.0)	—	長石・石英	灰黄肌	普通	体部外面ナデ 内面ナデ後放射状のへラ削り	覆土中層	10%
11	土師器	甕	16.8	18.4	6.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中層 下層	70% PL7
12	土師器	甕	14.0	12.4	7.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	80% PL7

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP6	支脚	14.6	4.7	4.9	42.7	長石・石英・雲母	ナデ 一部へラナデ	覆土中層	PL6

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	紡錘車	(4.2)	0.8	1.8	(28.0)	滑石	側面の一部に線刻による矢羽根状の文様	覆土下層	PL9

第3号住居跡(第29・30図)

位置 調査区南東部のO23e2区、標高27.0mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長軸4.72m、短軸4.57mの方形で、主軸方向はN-61°-Wである。壁高は80cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈前面から南東壁際まで中央部が踏み固められている。壁溝が、南コーナー部下で途切れる以外は、巡っている。炭化材が南西壁際と南コーナー部下の床面から検出されている。

竈 北西壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで110cm、燃焼部幅42cmである。袖部は床面と同じ高さの地山の上に粘土ブロックを積み上げて構築されている。火床部は床面から10cm掘り込み、ローム土を埋め戻しており、火床部は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、ほぼ直立している。

第1・2層は天井部の崩落土、第12・13層は袖部の構築土であり、第14層は掘方への埋土である。

覆土層解説

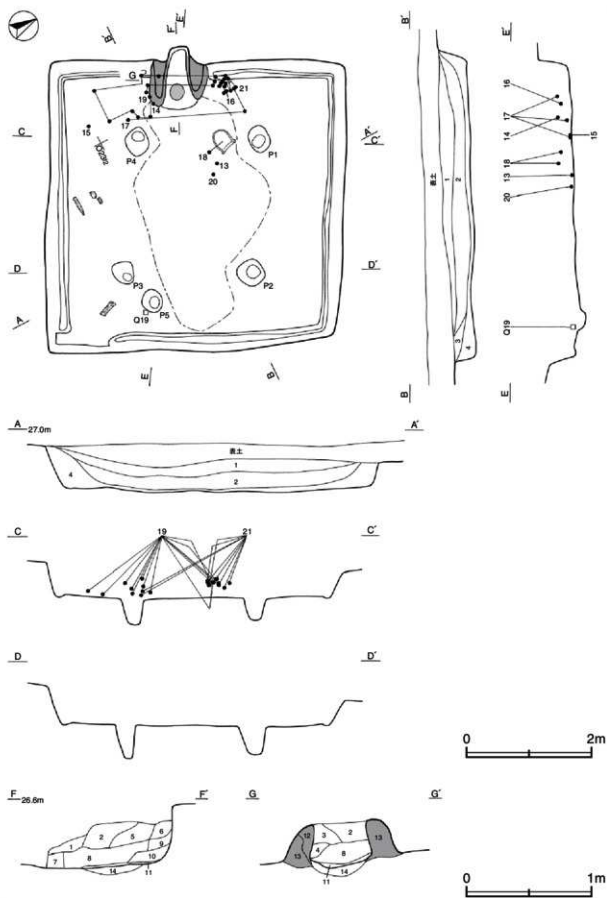
1	にぶ肌褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8	極暗赤褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量
2	灰黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	9	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
3	にぶ肌褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	10	暗赤褐色	炭化粒子中量、焼土ブロック少量
4	極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量
5	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子少量	12	にぶ肌褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
6	暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量	13	灰黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
7	極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	14	暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ20～30cmで、規模と位置から主柱穴である。P5は深さ16cmで、南壁際中央部西寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。

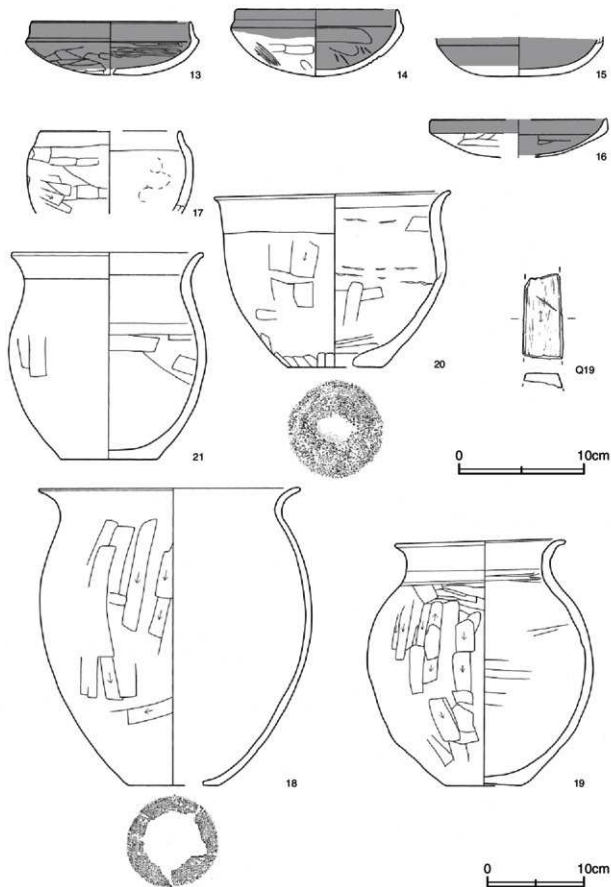
覆土 4層に分層できる。周囲から土が流入した堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	黒色	ローム粒子微量	3	褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ロームブロック中量	4	褐色	ロームブロック中量



第29图 第3号住居跡实测图



第30図 第3号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片108点(坏15, 甕91, 高坏2)が出土している。その他, 流れ込んだ縄文土器片51点, 弥生土器片2点も出土している。遺物は甕の袖部周辺と, 中央部西寄りに集中している。14・16・19・21は甕袖部周辺の覆土中層から床面に掛けて, 13・15・20, Q19は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から後期中葉と考えられる。床面から炭化材が出土していることから, 焼失住居とみられる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
13	土師器	坏	12.6	4.3	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部へう割り後ナデ 内面へう磨き 底部を敷置に空孔ナデ	覆土下層	95% PL7
14	土師器	坏	12.8	5.4	—	長石・石英・雲母	黄橙	普通	体部へう割り後ナデ 内面ナデ 底石貼付	覆土中層	90% PL7
15	土師器	坏	—	(3.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部へう割り後ナデ 内面へう磨き	覆土下層	80% PL7
16	土師器	坏	[13.9]	(3.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部へう割り後ナデ 内面ナデ	覆土中層	30%
17	土師器	碗	[11.0]	(6.7)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部へう割り後ナデ 内面ナデ	覆土中層 ～下層	20%
18	土師器	甕	27.4	31.4	9.6	長石・石英	黄橙	普通	体部上半縦段のへう割り 下半縦段のへう割り 底部を敷置に空孔ナデ	覆土中層 ～下層	85% PL8
19	土師器	甕	17.8	25.9	8.1	長石・石英・細礫	黄橙	普通	体部縦段のへう割り 後上半縦ナデ 内面縦段のへう割り 後ナデ	覆土中層 ～下層	70% PL8
20	土師器	甕	18.7	15.0	7.5	長石・石英・赤毛粒子・細礫	にぶい橙	普通	体部上半へう割り後ナデ 下半へう割り 内面ナデ 底部を敷置に空孔ナデ	覆土下層	90% PL8
21	土師器	甕	15.0	16.6	7.8	長石・石英	橙	普通	体部上半縦段のへう割り 下半へう割り後ナデ	覆土中層 ～下層	60% PL7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q19	砥石	(6.8)	(3.1)	(1.2)	(31.2)	凝灰岩	砥面3面	覆土下層	

第4号住居跡(第31・32図)

位置 調査区南東部のO23f9区, 標高26.7mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長軸5.82m, 短軸5.72mの方形で, 主軸方向はN-39°-Wである。壁高は32~45cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦な貼床で, 炉の周囲と出入り口ピット周辺が踏み固められている。

炉 中央部北寄りに付設された地床炉である。長径68cm, 短径52cmの楕円形で, 床面を7cm掘り込んでいる。長径方向は住居跡の主軸方向と同じである。

炉土層解説

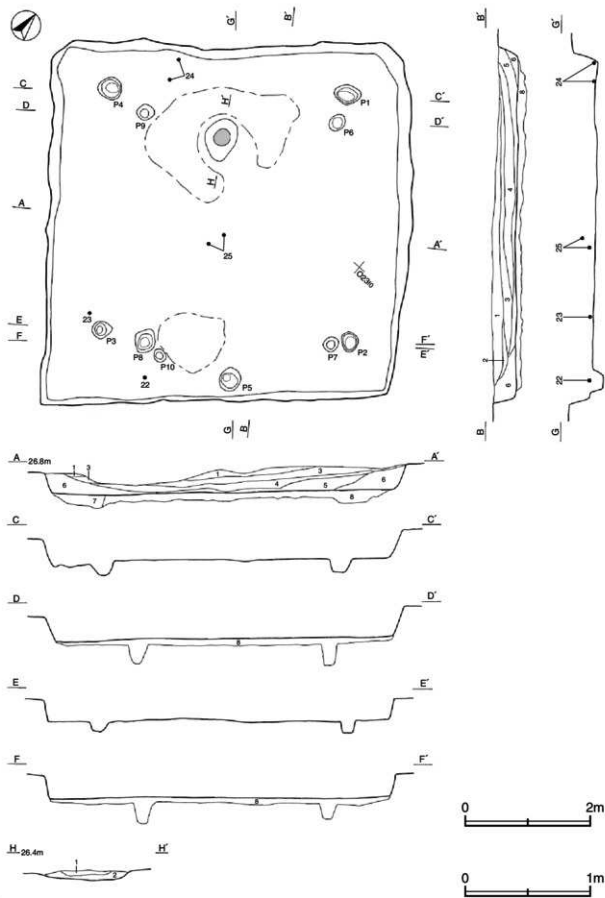
1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 2 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量

ピット 10か所。P1~P4は深さ14~20cmと浅いが, 位置から主柱穴である。P5は深さ18cmで, 南壁際中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットである。掘方の調査時に, 貼床下でP6~P10が確認された。P6~P9は深さ25~35cmで, 位置から旧住居の主柱穴と考えられる。P10は深さ16cmで, 性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示す自然堆積である。第7・8層は貼床の構築土である。

土層解説

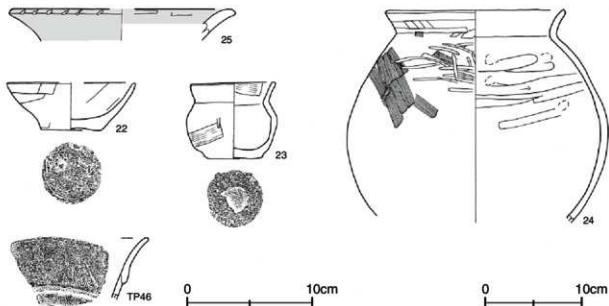
1 黒褐色 ローム粒子微量 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
2 暗褐色 ローム粒子少量 6 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量 7 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
4 黒褐色 ロームブロック少量 8 褐色 ロームブロック中量



第31图 第4号住居跡実測图

遺物出土状況 土師器片286点(坏1, 甕284, 埴1), 石器1点(砥石)が出土している。その他, 流れ込んだ縄文土器片17点, 弥生土器片1点も出土している。遺物は中央部の覆土下層から床面に集中して出土している。22・23は中央部の覆土下層, 24は炉周辺の床面にそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期後半と考えられる。掘方の調査でP6~P9が確認できたことから, 本跡は建て替えが行われており, 東西方向と北側に拡張されているものとみられる。



第32図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
22	土師器	坏	[10.2]	3.8	4.8	長石・石英	にぶい橙	普通	体部ハケ目調整後横ナデ 内面ナデ	覆土下層	50% PL7
23	土師器	埴	6.5	6.2	4.6	長石・石英・雲母	黄橙	普通	体部ハケ目調整後横ナデ 内面ナデ	覆土下層	100% PL7
24	土師器	甕	18.4	(22.5)	—	長石・石英・赤色靑子・雲母	浅黄橙	普通	体部ハケ目調整後ヘウ巻き 内面ナデ	覆土中層	75% PL8
25	土師器	甕	[17.4]	(2.6)	—	長石・石英・雲母・赤色靑子	浅黄	普通	口唇部割み	覆土上層	5%
番号	種別	器種	胎土			色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
TP46	土師器	甕	長石・石英			橙	普通	体部ハケ目調整 内面ナデ	覆土中層		

表4 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	敷居(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古・新)	
								主柱穴	出入口	ピット 炉・竈					
1	O23c0	N-33°-W	方形	6.95×6.75	39~52	平坦	—	4	1	—	炉1	自然	土師器	前期後半	
2	O23c4	N-35°-W	方形	4.49×4.44	40~62	平坦	一部	4	1	—	竈1	自然	土師器 紡錘車	後期中葉	焼失住居
3	O23e2	N-61°-W	方形	4.72×4.57	80	平坦	全周	4	1	—	竈1	自然	土師器	後期中葉	焼失住居
4	O23f9	N-39°-W	方形	5.82×5.72	32~45	平坦	—	4	1	1	炉1	自然	土師器	前期後半	建て替え

(2) 土坑

第137号土坑(第33図)

位置 調査区北西部のM21g3区, 標高28.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径3.15m、短径1.70mの楕円形で、長径方向はN-57°-Wである。深さは25cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

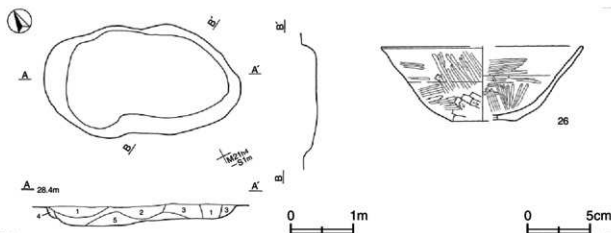
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器坏1点、土師器片5点(欠)が出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片21点も出土している。26は覆土中から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。覆土が埋め戻されていることや形状から墓坑の可能性もあるが、明確ではない。



第33図 第137号土坑・出土遺物実測図

第137号土坑出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴ほか	出土位置	備考
26	土師器	坏	[15.9]	5.9	[4.8]	長石・石英・雲母・炭化粒子	にぶ碧	普通	体部へう張り後へう磨き 内面へう磨き	覆土中	40%

第138号土坑(第34図)

位置 調査区北西部のM21g3区、標高28.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.95m、短径0.87mの不整形円形である。深さは18cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

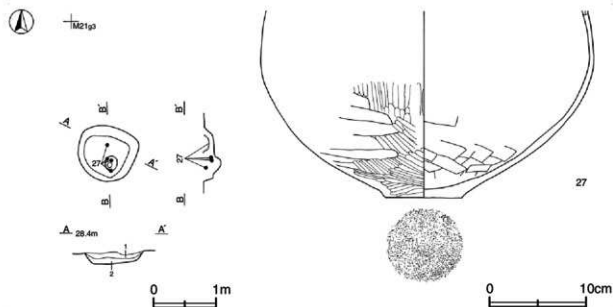
- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 2 黒色 | ロームブロック中量 |
|-------|-----------|------|-----------|

遺物出土状況 土師器甕1点、土師器片4点(欠)が出土している。27は覆土中層から正位で出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。付近に同時期の遺構とみられる第137号土坑が存在しており、同様の性格の可能性もあるが明確ではない。

第138号土坑出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴ほか	出土位置	備考
27	土師器	甕	-	(19.5)	7.8	長石・石英	にぶ碧	普通	体部へう磨き後ナデ 内面へうナデ	覆土中層	



第34図 第138号土坑・出土遺物実測図

表5 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	ビット	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古-新)
				長径(備)×短径(備)	深さ						
137	M21g3	楕円形	N-57°-W	3.15×1.70	25	緩斜	平坦	-	人為	土師器	
138	M21g3	不整形	-	0.95×0.87	18	外傾	崖状	-	人為	土師器	

3 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、調査区南西部の標高28.2mの台地平坦部に地下式坑1基だけが確認されている。以下、検出した遺構について記述する。

地下式坑

第1号地下式坑 (SK112) (第35図)

位置 調査区南西部のO21d8区、標高28.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第51・104・109・110号土坑を掘り込んでいる。

竪坑 主室東壁中央部に位置している。上面は長径1.3m、短径0.9mの半円形である。壁高は95cmで、外傾して立ち上がっている。底面は踏み固められており、主室に向かって段差がついている。

主室 上面は長径3.6m、短径2.4mの楕円形で、長径方向はN-7°-Eである。天井部は崩落し、確認面からの深さは110~120cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。

覆土 15層に分層できる。第12~15層は鹿沼バミスやロームブロックを含んでいることから天井部の崩落土とみられる。その他の層はブロック状の堆積状況を示し、炭化粒子なども含まれることから人為的に埋め戻されている。

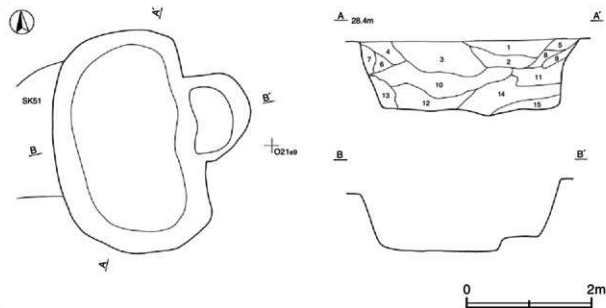
土層解説

1 概 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 褐 色	ローム粒子中量
2 概 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8 暗 褐色	ロームブロック少量
3 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9 褐 色	ロームブロック微量
4 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10 黒 色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
5 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	11 黒 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
6 暗 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	12 黒 褐色	鹿沼バミス少量、ロームブロック微量

13 褐色 ロームブロック少量
14 暗褐色 ロームブロック微量

15 暗褐色 鹿沼バミス少量、ロームブロック微量

所見 時期は、出土土器はないが、遺構の形状から中世と考えられる。



第35図 第1号地下式坑実測図

4 近代の遺構と遺物

当時代の遺構は、炭焼窯跡6基が確認されている。これらの遺構は、調査区南西部の標高27.6mの台地縁辺部に位置し、6基が南北方向に並んで検出されている。いずれも、平面形は双円形もしくは瓢箪形で、炭化室と前庭部の間に禁口部を設け、炭化室を閉塞することによって、未炭化を防ぐ構造になっている。こうした炭焼窯の構造は、大正期以降の改良窯と考えられる。以下、検出した遺構について記述する。

炭焼窯跡

第1号炭焼窯跡（第36図）

位置 調査区南部のP22e4区、標高27.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 全長4.93mの双円形で、長径方向はN-87°-Wである。

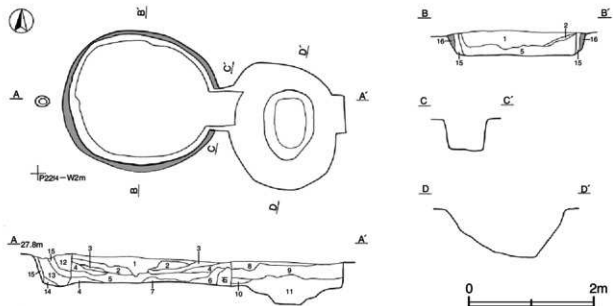
前庭部 平面形は長径2.08m、短径1.88mの楕円形で、東部に方形の張り出し部を持っている。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がり、端部で直立している。

炭化室 平面形は長径2.50m、短径2.24mの楕円形で、遺存する壁高は37cmである。窯壁には厚さ8cmに粘土が貼られ、ほぼ直立している。窯底はほぼ平坦で、窯壁とともに火を受けて硬化している。炭化室と前庭部の間には磔を積み上げている。

禁口部 平面形は長軸0.64m、短軸0.48mの長方形である。閉塞部は地山の上に磔を積み上げていたと考えられる。

煙道部 奥壁中央部に位置し、外傾して立ち上がっている。

覆土 16層に分層できる。第3・5層は壁及び天井部の崩落層、第8～11層は前庭部の覆土で、ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。第13～15層は煙道部の覆土である。



第36図 第1号炭焼窯跡実測図

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 9 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 | 10 暗褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 濃い黄褐色 | 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 11 暗褐色 | 粘土ブロック・炭化物・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土粒子少量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量, 炭化粒子少量 | 13 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 | 14 黒褐色 | 炭化物少量 |
| 7 黒褐色 | 炭化粒子中量, 焼土粒子少量 | 15 黄褐色 | 炭化物・粘土ブロック中量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 16 黄褐色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 陶器片1点(甕)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物がないため不明であるが、改良窯の形状を呈していることから大正期から昭和初期と考えられる。

第2号炭焼窯跡 (第37図)

位置 調査区南部のP22d4区、標高27.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 全長5.25mの双円形で、長径方向はN-77°-Wである。

前庭部 平面形は長軸1.92m, 短軸1.87mの方形である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

炭化室 平面形は長径2.48m, 短径2.41mの円形で、遺存する壁高は37cmである。窯壁には厚さ10~20cmの粘土が貼られ、ほぼ直立している。窯底はほぼ平坦で、窯壁とともに火を受けて硬化している。

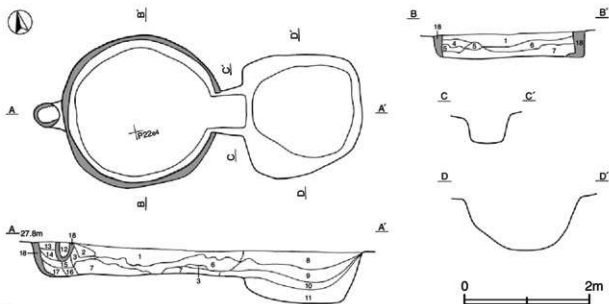
焚口部 平面形は長軸0.80m, 短軸0.56mの長方形である。

煙道部 奥壁中央部に位置し、外傾して立ち上がっている。

覆土 18層に分層できる。第5層は粘土粒子を含む天井部の崩落層、第8~11層は前庭部の覆土である。第13~17層は煙道部の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物・ローム粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |



第37図 第2号炭焼窯跡実測図

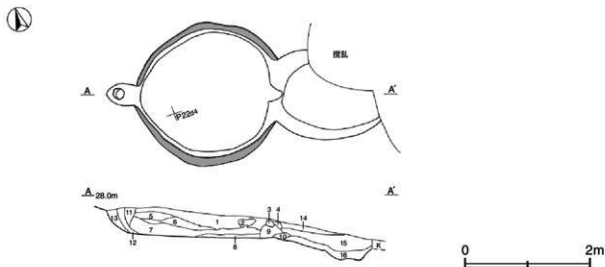
- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物粒子少量 | 14 暗赤褐色 炭化物中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 10 黒褐色 炭化物中量 | 15 暗褐色 ロームブロック・炭化物粒子少量、焼土粒子微量 |
| 11 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量 | 16 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量 |
| 12 暗褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 17 黒色 炭化物多量 |
| 13 暗赤褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量 | 18 黄褐色 粘土ブロック多量 |

所見 時期は、出土遺物がないため不明であるが、改良窯の形状を呈していることから大正期から昭和初期と考えられる。

第3号炭焼窯跡 (第38図)

位置 調査区南部のP22d4区、標高27.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 前底部の東半部が耕作による攪乱を受けており、確認された全長は4.25mである。平面形は瓢箪形で、長径方向はN-71°-Wと推測される。



第38図 第3号炭焼窯跡実測図

前庭部 長径方向の東半部が擾乱を受けており、確認された長径は1.50m、短径1.48mで、平面形は楕円形と推測される。底面は凸凹で、壁は外傾して立ち上がっている。

炭化室 平面形は長径2.32m、短径2.26mの円形で、遺存する壁高は37cmである。窯壁には厚さ12cmに粘土が貼られ、ほぼ直立している。窯底はほぼ平坦で、窯壁とともに火を受けて硬化している。

焚口部 平面形は長軸0.64m、短軸0.48mの長方形である。

煙道部 奥壁中央部に位置し、外傾して立ち上がっている。

覆土 16層に分層できる。第7・8層は壁及び天井部の崩落層、第14~16層は前庭部の覆土で、ブロック状の堆積から埋戻されたものである。第12層は煙道部の覆土である。

土層解説

1 黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量	9 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 にい赤褐色	焼土ブロック少量	10 黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 灰褐色	焼土ブロック中量、炭化物少量	11 暗赤褐色	粘土ブロック・炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 灰褐色	ロームブロック中量	12 暗赤褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
5 黒褐色	炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量
6 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量	14 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
7 暗赤褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	15 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
8 にい赤褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	16 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

所見 時期は、出土遺物がないため不明であるが、改良窯の形状を呈していることから大正期から昭和初期と考えられる。

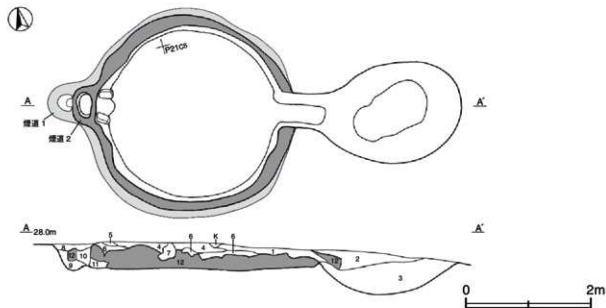
第4号炭焼窯跡 (第39図)

位置 調査区南部のP21c5区、標高27.8mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 全長6.60mの瓢箪形で、長径方向はN-73°-Wである。煙道が2か所確認されており、同一の炭化室を2回使用して操業されたものと考えられる。

前庭部 平面形は長径2.16m、短径1.57mの楕円形である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

炭化室 平面形は径3.18mの円形で、遺存する壁高は40cmである。窯壁には厚さ10cmに粘土が貼られ、ほぼ直



第39図 第4号炭焼窯跡実測図

立している。旧窯壁の内側には厚さ12cmに粘土が貼られ、最初の操作が行われたものと考えられる。窯底はほぼ平坦で、窯壁とともに火を受けて硬化している。

煙道部 2か所。奥壁中央部に位置し、外傾して立ち上がっている。覆土の堆積状況から、煙道1の操作後、煙道2に作り替えられたものと考えられる。煙道2の両袖部には補強のための石が置かれている。

覆土 12層に分層できる。第12層は粘土粒子を含む天井部の崩落層、第2・3層は前庭部の覆土である。第9層は煙道1、第10・11層は煙道2の覆土である。

土層解説

1 暗赤褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量	7 暗褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
2 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ロームブロック微量	8 黄褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量	9 明黄褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	10 明黄褐色	粘土ブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量
5 黒褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	11 黒色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量、ローム粒子微量	12 橙褐色	粘土ブロック多量

所見 時期は、出土遺物がないため不明であるが、改良窯の形状を呈していることから大正期から昭和初期と考えられる。

第5号炭焼窯跡(第40図)

位置 調査区南部のP22b4区、標高27.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 全長4.34mの瓢箪形で、長径方向はN-83°-Wである。

前庭部 平面形は長径1.79m、短径1.40mの楕円形である。底面は中央部がやや高まっており、焚口部付近と東部が深さ50cmほどで、凸凹している。壁は外傾して立ち上がっている。

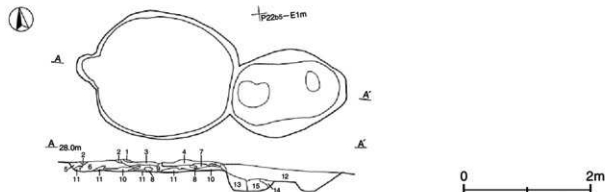
炭化室 平面形は長径2.57m、短径2.00mの楕円形で、遺存する壁高は19cmである。窯壁はほぼ直立している。窯底はほぼ平坦で、窯壁とともに火を受けて硬化している。

煙道部 奥壁中央部に位置し、外傾して立ち上がっている。

覆土 15層に分層できる。第3・5層は壁及び天井部の崩落層、第8～11層は前庭部の覆土で、ブロック状の堆積から埋め戻されたものである。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土炭化物微量
2 にいり赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	6 明赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量	7 明赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量		



第40図 第5号炭焼窯跡実測図

8	にふい橙色	砂質粘土ブロック多量	12	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
9	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量	13	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
10	にふい橙色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量	14	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
11	明赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物微量	15	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

所見 時期は、出土遺物がなため不明であるが、改良窯の形状を呈していることから大正期から昭和初期と考えられる。

第6号炭焼窯跡 (第41図)

位置 調査区南部のP22a5区、標高27.8mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東部は耕作による擾乱により、全長5.50mが確認されただけである。平面形は瓢箪形で、長径方向はN-63°-Wと推測される。

前庭部 東半部は擾乱により、長径1.43m、短径1.15mだけが確認された。平面形は楕円形と推測され、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

炭化室 平面形は長径3.95m、短径3.18mの楕円形で、遺存する壁高は48cmである。窯壁には厚さ20cmの粘土が貼られ、ほぼ直立している。窯底はほぼ平坦で、窯壁とともに火を受けて硬化している。

焚口部 平面形は長軸0.80m、短軸0.56mの長方形である。底面の中央部がやや高まっている。

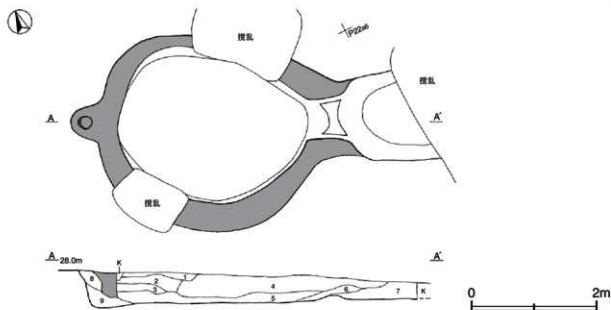
煙道部 奥壁中央部に位置し、外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層できる。第5層は粘土ブロックを中量含む天井部の崩落層、第7層は前庭部の覆土である。

第8・9層は煙道部の覆土である。

土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	5	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック中量、ローム粒子少量
2	暗褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	6	暗褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	7	暗褐色	焼土粒子中量、炭化物少量、ロームブロック・粘土ブロック微量
4	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック微量	8	暗褐色	焼土粒子多量、炭化物少量、ロームブロック
			9	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土ブロック微量



第41図 第6号炭焼窯跡実測図

所見 時期は、出土遺物がないため不明であるが、改良窯の形状を呈していることから大正期から昭和初期と考えられる。

表6 炭焼窯跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	全長	規			模			覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)		
					前 庭 部		底面	炭 化 室		底面					
					平面形	長軸(径) ×短軸(径)		深さ (cm)	平面形					長軸(径) ×短軸(径)	厚高 (cm)
1	P22e4	N-87°-W	双円形	4.93	楕円形	2.08×1.88	73	皿状	楕円形	2.50×2.24	37	平坦	人為	-	
2	P22d4	N-77°-W	双円形	5.25	方形	1.92×1.87	82	平坦	円形	2.48×2.41	37	平坦	人為	-	
3	P22d4	N-71°-W	【風箏形】	(4.25)	【楕円形】	(1.50)×1.48	40	凸凹	円形	2.32×2.26	37	平坦	人為	-	
4	P21c5	N-73°-W	風箏形	6.60	楕円形	2.16×1.57	62	皿状	円形	3.18×3.18	40	平坦	人為	-	
5	P22b4	N-83°-W	風箏形	4.34	楕円形	1.79×1.40	51	凸凹	楕円形	2.57×2.00	19	平坦	人為	-	
6	P22a5	N-63°-W	【風箏形】	(5.50)	【楕円形】	(1.43)×(1.15)	28	平坦	楕円形	3.95×3.18	48	平坦	人為	-	

5 その他の遺構と遺物

時期や性格の明確でない遺構として、溝跡1条、土坑164基、不明遺構1基が存在する。以下それらの遺構について記述する。

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第42図, 付図)

位置 調査区東部のO24d8～O24j8区、標高26.6～27.6mの斜面部に位置している。

規模と形状 南北方向(N-4°-E)に直線的に延びている。南端が調査区域外に延びており、確認された長さは24.50mで、上幅0.43～0.72m、下幅0.20～0.45mである。深さは13～37cmで、断面形はU字状である。南端と北端の底面には102cmの比高差があり、北から南に向かって傾斜している。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 ミニチュア土器1点が中央部北寄りの覆土上層から出土している。

所見 北から南に向かって傾斜していることから、排水路の可能性が考えられる。時期は、遺構に伴う出土土器がないため、不明である。



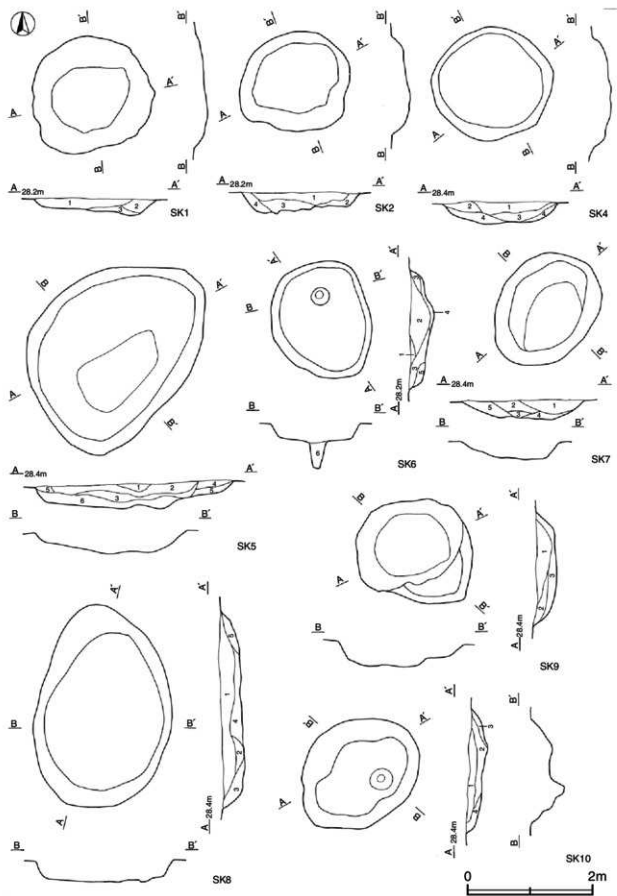
第42図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第42図)

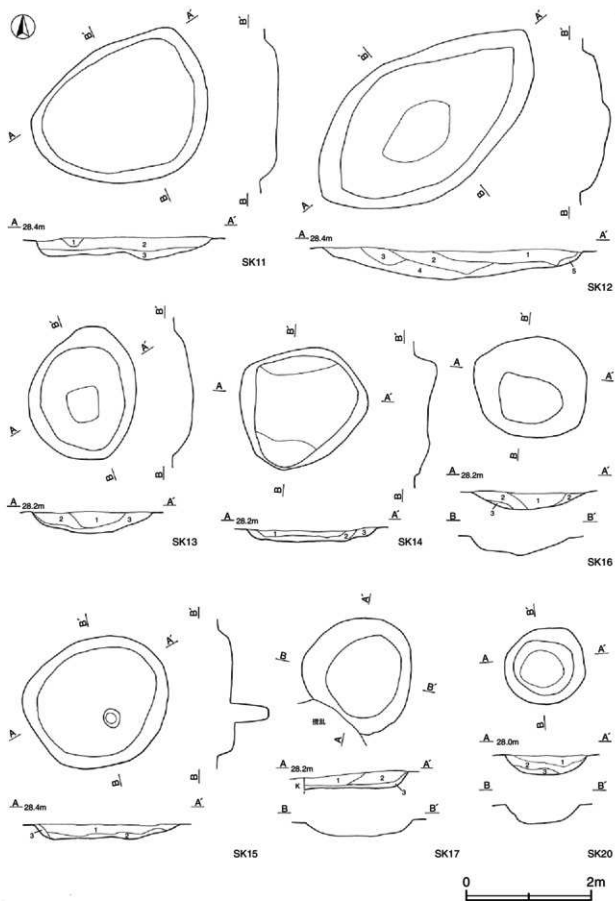
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
28	ミニチュア	-	3.7	2.1	-	灰石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	橙	普通	内外面ナデ	覆土上層	100%

(2) 土坑 (第43～57図)

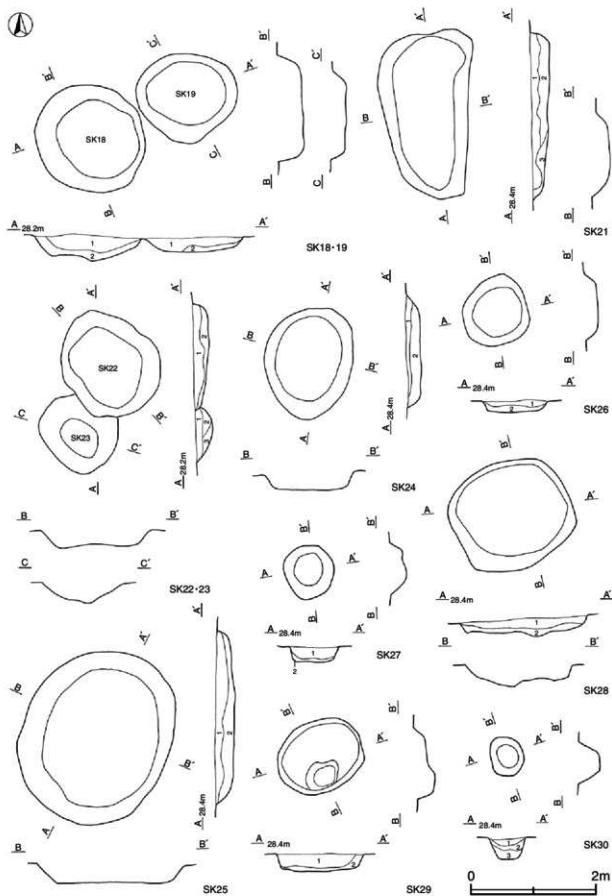
時期及び性格が明確でない土坑164基については、実測図と一覧表を掲載する。



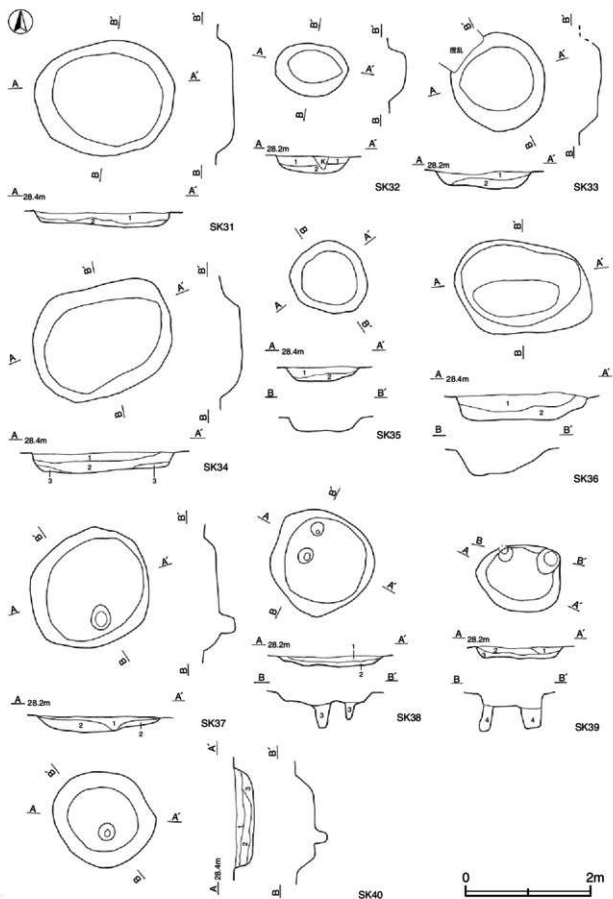
第43图 土坑实测图(1)



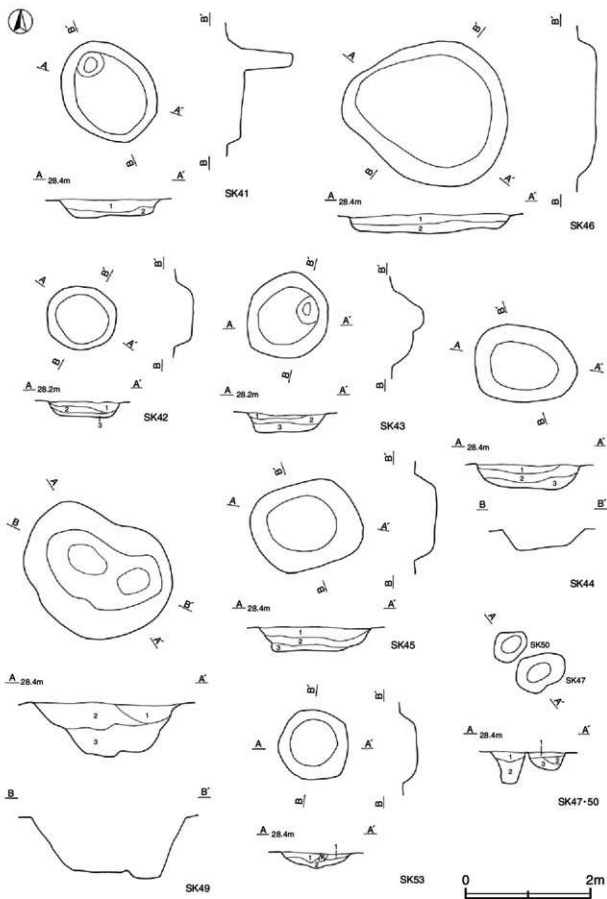
第44図 土坑実測図(2)



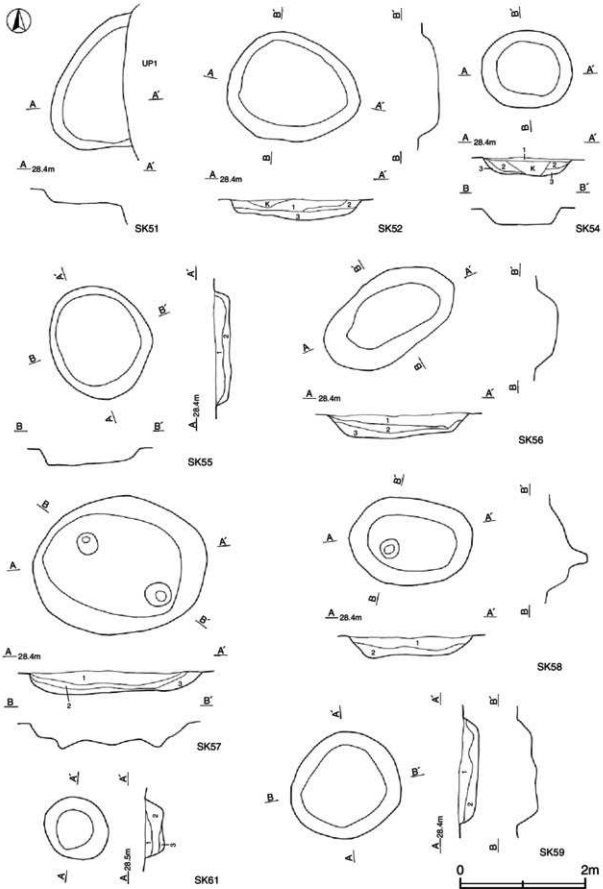
第45图 土坑实测图(3)



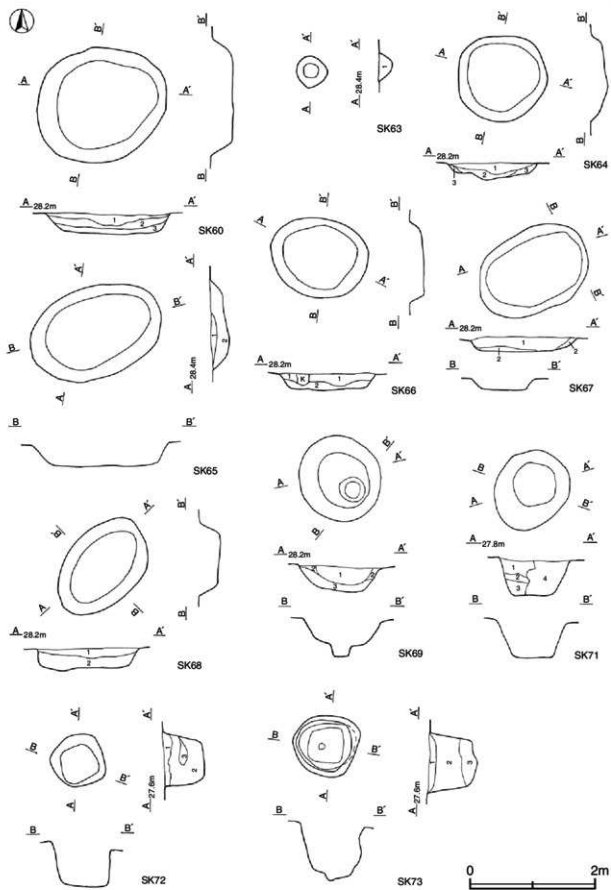
第46図 土坑実測図 (4)



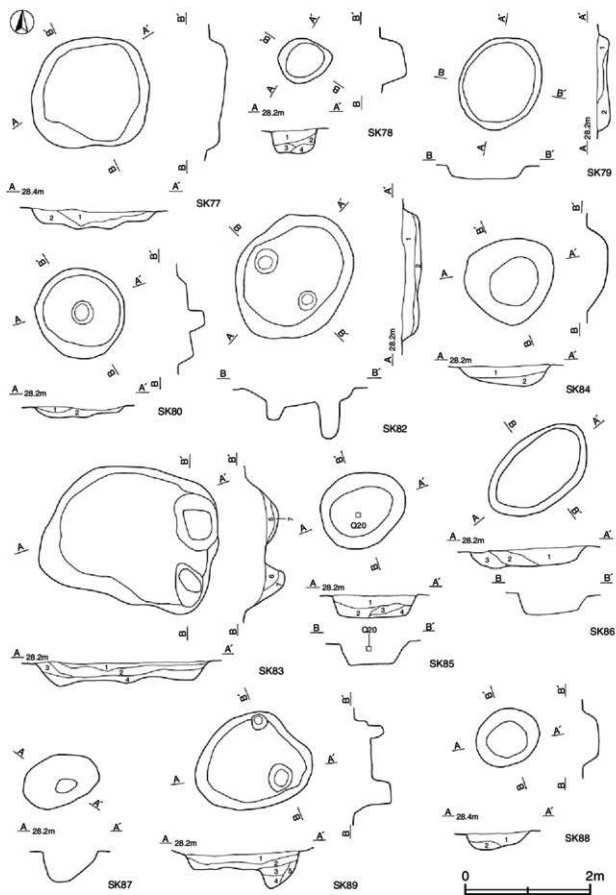
第47图 土坑实测图 (5)



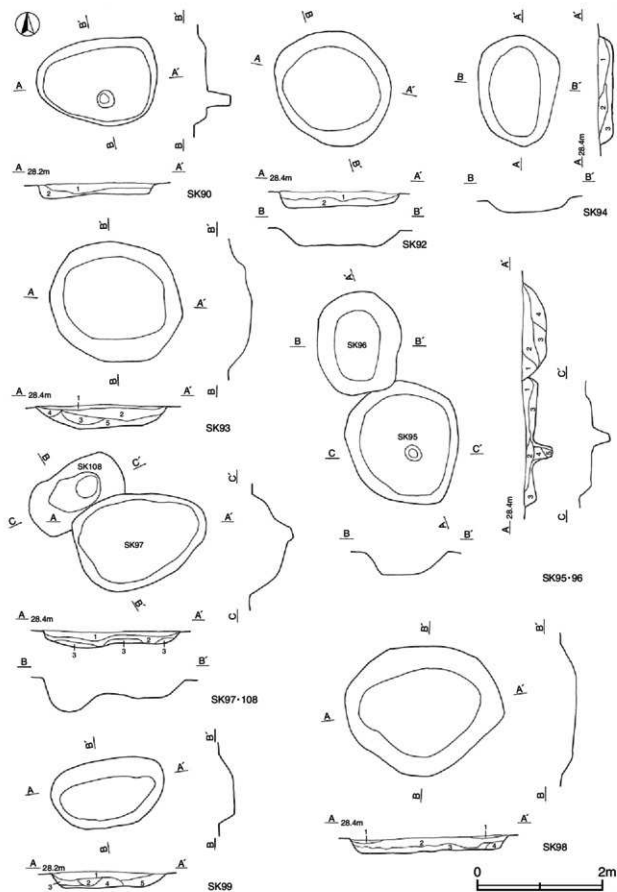
第48図 土坑実測図 (6)



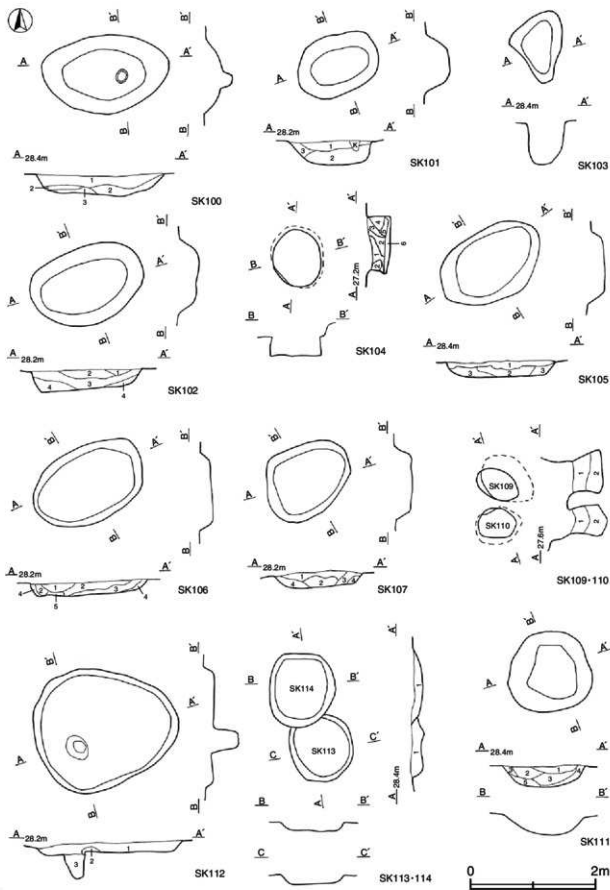
第49图 土坑实测图(7)



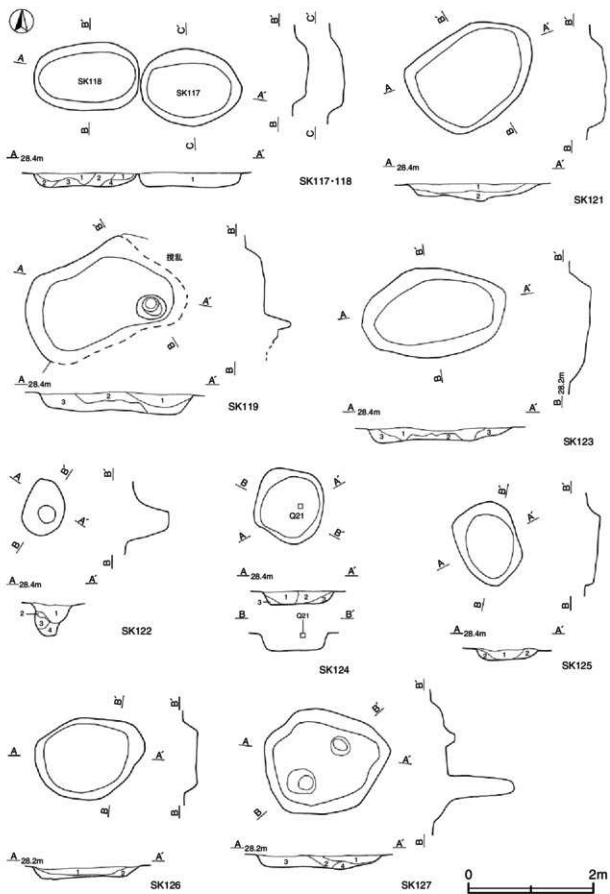
第50図 土坑実測図 (8)



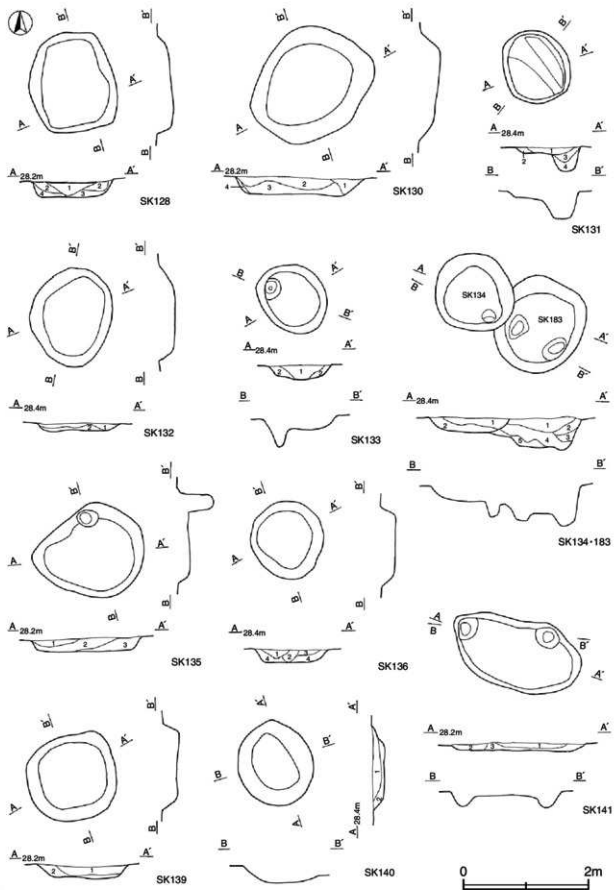
第51图 土坑实测图(9)



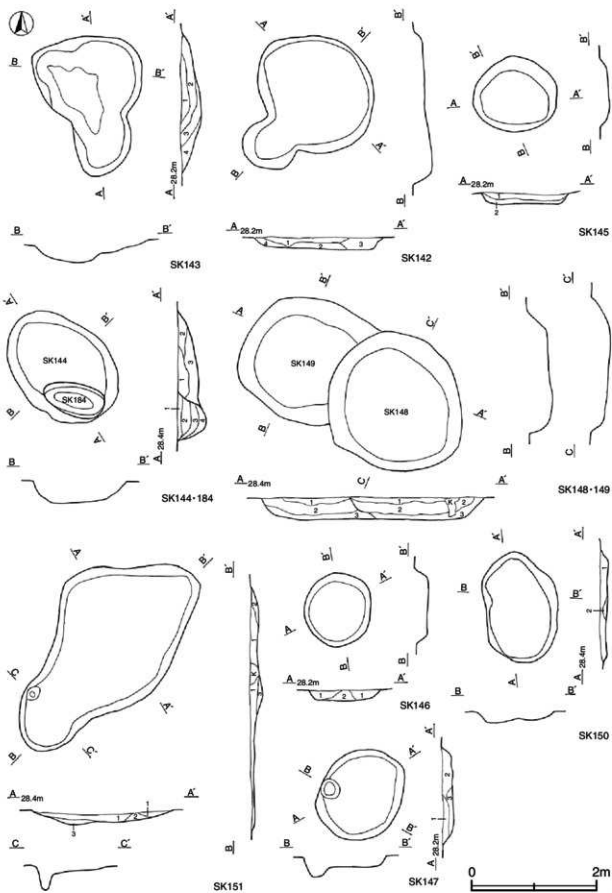
第52図 土坑実測図 (10)



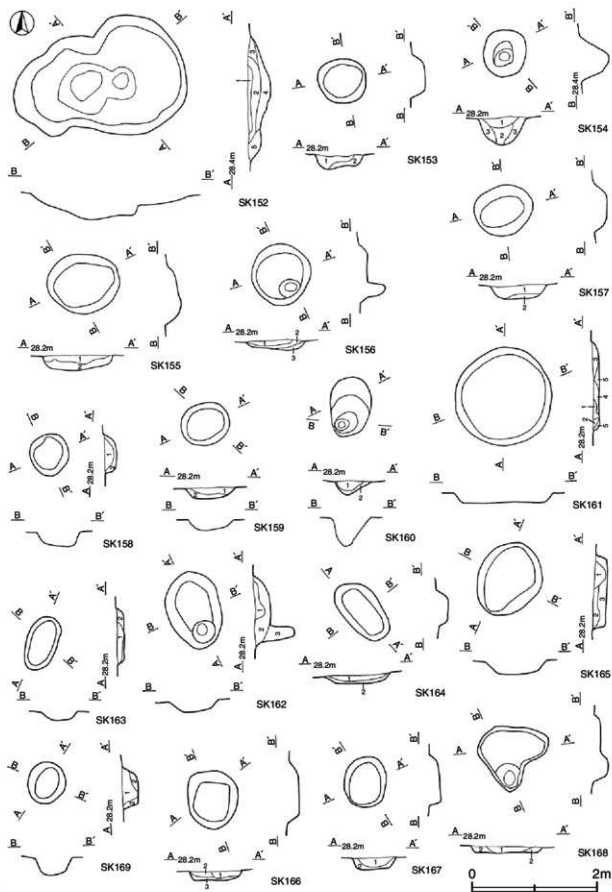
第53图 土坑实测图(11)



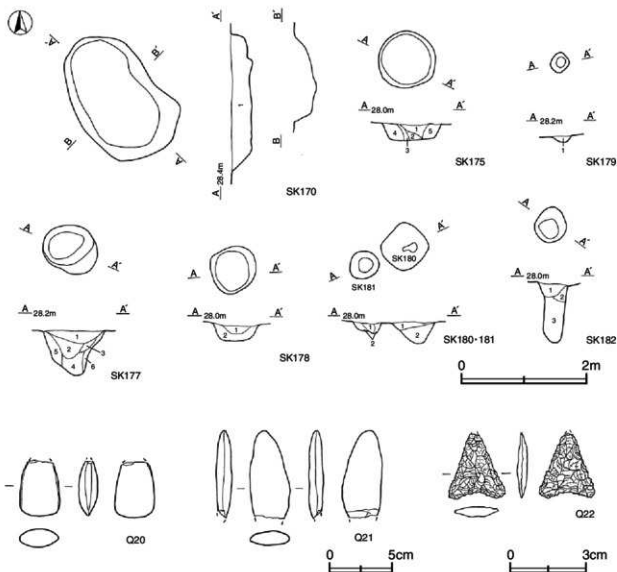
第54図 土坑実測図(12)



第55图 土坑实测图(13)



第56図 土坑実測図 (14)



第57図 土坑・第85・124・152号土坑出土遺物実測図

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック中量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量

第10号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック中量
3 褐色 ローム粒子中量
4 褐色 ロームブロック少量

第11号土坑土層解説

1 褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック中量
3 褐色 ローム粒子中量

第12号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量
2 黒褐色 ロームブロック少量
3 黒暗褐色 ロームブロック少量
4 褐色 ロームブロック中量
5 暗褐色 ローム粒子少量

第13号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ローム粒子中量

第14号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量
3 暗褐色 ロームブロック少量

第15号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子中量
2 褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック中量

第16号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック少量

第17号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

第18号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量

第19号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子中量

第20号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック少量

第21号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック微量

第22号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック微量

第23号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック微量
3 に近い褐色 ローム粒子中量

第24号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子中量

第25号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子微量
2 に近い褐色 ロームブロック微量

第26号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量

第27号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック微量

第28号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子中量

第29号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量

第30号土坑土層解説

1 黒褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 褐色 ローム粒子中量

第31号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック微量

第32号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ロームブロック微量

第33号土坑土層解説

1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
2 褐色 ロームブロック少量

第34号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック微量

第35号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量
2 褐色 ロームブロック少量

第36号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック微量

第37号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック微量

第38号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック微量

第39号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量
3 褐色 ロームブロック少量
4 暗褐色 ロームブロック微量

第40号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 褐色 ロームブロック少量

第41号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量

第42号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第43号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第44号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第45号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第46号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第47号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第49号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第50号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第52号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第53号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第54号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第55号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第56号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第57号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第58号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第59号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第60号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第61号土坑土層解説

- 1 にぶい褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第63号土坑土層解説

- 1 にぶい褐色 ロームブロック・炭化物微量

第64号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第65号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第66号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第67号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第68号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第69号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第71号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量

第72号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量

第73号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量

第77号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第78号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック微量

第79号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第80号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第82号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量

2 褐色 ローンプロック少量

第83号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローンプロック微量
- 4 にふい褐色 ローンプロック少量
- 5 極暗褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローンプロック微量
- 7 褐色 ローンプロック少量

第84号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック微量
- 2 暗褐色 ローンプロック少量

第85号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローンプロック少量
- 3 褐色 ローンプロック微量
- 4 褐色 ローンプロック少量

第86号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック少量
- 2 褐色 ローンプロック少量
- 3 褐色 ローンプロック中量

第88号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量

第89号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローンプロック少量
- 3 褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローンプロック微量
- 5 褐色 ローンプロック中量

第90号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローンプロック少量

第92号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック微量
- 2 褐色 ローンプロック微量

第93号土坑土層解説

- 1 にふい褐色 ローンプロック微量
- 2 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローンプロック微量
- 4 黒褐色 ローンプロック微量
- 5 褐色 ローンプロック少量

第94号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローンプロック少量

第95号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック少量
- 2 暗褐色 ローンプロック少量
- 3 暗褐色 ローンプロック微量
- 4 褐色 ローンプロック少量
- 5 褐色 ローンプロック微量

第96号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック少量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量
- 3 褐色 ローンプロック少量
- 4 褐色 ローンプロック中量

第97号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量
- 3 暗褐色 ローンプロック少量

第98号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローンプロック少量
- 4 暗褐色 ローンプロック微量

第99号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量
- 3 暗褐色 ローンプロック少量
- 4 褐色 ローンプロック少量
- 5 黒褐色 ローンプロック微量

第100号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック微量
- 2 暗褐色 ローンプロック少量
- 3 褐色 ローンプロック少量

第101号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック少量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量
- 3 褐色 ローンプロック中量

第102号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック少量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量
- 3 暗褐色 ローンプロック少量
- 4 褐色 ローンプロック中量

第104号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローンプロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローンプロック少量
- 4 褐色 ローンプロック中量
- 5 暗褐色 ローンプロック微量
- 6 褐色 ローンプロック少量

第105号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローンプロック微量
- 3 褐色 ローンプロック少量

第106号土坑土層解説

- 1 褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローンプロック微量
- 4 褐色 ローンプロック中量
- 5 褐色 ローンプロック微量

第107号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローンプロック少量
- 3 極暗褐色 ローンプロック微量
- 4 褐色 ローンプロック少量

第109号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量、ローンプロック微量

第110号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量、ローンプロック微量

第111号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローンプロック微量
- 2 黒褐色 ローンプロック少量
- 3 暗褐色 ローンプロック微量
- 4 暗褐色 ローンプロック少量
- 5 褐色 ローンプロック中量

第112号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローンプロック少量
- 2 暗褐色 ローンプロック少量
- 3 褐色 ローンプロック少量

第113号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

第114号土坑土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

第117号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

第118号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック微量

4 暗褐色 ロームブロック少量

第119号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ロームブロック少量

第121号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

第122号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

2 褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

第123号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック少量

第124号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

3 褐色 ローム粒子中量

第125号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ローム粒子中量

第126号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック少量

第127号土坑土層解説

1 黒暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック微量

4 暗褐色 ローム粒子少量

第128号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

2 褐色 ロームブロック少量

3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

4 褐色 ローム粒子中量

第130号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック中量

4 暗褐色 ロームブロック少量

第131号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子少量

4 褐色 ローム粒子中量

第132号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック少量

第133号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

第134号土坑土層解説

1 褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第135号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック中量

3 褐色 ロームブロック中量

第136号土坑土層解説

1 褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ロームブロック微量

4 暗褐色 ロームブロック少量

第139号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

第140号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック少量

第141号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック少量

第142号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ロームブロック中量

3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

4 暗褐色 ロームブロック少量

第143号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック微量

4 褐色 ローム粒子中量

第144号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

3 褐色 ローム粒子中量

第145号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 褐色 ローム粒子中量

第146号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 褐色 ロームブロック少量

第147号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック少量

第148号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック微量

第149号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック微量

3 暗褐色 ロームブロック少量

第150号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック微量

第151号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第152号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第153号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第154号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第155号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第156号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第157号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第158号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第159号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第160号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第161号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第162号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第163号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第164号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第165号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

3 褐色 ロームブロック少量

第166号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第167号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第168号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第169号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第170号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第175号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量

第177号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 褐色 ロームブロック少量

第178号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

第179号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第180号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第181号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第182号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第183号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量

第184号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第85号土坑出土遺物観察表 (第57図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q20	磨製石斧	(4.4)	3.1	1.4	(32.0)	凝灰岩	小形品 全面を丁寧に研磨	覆土中層	PL9

第124号土坑出土遺物観察表（第57図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q21	磨製石斧	(6.9)	3.2	1.2	(36.8)	凝灰岩	小形品 刃部を研磨 刃部の一部欠損	覆土中層	

第152号土坑出土遺物観察表（第57図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	石鏃	(2.6)	2.2	0.4	(1.5)	安山岩	凹基無茎鏃 両面押圧剥離 先端部欠損	覆土中	PL9

表7 土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さ1cm)		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古-新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
1	O22a1	不整形円形	N-79°-E	1.96×1.77	18	緩斜	皿状	-	人為	縄文土器	
2	N21j9	不整形円形	N-64°-E	1.81×1.64	28	緩斜	皿状	-	人為	縄文土器	
4	N21g7	楕円形	N-14°-W	1.94×1.76	26	緩斜	皿状	-	人為	縄文土器	
5	N21f5	不整形円形	N-48°-E	3.20×2.40	36	緩斜	皿状	-	自然	縄文土器	
6	O21d3	不整形円形	N-37°-W	1.92×1.56	28	緩斜	皿状	1	自然	-	
7	N21b7	楕円形	N-48°-E	1.96×1.54	29	緩斜	皿状	-	人為	縄文土器	
8	N21d9	不整形円形	N-4°-W	3.20×2.18	32	緩斜	平坦	-	人為	縄文土器	
9	N21e0	不整形円形	N-47°-W	2.00×1.70	20~36	緩斜	有段	-	自然	縄文土器	
10	N22f1	不整形円形	N-50°-E	2.08×1.62	33	緩斜	平坦	1	自然	-	
11	O21b7	不整形円形	N-61°-E	2.90×2.28	26	緩斜	平坦	-	人為	-	
12	N21d8	不整形円形	N-50°-E	4.18×2.28	44	緩斜	皿状	-	自然	縄文土器	
13	N22h6	不整形円形	N-3°-W	2.12×1.70	32	緩斜	皿状	-	人為	-	
14	N22h5	不整形円形	-	2.00×1.92	20~30	外傾緩斜	皿状	-	自然	縄文土器	
15	O21d7	不整形円形	-	2.28×2.04	26	外傾	皿状	1	自然	-	
16	N22j7	不整形円形	N-58°-W	1.90×1.65	28	緩斜	皿状	-	自然	縄文土器	
17	N22g6	不整形円形	-	1.85×1.76	23	緩斜	平坦	-	人為	縄文土器	
18	N22d4	不整形円形	-	1.85×1.70	38	外傾	平坦	-	自然	-	
19	N22f5	不整形円形	N-68°-E	1.63×1.43	23	外傾	平坦	-	自然	-	
20	O22b8	不整形円形	-	1.32×1.23	30	緩斜	平坦	-	自然	-	
21	N22j1	不整形長方形	N-6°-W	2.65×1.35	24	緩斜	平坦	-	自然	-	
22	O22a2	楕円形	N-40°-W	1.74×1.40	23	緩斜	平坦	-	自然	-	SK23→本跡
23	O22a2	楕円形	N-41°-W	1.26×1.13	32	緩斜	皿状	-	自然	-	本跡→SK22
24	N22i1	楕円形	N-17°-E	1.82×1.38	23	外傾	平坦	-	自然	-	
25	N22f2	楕円形	N-26°-E	2.78×2.35	26	緩斜	平坦	-	自然	縄文土器	
26	N22e1	不整形円形	-	1.12×1.06	19	緩斜	平坦	-	自然	-	
27	N22e1	円形	-	0.84×0.78	27	緩斜	皿状	-	自然	-	
28	N22c3	隅丸方形	N-58°-E	1.88×1.75	20~34	外傾緩斜	有段	-	自然	縄文土器	
29	N22c3	楕円形	N-53°-E	1.42×1.14	18~30	垂直緩斜	有段	-	自然	縄文土器	
30	N22c3	円形	-	0.64×0.55	33	外傾	平坦	-	自然	-	
31	N22g4	楕円形	N-74°-E	2.20×1.80	30	緩斜	平坦	-	自然	-	
32	O22d1	楕円形	N-77°-W	1.16×0.85	26	外傾緩斜	平坦	-	自然	-	
33	N22f3	円形	-	1.54×1.48	32	緩斜	平坦	-	自然	-	
34	M22j5	隅丸長方形	N-63°-E	2.28×1.76	32	緩斜	平坦	-	自然	-	
35	N22b3	円形	-	1.20×1.14	20	外傾緩斜	平坦	-	自然	-	
36	M22j5	不整形長方形	N-83°-W	2.20×1.45	41	外傾緩斜	皿状	-	自然	-	

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さ12cm)		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古-新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
37	N226	楕円形	N-43°-E	2.10×1.83	28	緩斜	平坦	1	自然	-	
38	O22e2	円形	-	1.68×1.60	15~22	外傾	凸凹	2	自然	-	
39	O22e2	楕円形	N-83°-W	1.34×1.10	21	垂直	平坦	2	自然	-	
40	O21b0	円形	-	1.62×1.50	30	外傾	平坦	1	自然	-	
41	O21b9	楕円形	N-33°-W	1.70×1.40	25	外傾	平坦	1	自然	縄文土器	
42	O22f3	円形	-	1.10×1.00	25	外傾	平坦	-	自然	-	
43	O22b1	楕円形	N-12°-E	1.38×1.25	38	外傾	平坦	1	自然	-	
44	O22c1	楕円形	N-83°-W	1.65×1.22	32	外傾緩斜	皿状	-	自然	-	
45	O22c1	隅丸長方形	N-66°-E	1.68×1.40	32	外傾	平坦	-	自然	-	
46	O21c9	隅丸台形	N-82°-W	2.65×2.30	28	外傾	平坦	-	自然	-	
47	O21h9	不整形円形	N-61°-E	0.82×0.55	30	緩斜	皿状	-	人為	-	
49	O21i9	不整形楕円形	N-57°-W	2.43×1.97	85~95	外傾緩斜	有段	-	自然	-	
50	O21h9	楕円形	N-46°-E	0.58×0.45	50	外傾	平坦	-	人為	-	
51	O21d8	[楕円形]	N-41°-E	(1.60)×(1.25)	25	緩斜	平坦	-	-	-	本跡→UP1
52	O21e6	楕円形	N-81°-W	2.13×1.75	30	垂直緩斜	平坦	-	自然	-	
53	O21i7	円形	-	1.12×1.12	24	緩斜	平坦	-	自然	-	
54	O21b8	楕円形	N-80°-E	1.44×1.25	26	外傾	平坦	-	自然	-	
55	O22h9	楕円形	N-32°-W	1.80×1.60	22	外傾緩斜	平坦	-	自然	-	
56	O21f6	長楕円形	N-60°-E	2.27×1.25	35	外傾	平坦	-	自然	-	
57	O21c6	楕円形	N-88°-W	2.78×2.20	30	外傾緩斜	平坦	2	自然	-	
58	O21c5	楕円形	N-89°-W	1.96×1.38	35	緩斜	皿状	1	自然	-	
59	O21c4	円形	-	1.75×1.70	32	緩斜	平坦	-	自然	-	
60	O21d4	楕円形	N-63°-E	2.12×1.82	33	緩斜	平坦	-	自然	-	
61	O21d9	円形	-	1.00×0.96	27	外傾	平坦	-	自然	-	
63	O21g8	円形	-	0.49×0.49	20	緩斜	皿状	-	-	-	
64	O21e5	円形	-	1.40×1.35	25	外傾緩斜	皿状	-	自然	-	
65	O21e6	楕円形	N-66°-E	2.13×1.45	35	緩斜	平坦	-	自然	-	
66	O21f4	楕円形	N-56°-W	1.53×1.30	23	外傾緩斜	平坦	-	自然	-	
67	O21h5	楕円形	N-58°-E	1.85×1.30	16	外傾垂直	平坦	-	人為	-	
68	P21a6	楕円形	N-40°-E	1.75×1.16	30	外傾	平坦	-	自然	-	
69	P21e6	円形	-	1.37×1.30	40	外傾	平坦	1	自然	-	
71	O23b1	楕円形	N-42°-E	1.32×1.15	54	外傾	平坦	-	人為	-	
72	O23b1	隅丸方形	N-24°-W	0.80×0.80	60~78	垂直	有段	-	人為	-	
73	O23a1	不整形円形	-	1.03×0.93	77~86	外傾内傾	有段	1	人為	-	
77	N21f2	不整形円形	-	2.04×1.87	20~33	垂直外傾	有段	-	自然	-	
78	P21a2	隅丸台形	N-77°-E	0.84×0.67	29	外傾	平坦	-	人為	-	S15→本跡
79	O21d9	楕円形	N-29°-E	1.55×1.27	20	外傾	平坦	-	自然	縄文土器	
80	P21b5	円形	-	1.45×1.40	12~25	外傾	平坦	1	自然	-	
82	O21h4	楕円形	N-33°-E	2.17×1.77	25	外傾緩斜	平坦	2	自然	-	
83	O21b4	不整形台形	N-75°-W	2.75×2.15	34	緩斜	平坦	2	自然	縄文土器	
84	O21a4	円形	-	1.40×1.40	32	緩斜	平坦	-	自然	-	
85	O21j7	楕円形	N-60°-E	1.40×1.15	35	外傾	平坦	-	人為	磨製石斧	
86	P21a8	楕円形	N-47°-E	1.88×1.13	32	外傾	平坦	-	自然	-	
87	P21a2	楕円形	N-68°-E	1.23×0.81	29	外傾緩斜	平坦	-	-	-	S15→本跡
88	O21a4	楕円形	N-78°-E	0.98×0.81	24	外傾	平坦	-	自然	-	
89	N21j6	楕円形	N-82°-E	1.85×1.58	28	外傾	平坦	2	自然	-	

番号	位置	平面形状	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
90	P21a7	不整形円形	N-87°-E	1.90×1.35	20	外傾縦斜	平坦	1	自然	-	
92	N21g6	円形	-	1.90×1.78	25	縦斜	平坦	-	自然	-	
93	N21g5	楕円形	N-64°-W	2.15×1.85	35	縦斜	平坦	-	人為	-	
94	N21h8	楕円形	N-3°-W	1.76×1.23	22	縦斜	平坦	-	自然	-	
95	N21h8	楕円形	N-17°-W	1.98×1.75	15	縦斜	平坦	1	人為	-	本跡→SK96
96	N21h8	楕円形	N-10°-W	1.60×1.33	35	縦斜	平坦	-	人為	-	SK95→本跡
97	N21g8	楕円形	N-73°-E	2.20×1.50	27	外傾	皿状	-	自然	縄文土器	SK108→本跡
98	N21d7	不整形円形	N-90°	2.54×2.08	23	縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
99	N21c6	楕円形	N-71°-E	1.80×1.08	25	縦斜	平坦	-	人為	-	
100	N21c6	楕円形	N-79°-E	1.95×1.26	30	縦斜	皿状	1	人為	-	
101	O21i5	楕円形	N-70°-E	1.35×0.95	38	外傾	皿状	-	人為	-	
102	O21a4	楕円形	N-64°-E	1.81×1.22	30	縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
103	O21e8	不定形	N-10°-W	1.20×0.88	62	外傾縦斜	皿状	-	-	-	
104	O21d8	楕円形	N-20°-W	0.92×0.76	30	内傾	平坦	-	人為	-	本跡→UP1
105	N21e2	楕円形	N-53°-E	1.78×1.15	25	外傾縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
106	N21d2	楕円形	N-59°-E	1.85×1.20	18	縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
107	N21c2	楕円形	N-53°-E	1.47×1.15	26	外傾	平坦	-	自然	縄文土器	
108	N21g8	隅丸長方形	N-65°-E	1.60×0.98	55	縦斜	皿状	1	-	-	本跡→SK97
109	O21d8	楕円形	N-64°-W	0.70×0.42	50	内傾	平坦	-	人為	-	本跡→UP1
110	O21d8	楕円形	N-86°-E	0.62×0.43	48	内傾	皿状	-	人為	-	本跡→UP1
111	N21a7	円形	-	1.28×1.28	30	縦斜	皿状	-	人為	-	
112	N21c5	楕円形	N-71°-E	2.23×1.95	15	外傾	平坦	1	自然	縄文土器	
113	O21d9	円形	-	1.05×1.03	15	縦斜	平坦	-	-	-	本跡→SK114
114	O21d9	楕円形	N-18°-E	1.20×1.02	13	外傾	平坦	-	-	-	SK113→本跡
117	M21i7	楕円形	N-80°-W	1.60×1.22	23	外傾縦斜	平坦	-	-	-	
118	M21i6	楕円形	N-85°-E	1.66×1.06	22	縦斜	平坦	-	人為	-	
119	M21e8	楕円形	N-70°-E	(2.35)×1.30	28	縦斜	平坦	1	自然	-	
121	N21b4	不整形円形	N-52°-E	2.08×1.50	30	外傾	平坦	-	自然	-	
122	M21h4	楕円形	N-2°-E	0.90×0.63	68	外傾	平坦	-	人為	縄文土器	
123	N21b7	楕円形	N-76°-E	2.35×1.45	25	縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
124	M21h2	円形	-	1.25×1.20	26	外傾	平坦	-	人為	縄文土器, 磨製石斧	
125	M21h1	楕円形	N-18°-W	1.30×0.95	18	外傾	平坦	-	自然	縄文土器	
126	M21j1	楕円形	N-68°-E	1.72×1.33	20	縦斜	平坦	-	自然	土師器, 縄文土器	
127	M21h5	不定形	N-72°-E	2.00×1.70	23	縦斜	平坦	2	人為	土師器, 火打石	
128	M21g5	隅丸長方形	N-10°-W	1.58×1.38	25	外傾縦斜	平坦	-	人為	縄文土器	
130	M21i3	隅丸長方形	N-36°-E	1.93×1.65	32	外傾縦斜	平坦	-	人為	縄文土器	
131	M21i1	楕円形	N-36°-W	1.20×1.05	15~45	外傾	有段	-	自然	-	
132	M21h1	楕円形	N-12°-E	1.55×1.30	24	外傾縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
133	M20g0	楕円形	N-41°-W	1.18×0.98	22	外傾縦斜	平坦	1	自然	-	
134	M21i1	円形	-	1.25×1.25	23	縦斜	平坦	1	自然	-	SK183→本跡
135	M20h8	不整形円形	N-82°-E	1.80×1.50	18	外傾	平坦	1	自然	-	
136	M20h8	円形	-	1.23×1.16	22	縦斜	平坦	-	人為	-	
139	M20h8	円形	-	1.40×1.38	23	縦斜	平坦	-	自然	-	
140	M21h1	楕円形	N-18°-W	1.38×1.15	27	縦斜	平坦	-	自然	縄文土器	
141	N20a9	不整形円形	N-65°-W	2.64×1.19	11	縦斜	平坦	2	自然	-	
142	M20a9	不定形	N-46°-E	2.40×2.05	30	縦斜	平坦	-	人為	-	

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古-新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ						
143	M20j0	不定形	N-10°-W	2.25×1.71	30	外傾縦斜	皿状	-	自然	-	
144	M20g0	楕円形	N-35°-W	2.00×1.48	35	外傾	平坦	-	自然	-	本跡→SK184
145	M20j8	楕円形	N-76°-E	1.37×1.20	15	緩斜	平坦	-	自然	-	
146	M20i8	円形	-	1.19×1.10	19	外傾	平坦	-	人為	-	
147	M20j7	楕円形	N-39°-E	1.55×1.30	18	外傾	平坦	1	人為	-	
148	N21e6	楕円形	N-45°-W	2.53×2.18	25	緩斜	平坦	-	自然	-	SK149→本跡
149	N21d6	[楕円形]	N-64°-W	1.98×(1.50)	39	外傾縦斜	平坦	-	自然	-	本跡→SK148
150	M20i0	不整形円形	N-7°-W	1.78×1.16	16	緩斜	皿状	-	自然	-	
151	M20j0	不定形	N-47°-E	3.74×2.17	20	緩斜	平坦	1	人為	-	
152	M20h9	不定形	N-69°-E	2.74×1.93	37	緩斜	皿状	-	自然	石蔵	
153	M20h9	円形	-	0.76×0.72	22	外傾	平坦	-	自然	-	
154	M20j0	楕円形	N-19°-E	0.72×0.66	45	外傾	皿状	-	人為	-	
155	N20a0	楕円形	N-82°-E	1.14×0.91	25	外傾縦斜	皿状	-	自然	-	
156	N20a8	円形	-	0.97×0.94	14	緩斜	平坦	1	自然	-	
157	M20h7	楕円形	N-68°-E	0.94×0.80	21	緩斜	皿状	-	自然	-	
158	M20j8	円形	-	0.67×0.62	20	外傾	平坦	-	自然	-	
159	N20a8	楕円形	N-65°-E	0.77×0.68	17	緩斜	平坦	-	自然	-	
160	N20a7	楕円形	N-13°-E	0.95×0.62	43	外傾縦斜	皿状	-	自然	-	
161	N20a7	円形	-	1.59×1.52	15	外傾	平坦	-	人為	-	
162	N20b7	楕円形	N-6°-W	1.23×0.87	18	緩斜	平坦	-	自然	-	
163	N20a8	楕円形	N-23°-E	0.90×0.49	13	緩斜	皿状	-	自然	-	
164	M20j5	楕円長方形	N-33°-W	1.04×0.58	17	外傾	平坦	-	自然	-	
165	M20j5	楕円形	N-26°-E	1.20×0.99	21	緩斜	平坦	-	自然	-	
166	M20j4	楕円形	N-13°-W	0.95×0.80	18	外傾縦斜	平坦	-	自然	-	
167	N20e5	楕円形	N-12°-E	0.81×0.65	18	外傾	平坦	-	自然	-	
168	N20e5	不定形	N-85°-E	1.12×1.05	10~22	外傾	有段	-	自然	-	
169	N20d5	楕円形	N-20°-E	0.66×0.58	28	外傾	平坦	-	自然	-	
170	M21d0	楕円形	N-36°-W	2.17×1.35	35	外傾縦斜	平坦	-	-	-	
175	N21j1	円形	-	0.94×0.90	25	外傾	平坦	-	人為	縄文土器	SI10→本跡
177	O20b0	楕円形	N-52°-W	0.90×0.74	150	外傾	皿状	-	人為	SI7・8と重複 遺跡不明	SI7→本跡
178	O20b0	円形	-	0.79×0.75	24	外傾	平坦	-	自然	-	SI8→本跡
179	N20i0	円形	-	0.33×0.31	10	緩斜	皿状	-	-	-	
180	N20i0	方形	N-39°-E	0.70×0.70	38	緩斜	皿状	-	自然	-	
181	N20i0	円形	-	0.47×0.45	20	外傾	皿状	-	自然	-	
182	N20j9	楕円形	N-0°	0.58×0.50	97	垂直	皿状	-	自然	-	
183	M21i1	楕円形	N-35°-E	1.55×1.35	45	外傾	平坦	2	人為	-	本跡→SK134
184	M20g0	楕円形	N-72°-W	0.94×0.53	47	外傾	皿状	-	自然	-	SK144→本跡

(3) 不明遺構

第1号不明遺構(第58図)

位置 調査区北西部のP22a0区、標高26.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東西6.42m、南北4.80mの長方形の範囲に、ピット14か所と炉1基が確認された。

炉 長径64cm、短径54cmの楕円形で、地山を15cm掘りくぼめた地床炉である。長径方向はN-0°で、底面は皿状である。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
2 赤褐色 焼土ブロック中量

- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
4 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 14か所。平面形は円形または楕円形で、長径20～72cm、短径20～64cmである。深さは13～107cmで、断面形はU字状または逆台形である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子微量

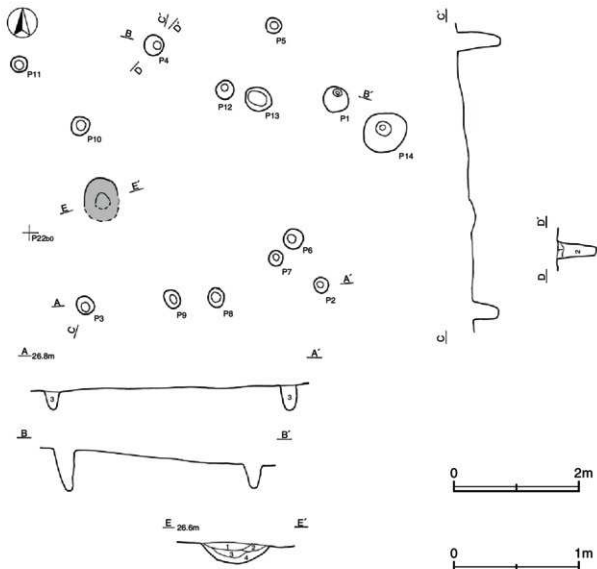
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

表8 第1号不明遺構ピット計測表

ピット番号	形状	規模 (cm)	
		長径×短径	深さ
1	円形	38×36	36
2	円形	20×20	38
3	円形	28×28	40
4	円形	30×30	55
5	円形	24×24	15

ピット番号	形状	規模 (cm)	
		長径×短径	深さ
6	楕円形	32×28	38
7	楕円形	28×24	20
8	楕円形	30×22	42
9	楕円形	28×24	30
10	円形	28×28	13

ピット番号	形状	規模 (cm)	
		長径×短径	深さ
11	円形	24×24	14
12	円形	30×28	26
13	楕円形	44×36	18
14	楕円形	72×64	107

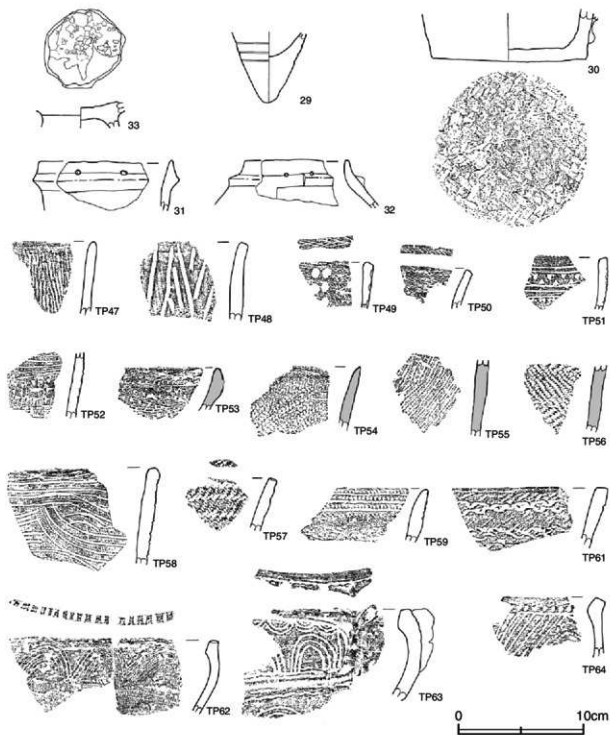


第58図 第1号不明遺構実測図

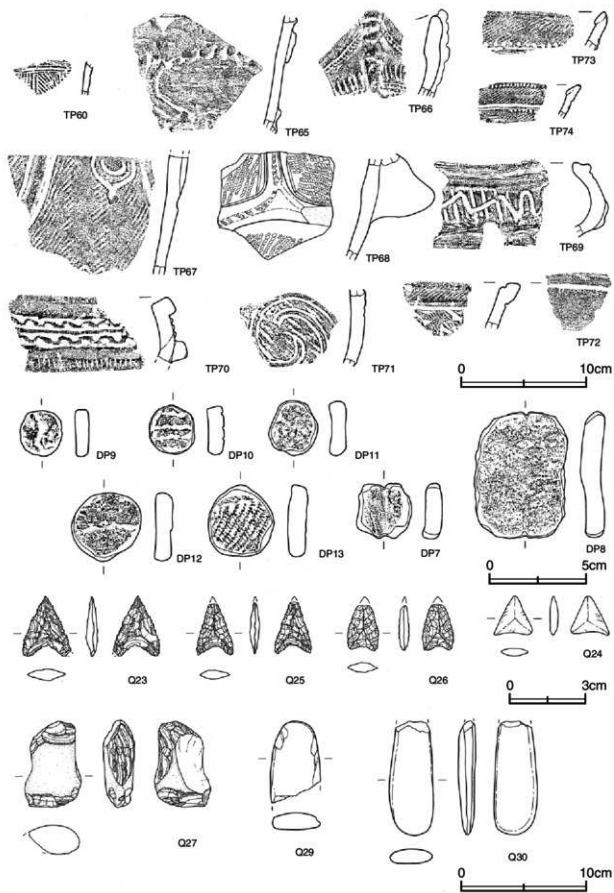
所見 竈を中心として、P3・P4・P6～P9・P11・P12を柱穴と想定すると、径5mほどの円形の住居跡と想定することも可能であるが、床や壁が確認できず、ピットの規模や配置に規則性が認められないため、住居跡と判断しなかった。時期は、出土遺物がなため不明である。

(4) 遺構外出土遺物

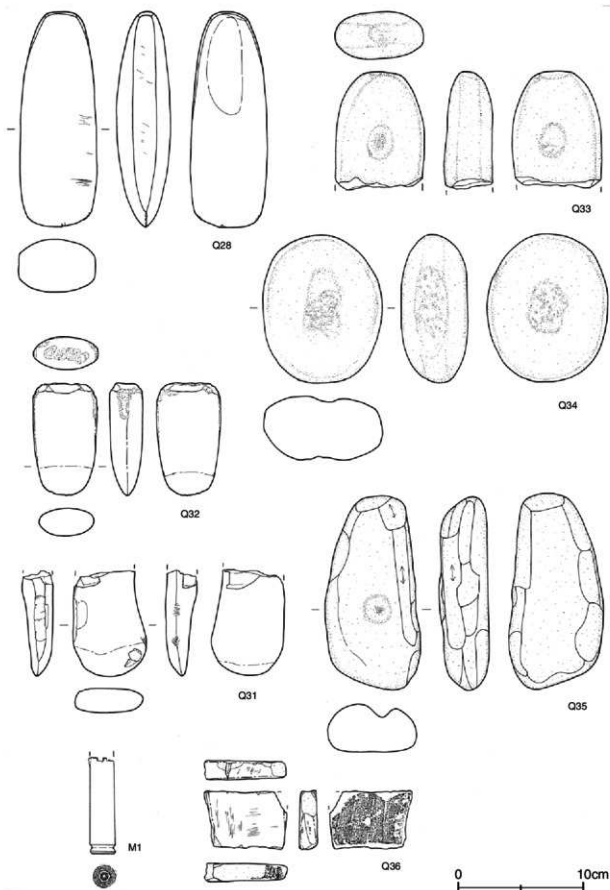
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図(第59～61図)と観察表を掲載する。



第59図 遺構外出土遺物実測図(1)



第60图 遗構外出土遺物実測図(2)



第61図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第59~61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴・手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線文	P23	5% PL5
30	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	6.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	刷目のある隆帯 底部網代痕	O21	5%
31	縄文土器	有孔深鉢土器	[10.6]	(3.9)	—	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部に穿孔2か所 断面三角形状の隆帯	O22	5%
32	縄文土器	有孔付土器	[8.2]	(3.5)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部に穿孔4か所 断面三角形状の隆帯	M22	5% PL5
33	土師器	高台付杯	—	(2.2)	—	長石・石英・赤色粒子	灰黄	二次	内底面に鉄釘着 埴輪転用	P22	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP47	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	無飾L	N21	PL5
TP48	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	沈線文	P23	
TP49	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	貝殻微線文 刺突文 口唇部に斜交する沈線文	O24	
TP50	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	貝殻微線文 口唇部に沈線による刷目	P23	
TP51	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	沈線文 交互三角形刺突文 口唇部に磨き	O24	PL5
TP52	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	沈線文 刺突文	P23	
TP53	縄文土器	深鉢	長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	半截竹管による刺突文	O24	PL5
TP54	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい黄橙	普通	単節縄文LR	O24	PL5
TP55	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にぶい黄	普通	附加条一種 (附加一条)	O21	
TP56	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	普通	羽状縄文	O22	
TP57	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部口縁部単節縄文LR 横位に厚体押圧	P24	
TP58	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	平行沈線文 木葉状文	P21	
TP59	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	平行沈線文 半截竹管による刺突文	O24	
TP60	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	横位三条のソーマン状浮線文 半截竹管による集合沈線文	P22	PL5
TP61	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文LR 結節縄文	P22	PL5
TP62	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に刷目 櫛歯状工具による弧線文	O22	
TP63	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口唇部に有節沈線文 断面三角形隆帯による歯形区画内に有節沈線文	M21	PL6
TP64	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	刷目のある隆帯 有節沈線文	O21	
TP65	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	断面三角形隆帯による磨き文 ヒダ状の輪帯痕	O21	PL5
TP66	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	蓋部から刷目のある隆帯を形成 三条の角状文 刷目同	O22	PL6
TP67	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にぶい黄橙	普通	口唇部の隆帯に有節沈線文 縦位の半截縄文L 沈線による文様	O24	PL6
TP68	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にぶい黄橙	普通	縦位の単節縄文LR 突起部にも縄文施文	O24	PL6
TP69	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に凹線 縦位の沈線施文後に蛇行沈線文	O24	PL6
TP70	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部区画内に交互刺突文 口縁部下縁に刷目	P21	O4
TP71	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	普通	地文単節縄文LR 半截竹管による磨き文	O24	
TP72	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部単節縄文LR 口縁部直下に横位1条の沈線文 網目施文単節縄文LR 三角刺突文	O21]0	
TP73	弥生土器	壺	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	折り返し口縁 単節縄文LR 円形刺突文	P22	PL6
TP74	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	折り返し口縁 単節縄文LR 口縁直下に横位三条の沈線文と刺突文 口唇部に刷目	O22	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP7	土師片鉢	3.0	3.0	1.0	8.6	長石・石英	周縁部研磨 上下に刷み	O21	PL6
DP8	土師片鉢	6.7	4.9	1.2	52.2	長石・石英・雲母	周縁部研磨 上下に刷み	T21	PL6
DP9	土師片円盤	2.4	2.2	0.7	4.5	長石・石英・赤色粒子	周縁部全周研磨	P21	PL6
DP10	土師片円盤	2.6	2.5	0.9	7.1	長石・石英	周縁部全周研磨	O22	PL6
DP11	土師片円盤	2.9	2.7	0.9	6.7	長石・石英・赤色粒子	周縁部全周研磨	P21	PL6
DP12	土師片円盤	3.7	3.6	1.0	13.7	長石・石英	周縁部全周研磨	N22	PL6
DP13	土師片円盤	3.8	3.5	1.0	15.2	長石・石英	周縁部全周研磨	O21	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	石鏃	2.4	(1.9)	0.5	(1.3)	チャート	凹基無茎跡 両面押圧剥離 基部欠損	M216	PL9
Q24	石鏃	1.6	1.5	0.3	0.5	トロトロ石	調整痕不明	T21	PL9
Q25	石鏃	(2.1)	1.5	0.4	(0.8)	チャート	凹基無茎跡 両面押圧剥離 先端部欠損	N21	PL9
Q26	石鏃	(1.8)	1.3	0.4	(0.8)	チャート	凹基無茎跡 両面押圧剥離 先端部欠損	O21	PL9
Q27	打製石斧	(6.9)	(4.5)	2.6	(87.5)	凝灰岩	括れの弱い分銅形 括れに敲打痕あり 磨面を研磨	P21	
Q28	磨製石斧	17.1	6.0	4.3	675.0	凝灰岩	全面を丁寧に研磨 刃部に僅かな刃こぼれ	表採	PL9
Q29	磨製石斧	(6.5)	(3.9)	1.3	(49.8)	凝灰岩	全面を研磨 刃部欠損	O21	
Q30	磨製石斧	(9.2)	3.5	1.3	(69.0)	凝灰岩	刃部は表面を強く研磨し、表面は平坦に研磨しており片方に深い	表採	
Q31	磨製石斧	(8.2)	5.8	2.4	(147.5)	凝灰岩	刃部は表面を強く研磨し、表面は平坦に研磨しており片方に深い、基部と後縁部の一部欠損	O21	
Q32	磨製石斧	8.9	5.1	2.6	(192.7)	凝灰岩	全面を丁寧に研磨 基部欠損後縁石に転用カ	M20	
Q33	凹石	(9.3)	7.1	3.9	(382.0)	砂岩	表裏に凹み2か所	O22	
Q34	凹石	11.8	9.5	5.3	868.0	安山岩	表裏に凹み3か所 側面に磨痕	N21	
Q35	凹石	15.4	7.6	3.9	687.0	安山岩	凹み1か所 側面に磨痕	M21	PL9
Q36	砥石	(4.6)	(6.6)	1.5	(68.5)	凝灰岩	砥面3面 鋸による切削痕	P21	
番号	器種	長さ	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
M1	機頭砲臺美	(7.4)	2.0	(46.4)	黄銅	底部に刻印「DM43」 アイオワ州デモイン1943年製造	M20	PL9	

第4節 ま と め

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡6軒、炉穴1基、土坑6基、古墳時代の竪穴住居跡4軒、土坑2基、中世の地下式土坑1基、近代の炭焼窯跡6基、時期不明の溝跡1条、土坑164基、不明遺構1か所が確認され、当遺跡は縄文時代、古墳時代、中世、近代と断続的に形成された複合遺跡であることが明らかになった。遺構は、調査区の西部に土坑群と縄文時代の住居跡が確認され、台地平坦部の中央部から斜面となる台地縁辺部の南部にかけて古墳時代の住居跡が確認されている。調査区の東部は戦後の開拓・植林等によって掘り返されており、遺構は確認されなかった。

縄文時代には、確認された住居跡を拠点として、調査区西側の台地縁辺部にムラが営まれたと考えられる。その後、古墳時代の前期及び後期に小規模な集落が営まれ、近代には炭の生産地として調査区南西部の台地縁辺部の斜面が利用されたとみられる。

ここでは、当遺跡の各時代ごとの様相と若干の考察を加えてまとめとする。

1 各時代の様相について

(1) 縄文時代

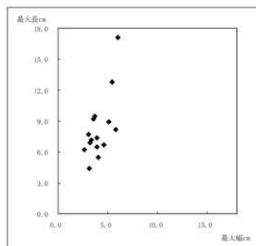
当時代の遺構は、竪穴住居跡6軒（前期1、中期5）、炉穴1基（早期）、土坑6基（中期5、後期1）が確認された。

第1号炉穴は調査区南部の谷津に向かう台地縁辺部の斜面に位置し、出土土器から早期後半（田戸下層式期）に比定した。該期の遺構は本跡だけであるが、遺構に伴わない縄文土器の中には、田戸下層式土器が少量出土している。

第5号住居跡は、出土土器から前期後半（浮島式期）に比定した。平面形は方形で明確な主柱穴は確認されなかったが、中央部に地床炉があり、規模や形状は石岡市外山遺跡の第62号住居跡に類似している²¹。早期から前期にかけての遺構は少ないが、遺構に伴わない遺物が一定量出土していることから、当遺跡の周辺に集落があった可能性がある。

当遺跡で出土した縄文時代中期の土器は、阿玉台ⅠaからⅡ式土器²²を主体としている。出土土器の口縁部には平口縁と波状口縁があり、口縁部文様帯には区画文が配され、隆帯に沿って単列もしくは複列の角押文や有節沈線文が施されている（第7図TP6、第9図TP13）。中には、区画内側に角押文によって弧状のモチーフを描くもの（第11図TP15、第12図TP18）もある。波頂部には、皿状の突起を付けたもの（第7図TP4・TP7、第19図TP37）があり、阿玉台前半期の特徴をもっている。胴部には粘土帯の接合部にヒダ状圧痕を施すもの（第7図TP9）や刻み目列を施すもの（第9図TP11・TP14）がある。出土土器から、第6A・6B号住居跡及び第10号住居跡は阿玉台Ⅰb式期、第7から9号住居跡は阿玉台Ⅱ式期に比定した。

住居跡内から最大長10.0cm以下、最大幅5.0cm以下の小形の磨製石斧の出土が多いことにも着目したい²³。当



出土磨製石斧の長幅比

遺跡全体から出土した磨製石斧15点の内、約半数の8点が住居跡からの出土であり、内完形のは6点である。これら小形の磨製石斧の石材は、ほとんどが凝灰岩であり、全面は荒く研磨されているが、刃部の表面を特に強く研磨し、片刃に近いものもみられる。

住居構造については、第6A・6B号から第10号住居跡まで6軒が重複しており、床面のレベルには違いがみられない。規模は、長径4.45～5.60m、短径3.88～4.86mで、形状は円形または楕円形である。内部施設は、各住居跡に地床炉が設けられているが、支柱穴は明確なものとそうでないものがある。同時期の住居跡には、炉を有しない住居跡が多いとされているが、石岡市大谷津A遺跡第54・26号住居跡では地床炉が確認されており、規模は当遺跡の方が若干大きい類似性が指摘できる⁴⁾。

また、巴川を挟んで対岸の鉾田市の遺跡分布状況を見ると、巴川の支流によって開折された谷津の周縁部で標高25～35mの範囲に同時期の遺跡が多く、当遺跡も同様な立地条件の下に、生活の場が形成されていたことが明らかになった。巴川右岸の遺跡では、当遺跡から南西方向に位置し、谷津をはさんで対岸に所在する石川西遺跡⁵⁾から、阿玉台Ib式期から加曾利EⅣ式期までの竪穴住居跡15軒や土坑87基が確認されており、主体となる時期は加曾利EⅡ式期とみられる。その内、当遺跡と同時期の阿玉台Ⅱ式期の遺構は、住居跡1軒、フラスコ状土坑2基、土坑1基が確認されており、土坑群は住居跡に伴う貯蔵域の可能性が指摘されている。当遺跡においては、住居群に伴う同時期の土坑群及び明確なフラスコ状土坑は検出されていない点で、石川西遺跡の集落様相とは違いがみられる。当遺跡と石川西遺跡の間には集落の移動もしくは季節的な移住の可能性も想定される。今後は両遺跡の遺構や出土遺物の綿密な比較検討が必要であろう。

(2) 古墳時代

当時代の遺構は、竪穴住居跡4軒(前期2, 後期2), 土坑2基(中期)が確認された。竪穴住居跡はいずれも調査区南東部の台地の平坦部から谷津に向かう斜面部にかけて位置している。時期については、出土土器から第1・4号住居跡が前期後葉、第2・3号住居跡が後期中葉に比定した。

第1・4号住居跡は規模や形状、主軸方向がほぼ同じで約4m離れて隣接することから、ほぼ同時期の住居と考えられる。また、第4号住居跡は柱穴の配置から建て替えの可能性が考えられ、東西方向及び北側に拡張されたものと考えられる。第2号住居跡はN-35°-W、第3号住居跡はN-61°-Wと、主軸方向は異なっているが、規模や形状、内部施設はほぼ同じである。両住居跡とも床面から炭化材が出土しており、焼失住居とみられる。第2号住居跡の竈は遺存状況が良く、天井部が遺存していた。

これらの住居群を含んだ集落の様相については、調査区南東部の谷津に向かう斜面部に限定されており、調査区中央部の台地平坦部には遺構が確認できなかったことを考慮すれば、集落は台地縁辺部に限られた小規模なものであった可能性が高い。

第137・138号土坑は、調査区北東部のM21g3区に隣接して確認されている。出土土器から古墳時代中期後葉に比定した。覆土は埋め戻された状況を示していることから墓坑の可能性も考えられるが、明確ではない。また、遺構の周辺からは同時期の土師器片が若干確認されているが、遺構に伴う同時期の土器は確認されていない。調査区内には古墳時代中期の住居跡など集落の痕跡は確認されていないが、調査区域外の北部に同時期の集落が展開していた可能性が想定される。

(3) 中世

当時代の遺構は地下式坑が1基確認されている。出土遺物はないが、形状から中世の地下式坑と判断した。本跡周辺に同時期の遺構は検出されず、また、遺構確認時の表土中からも中世の所産とみられる遺物

は、確認されていないため、当遺跡における中世期の様相は不明である。

(4) 近代

近代の炭焼窯跡6基が、調査区南部の標高27.6mの台地縁辺部に並んで確認されている。これらの遺構は、長径方向がN-63~87°-Wで、ほぼ同一方向を意識して構築されている。また、台地縁辺部の斜面を利用し、前庭部を南部の斜面から、燃焼室及び煙道部を北側の台地部に向けて、それぞれ構築している。構造は明治時代末期から導入が進んだ改良窯⁸⁾である。構造上の特徴として炭化室と前庭部の間に粘土や礫による障壁を設け、冷風を防ぐことで灰化と未炭化を防ぐ構造であることが挙げられる。

茨城町大畑遺跡¹⁾で近代以降と考えられる炭焼窯跡4基、また同町堂越遺跡²⁾では出土遺物から明治末以降から戦前に比定される炭焼窯1基がそれぞれ確認されており、遺構の規模や形状が類似していることから、当遺跡の炭焼窯も同時期のものと考えられる。炭焼窯は昭和30年代後半からの石炭・木炭から石油・ガスへの燃料革命と、それに伴う生活の電化・ガス化によって炭の需要がなくなることによって失われていったようである。

註

- 1) 鈴木美治 大森雅之 荒井保雄 池田晃一 吹野富美夫 「茨城県における縄文時代前期後半における住居形態」『研究ノート』第3号 茨城県教育財団 1995年6月
- 2) 塚本師也 「茨城県北部域に於ける縄文時代中期中葉の土器の様相」『領域の研究-阿久津久先生選哲記念論集』2003年4月
塚本師也 「阿玉台式土器」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』小林達雄 2008年6月
- 3) 手塚達弥 「藤岡神社遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第197集 2001年3月
- 4) 大森雅之 田所朋夫 荒井保雄 池田晃一 吹野富美夫 「茨城県における縄文時代中期前半における住居形態」『研究ノート』第4号 茨城県教育財団 1995年6月
- 5) 小川貴行 「石川西遺跡 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第321集 2009年3月
- 6) 岸清俊 「埼玉における木炭生産と炭窯の変遷」『研究紀要』第10号 埼玉県立歴史資料館 1988年3月
- 7) 長谷川聡 「北関東自動車道(友部~水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡 大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 1998年3月
- 8) 小松崎和浩 「堂越遺跡 一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第245集 2005年3月

第4章 石川塚

第1節 調査の概要

石川塚は、小美玉市の東部に位置し、巴川右岸の樹枝状に開折された谷津から分岐する小支谷の谷津頭に面する、標高27mの台地上に立地している。調査面積は423.25㎡で、調査前の現況は山林である。

今回の調査では、塚1基（近世）、掘立柱建物跡2棟（近世）、墓坑3基（近世）、土坑10基（近世3、時期不明7）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な遺物は、土師質土器（小皿・灯明皿・十能）、陶器（碗・皿・仏飯器・播鉢・片口鉢・香炉・花瓶）、磁器（碗・皿・仏飯器・香炉）、石器（砥石）、金属製品（釘・火打金・煙管・古銭）などである。

第2節 基本層序

調査区東部のN16d0区にテストピットを設定し、深さ1.5mまで掘り下げて基本土層（第62図）の観察を行った。土層は6層に分層でき、観察結果は以下の通りである。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層で、ロームブロックを微量含み、粘性は強く、締まりは弱い。層厚は12～40cmである。

第2層は暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層で、ロームブロックを微量含み、粘性は強く、締まりは弱い。層厚は10～32cmである。

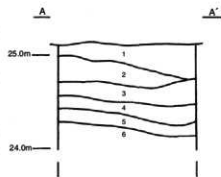
第3層は褐色を呈するソフトローム層で、砂質粘土粒子を中量含み、粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は7～24cmである。

第4層は褐色を呈するハードローム層への漸移層で、砂質粘土粒子を中量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は12～20cmである。

第5層は灰褐色を呈するハードローム層で、砂質粘土粒子を中量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は15～35cmである。

第6層は灰褐色を呈するハードローム層で、砂質粘土粒子を多量含み、粘性・締まりともに強い。下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構の多くは第2層上面で確認されている。



第62図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 近世の遺構と遺物

当時代の遺構は、塚1基、掘立柱建物跡2棟、墓坑3基、土坑3基である。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 塚

第1号塚 (第63図)

位置 調査区北部のN16d4区、標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 調査前に、塚頂部に2基、南側の裾部に6基の石塔が並んで確認された。これらの石塔は本調査前に移設されているが、台石や破砕した石が塚の表土に残されていた。これらの遺物と移設された石塔については、第1～5号石塔跡として本報告の中で紹介する。

重複関係 塚頂部の第2・3層上面から第10層下面までを第1・2号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径9.77m、短径9.18mの円形で、現地表面から塚頂部までの高さは148cmである。

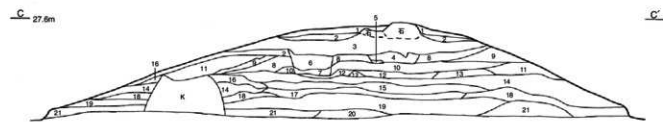
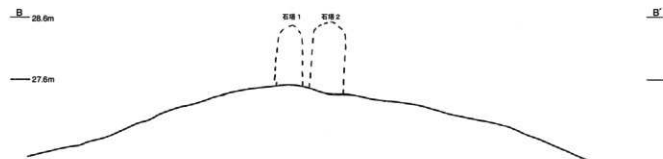
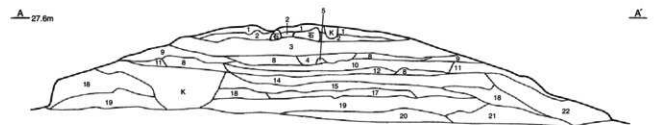
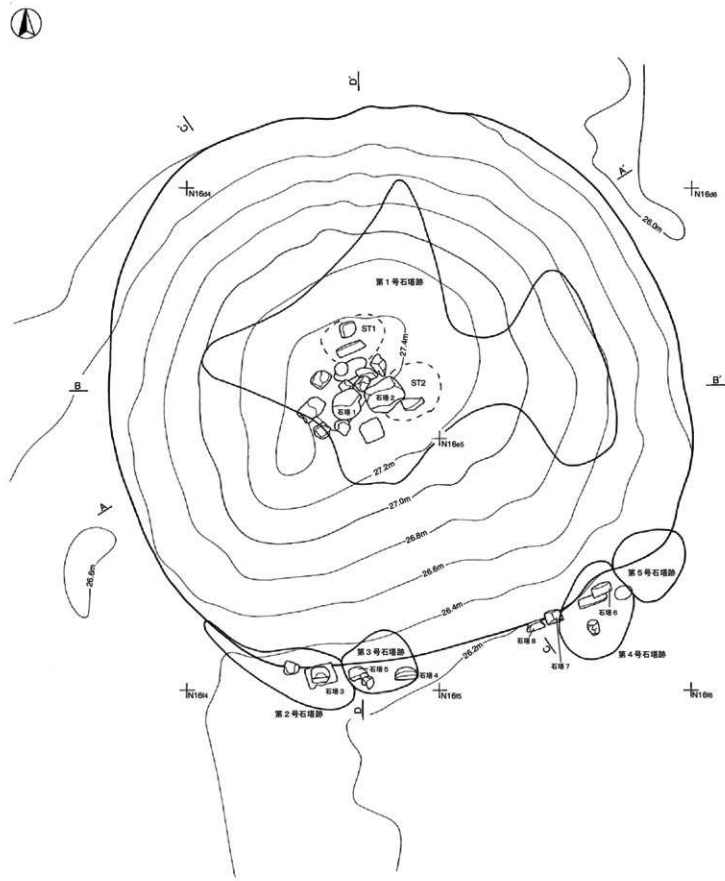
構築状況 2層からなる。地山面を基部とし、周囲の旧表土を地山面まで掘り込んだ後、中央部からロームブロックを中量含んだ褐色土である第20～22層を盛土している。その後、焼土粒子や炭化粒子を含む黒色土や暗褐色土である第8～19層を平坦に積み上げて構築している。第4・5層は第1号墓坑の覆土、第6・7層は第2号墓坑の覆土で、第2・8層上面から掘り込まれている。第2層と第3層が互層になっていることから、塚頂部から第3層までは塚の構築後に削平されており、第1・2号墓坑が構築された後、第1～3層を盛土していると考えられる。

土層解説

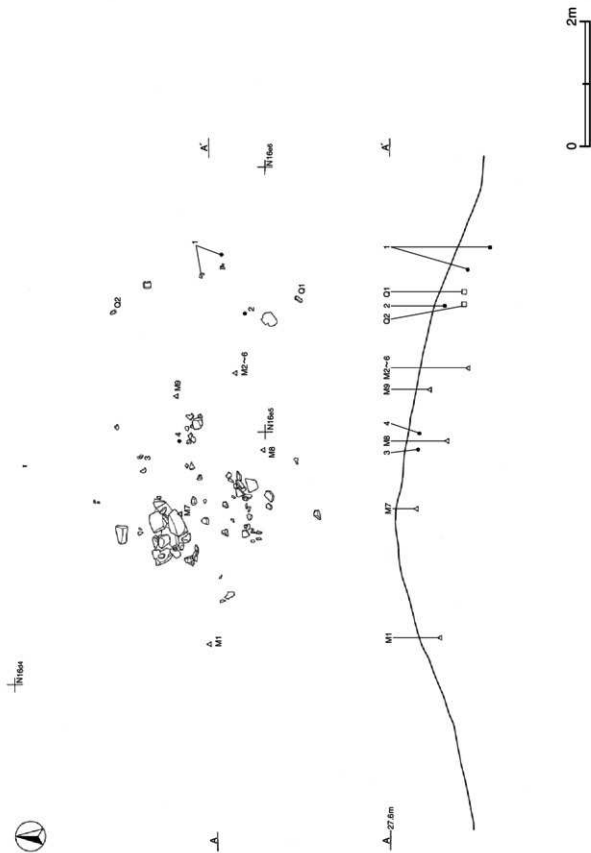
1 暗褐色	ロームブロック微量 (粘性弱い)	12 暗褐色	ロームブロック少量 (粘性強い)
2 暗褐色	ローム粒子微量	13 褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック微量 (粘性強い)	14 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子微量	15 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック微量	16 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
6 黒褐色	ロームブロック少量	17 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック少量 (粘性弱い)	18 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム粒子少量	19 暗褐色	ローム粒子中量
9 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	20 褐色	ロームブロック少量
10 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	21 褐色	ロームブロック中量
11 褐色	ローム粒子中量	22 褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 塚の封土から出土した遺物はない。調査前には、塚頂部には石塔1・石塔2、南西側の裾部に石塔3～石塔5、南東側の裾部に石塔6～石塔8が造立されていた。調査時には、塚部及び裾部から石(石塔・台石)に混じって近世とみられる陶磁器が出土している。

第1号石塔跡 (第64～67図) 頂部のN16d4区に位置している。多くの石(石塔・台石)に混じって、土師質土器1点(小皿)、陶器片6点(碗3、皿2、仏飯器1)、磁器片2点(皿、仏飯器)、瓦質土器片1点、石器3点(砥石2、不明1)、金属製品10点(釘1、古銭7、不明2)が出土している。石は塚頂部に散在しており、一部は第1～3層に埋められて石塔下の台石になっていた。これらの石に混じって、1・2、Q1・Q2、M2～M6は東部、3・4、M7・M8は中央部、M1は西部からそれぞれ出土している。また、本調査前には石塔1・石塔2が造立されていたが、調査開始前に移設されている。石塔1の正面中央には像容地藏菩薩、右に戒名「権大僧都秀海上人」、左に紀年銘が刻まれており、元禄元(1688)年の建立年である。石塔2の正面中央には像容大日如来、右に「奉讀誦普門品七千貳百卷成就所」銘文、左に紀年銘及び僧名「秀海上人」「重

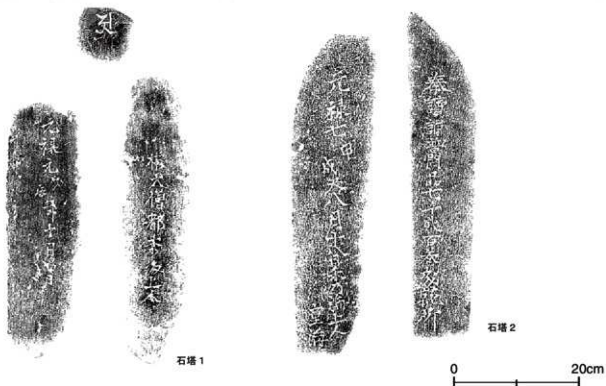


第63図 第1号塚実測図



第64図 第1号石塔跡実測図

海」が刻まれており、元禄7（1694）年の建立年である。塚の構築状況から、石塔1・石塔2は塚頂部が再構築された後に移設されたものとみられる。



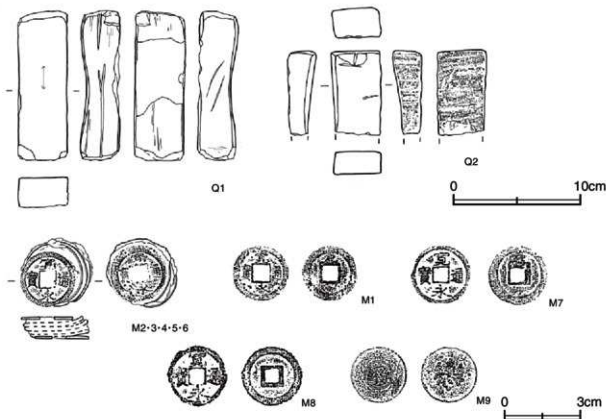
第65図 第1号石塔跡遺物拓影図

第1号石塔跡遺物観察表（第65～67図）

番号	種別	長さ	幅	厚さ	材質	形態	像容	銘文		出土位置	備考	
								正面	裏面			
石塔1	墓石	120.0	60.0	30.0	安山岩	舟型	地藏菩薩	正面「真」	正面右「種大徳都寄海上人」	正面左「宗徳元改元年十月四日」	塚頂部	PL10
石塔2	護国塔	120.0	50.0	30.0	安山岩	舟型	大日如来	正面右「華嚴護国門品七子護百毒成風所」	正面左「元禄七年丙辰六月十八日身護上人 重刻」	塚頂部	PL10	



第66図 第1号石塔跡出土遺物実測図（1）



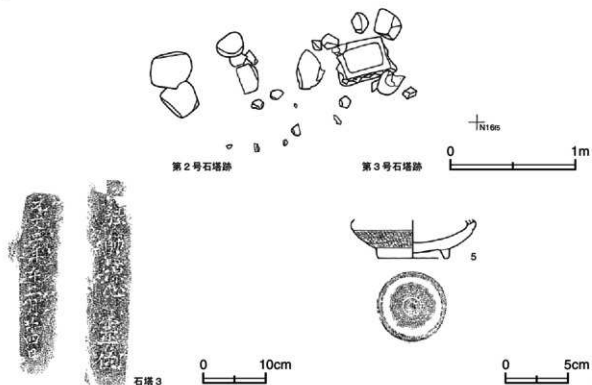
第67図 第1号石塔跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・軸	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	陶器	花瓶	—	(5.7)	[10.8]	細砂・鉄軸	明褐色	良好	尊式花瓶 高台貼り付け	東部	10%
2	磁器	碗	[10.0]	5.5	4.2	緻密・透明軸	灰白	緊緻	肥前系 草花文	東部	80% PL13
3	磁器	碗	[11.0]	5.5	[4.0]	緻密・透明軸	灰白	緊緻	肥前系 大小の天文 見込みにも二重 扇線と此文 巻目止め	中央部	40% PL13
4	磁器	仏飯器	8.0	5.7	4.2	緻密・透明軸	黄トリア 灰	緊緻	肥前系 花文 籠の日高台 巻目止め	中央部	70% PL13

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q1	砥石	(11.9)	4.1	3.1	(257.0)	凝灰岩	砥面4面使用	端部欠損	東部	PL14
Q2	砥石	(6.8)	4.0	2.3	(93.1)	凝灰岩	砥面2面使用	端部欠損	東部	PL14

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	初铸年	材質	特徴		出土位置	備考
M1	寛永通寶	2.2	0.6	0.10	2.0	1741	銅	新寛永 背文 高津銭 銅1文銭	西部	PL14	
M2	寛永通寶	2.2	0.5	0.10		1668	銅	新寛永 錆のため融着 背面不明	東部	PL14	
M3	寛永通寶	2.3	—	—		1739	鉄	錆のため融着 鉄1文銭*	東部	PL14	
M4	寛永通寶	2.3	—	—		1739	鉄	錆のため融着 鉄1文銭*	東部	PL14	
M5	寛永通寶	2.4	—	—		1739	鉄	錆のため融着 鉄1文銭*	東部	PL14	
M6	寛永通寶	2.4	0.5	0.10	3.1	1668	銅	新寛永 錆のため融着 背面不明	東部	PL14	
M7	寛永通寶	2.4	0.5	0.11		1636	銅	古寛永 無背 銅1文銭	中央部	PL14	
M8	寛永通寶	2.4	0.5	0.12	2.6	1636	銅	古寛永 無背 銅1文銭	中央部	PL14	
M9	銅貨	2.3	—	0.11		1920	青銅	樹1銭背銅貨	塚表土	PL14	

第2号石塔跡 (第68図) 裾部のN16e4区, 第3号石塔跡の西側に隣接している。多くの石(石塔・台石)に混じって, 陶器(碗), 瓦質土器(香炉), 鉄製品(不明), 瓦, 各1点が出土している。5は北西部から出土しており, 供物として供えられていたものと考えられる。本調査前には石塔3が造立されていたが, 調査開始前に移設されている。石塔3の正面中央には像容地藏菩薩, 右に戒名「法師源心靈位」, 左に紀年銘が刻まれており, 元文3(1738)年の建立年である。

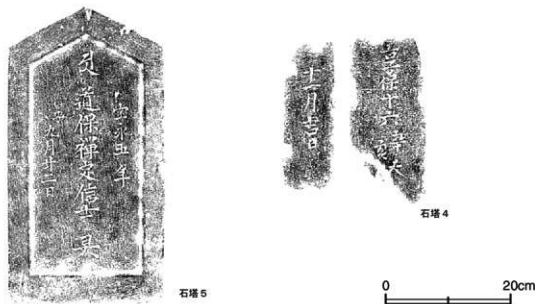


第68図 第2・3号石塔跡実測図・第2号石塔跡遺物拓影図・出土遺物実測図

第2号石塔跡遺物観察表(第68図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	材質	形態	像容	銘文	出土位置	備考	
石塔3	墓石	45.0	30.0	22.0	安山岩	舟型	地藏菩薩	正面右「法師源心靈位」正面左「元文三平年二月廿四日」	裾部南西側	PL10	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	瓦質土器	香炉	—	(3.0)	5.6	雲母・長石	黄灰	堅緻	手法の特徴ほか 裾部南西側へつらねられ高台石版り付 下部によびタタシによる文様編文	北西部	70% PL13

第3号石塔跡 (第68・69図) 裾部のN16e4区, 第2号石塔跡の東側に隣接している。多くの石(石塔・台石)が出土している。本調査前には石塔4・石塔5が造立されていたが, 調査開始前に移設されている。石塔4の正面中央には像容如意輪観音菩薩が, 左右には紀年銘が刻まれており, 享保16(1731)年の建立年である。石塔5は墓石で, 正面中央に戒名, 左右に紀年銘が刻まれており, 宝永5(1708)年の建立年である。

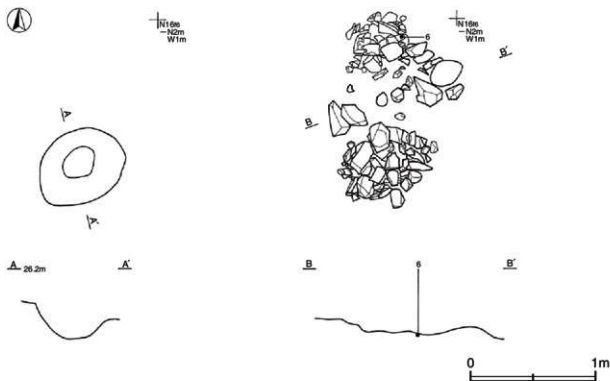


第69図 第3号石塔跡遺物拓影図

第3号石塔跡遺物観察表 (第69図)

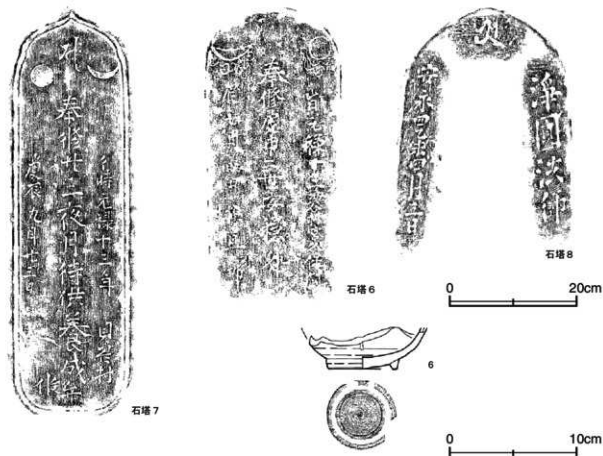
番号	種別	長さ	幅	厚さ	材質	形態	像容	銘文	出土位置	備考
石塔4	石仏	65.0	40.0	15.0	安山岩	舟型	知恵輪 願念珠掛	正面右「享徳十六年庚天」 正面左「十一月吉日」	塚裾部南西側	PL10
石塔5	墓石	50.0	30.0	12.0	安山岩	胸型	—	北面「壽 高保神定冠土(墓) 正面石「宝永五年」 正面左「字 九月廿一日」	塚裾部南西側	PL10

第4号石塔跡 (第70・71図) 裾部のN16e5区, 第5号石塔跡の西側に隣接している。本跡南部の石集中地点の下には掘方が検出された。長径0.73m, 短径0.58mの楕円形で, 長径方向はN-40°-Eである。深さは22cmで, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。多くの石(石塔・台石)に混じって, 陶器16点



第70図 第4号石塔跡実測図

(碗4, 皿3, 不明9), 磁器18点(碗1, 花瓶2, 皿2, 香炉4, 不明9), 瓦質土器3点(不明), 鉄製品4点(不明)が出土している。6は北部から出土しており, 供物として供えられたものが石とともに埋め戻されたものと考えられる。本調査前には石塔6~石塔8が造立されていたが, 調査開始前に移設されている。石塔6は庚申塔で, 正面中央に銘文, 左右に紀年銘と村名が刻まれており, 元禄13(1700)年の建立年である。石塔7は二十三夜塔で, 正面中央に銘文, 左右に紀年銘と村名が刻まれており, 元禄13(1700)年の建立年である。石塔8は墓石で, 正面中央には像容地藏菩薩, 右に戒名「淨圓法師」, 左に紀年銘が刻まれており, 安永4(1775)年の建立年である。



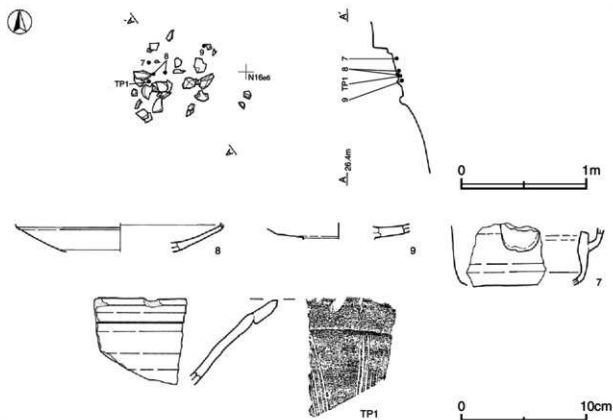
第71図 第4号石塔跡遺物拓影図・出土遺物実測図

第4号石塔跡遺物観察表(第71図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	材質	形態	像容	銘文	出土位置	備考
石塔6	庚申塔	70	30	15	安山岩	楕型	—	正面「奉願庚申一萬安延」 正面右「元禄十三春谷村宮入 延平」 正面左「元禄十三春谷村宮入 延平」 背面「奉願庚申一萬安延」 背面右「元禄十三春谷村 宮入延平」 背面左「元禄十三春谷村宮入延平」	塚原部南東側	PL10
石塔7	二十三夜塔	75	25	15	安山岩	胸型	—	正面「奉願庚申一萬安延」 正面右「元禄十三春谷村宮入 延平」 正面左「元禄十三春谷村宮入延平」	塚原部南東側	PL10
石塔8	墓石	55	25	15	砂岩	舟型	地藏菩薩	正面「浄圓法師」 正面左「安永四 乙未四月三日」	塚原部南東側	PL10

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
6	陶器	丸碗	—	(3.3)	5.6	細砂・黒色粒子・胎釉	黒ナリブ	良好	瀬戸共造系 前り出し高台 体部 下蓋蓋	北部	80%

第5号石塔跡(第72図) 裾部のN16e5区, 第4号石塔跡の東側に隣接している。多くの石(石塔・台石)に混じって, 陶器27点(碗7, 皿8, 片口2, 搦鉢1, 德利1, 不明8), 磁器22点(碗16, 花瓶1, 香炉5)が出土している。7~9は中央部の表土から出土しており, 供物として供えられていたものと考えられる。



第72図 第5号石塔跡・出土遺物実測図

第5号石塔跡遺物観察表（第72図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	陶器	片口	-	(4.5)	-	細砂・灰釉	オリーブ黒	良好	瀬戸美濃系 口部起り付付 内外両施釉 底部下縁露胎	中央部	10%
8	陶器	皿	-	(2.3)	-	細砂・銅緑釉	浅黄	良好	瀬戸美濃系 底部下縁露胎	中央部	15%
9	陶器	皿	-	(1.2)	-	細砂・銅緑釉	浅黄	良好	瀬戸美濃系 底部下縁露胎 足込施釉	中央部	5%
番号	種別	器種	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考			
TP1	陶器	摺鉢	長石・細砂・細緑・鉄釉	にい黄青	良好	6条1単位の襷目		表土	5%		

所見 石塔の紀年銘からは、石塔1の元禄元（1688）年が最も古く、石塔8の安永4（1775）年が最も新しい。銘文から読み取れる石塔の性格は、石塔1・石塔3・石塔5・石塔8が墓石で、その内石塔5以外は僧侶の墓石である。また、石塔6は庚申塔、石塔7は二十三夜塔、石塔4は石仏である。これらの石塔は建立年や性格が異なることから、すべてが本跡に伴う可能性は低い。また、聞き取り調査によると「戦後、石川塚の頂部は地域の青年団によって掘り返されている」とことや「戦中、開発等によって地域にあった塚が壊されており、その際に石塔類が本跡周辺に集められた可能性がある」との証言があったことから、石塔は塚の構築後に移設されたものと考えられる。塚の築造時期は、出土土器と重複関係、築造状況から17世紀後半から18世紀前半と考えられるが、その性格については明らかでない。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第73・74図）

位置 調査区東部のN16e7区、標高25.6mの台地平坦部で、第1号塚の裾部から東側に7m離れて位置している。

重複関係 第6号土坑を掘り込んでいる。第2号掘立柱建物跡のP1と重複しているが、柱穴との切り合いがないため新旧は不明である。

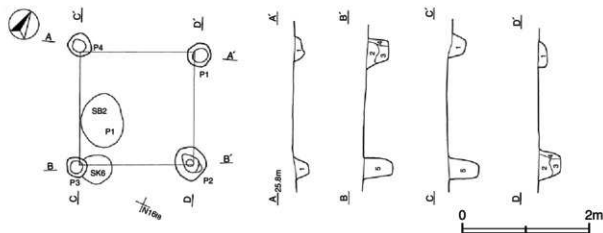
規模と構造 桁行、梁行とも1間の側柱建物である。南面を桁行とみると桁行方向は、 $N-67^{\circ}-E$ である。規模は桁行、梁行とも1.8m（6尺）で、面積は3.24㎡である。柱間寸法は桁行、梁行とも1.8m（6尺）を基調としている。

柱穴 4か所。平面形は円形で、規模は径33～52cmである。深さは21～46cmで、断面形はU字状または逆台形状である。第4層は埋土、他は柱抜き取り後の覆土で締まりの弱い暗褐色土が主体である。

土層解説（各柱穴共通）

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック少量



第73図 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 陶器片1点（碗）、古銭1点（寛永通寶）がP1の覆土中から出土している。

所見 本跡は柱穴の規模が小さく、簡易な構造であることから、第1号塚に伴う小堂としての機能が想定される。時期は、第1号塚の年代観から18世紀前半と考えられる。



第74図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第74図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M10	寛永通寶	2.4	0.5	0.12	3.4	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	P1覆土中	PL14

第2号掘立柱建物跡（第75図）

位置 調査区南東部のN1677区、標高25.6mの台地平坦部で、第1号塚の裾部から南東側に6.5m離れて位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡のP3と重複しているが、柱穴との切り合いがないため新旧は不明である。

規模と構造 東部が調査区外に延びているため全体の規模は不明であるが、桁行2間、梁行2間の側柱建物と推測できる。南面を桁行とみると、桁行方向は $N-65^{\circ}-W$ である。規模は桁行4.6m、梁行5.4mで、面積は

24.84㎡である。柱間寸法は桁行、梁行とも2.7m（9尺）を基調としている。

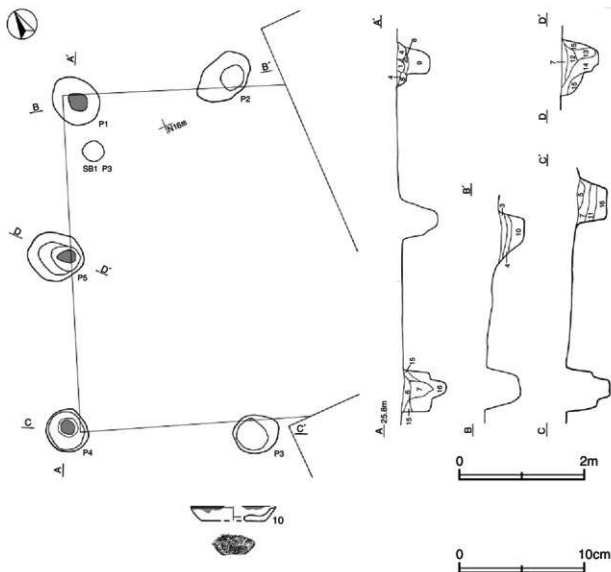
柱穴 5か所。平面形は円形または楕円形で、規模は長径70～96cm、短径60～75cmである。深さは37～68cmで、断面形はU字状または漏斗状である。柱のあたりがP1・P4・P5の底面で確認された。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 11 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | 12 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 13 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子微量 | 14 褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック少量 | 15 褐色 | ローム粒子中量 |
| 8 褐色 | ロームブロック少量 | 16 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師質土器1点（灯明皿）が出土している。10はP1の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から18世紀前半と考えられる。



第75図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
10	土師質土器	灯明皿	[6.6]	1.1	[5.0]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内面に窪み1か所 底面中央に燒成前の穿孔あり	P1覆土中	10%

表9 近世掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	掘行方向	柱間数 幅×奥行	架高(m) 幅×奥行	面積 (㎡)	掘行柱間 (m)	架行柱間 (m)	柱穴 (cm)				主な出土遺物	備考 重複関係(古・新)	
								構造	柱穴数	平面形	深さ			
1	N16e7	N-67-E	1×1	1.8×1.8	3.24	1.8	1.8	圓柱	4	円形	21-46	陶器 古銭	SK6-木葬 目不明	SB2と新 田不明
2	N16f7	N-65-W	2×2	4.6×5.4	24.84	2.7	2.7	圓柱	5	円形 円形	37-68	土師質土器		SB1と新田不明

(3) 墓坑

第1号墓坑 (第76図)

位置 調査区北部のN16d5区, 第1号塚の頂部東寄りに位置し, 第8層上面から掘り込まれている。

規模と形状 長径1.04m, 短径0.80mの楕円形で, 長径方向はN-81°-Eである。深さは12cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含み, 不均質な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック微量

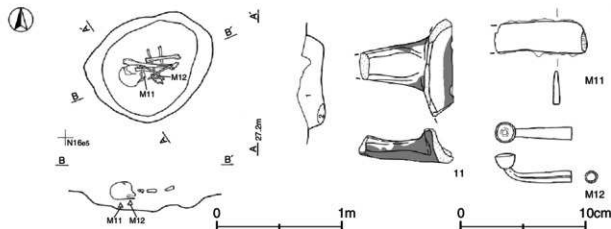
埋葬の状況 骨や歯はまとめられた状態で出土しており, 出土状況から再埋葬されたものとみられる。

遺物出土状況 土師質土器1点(十能), 金属製品2点(煙管, 火打金), 礫2点が出土している。M11・M12は中央部西寄りの頭蓋骨の下から出土している。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 はほぼ全身の骨格が確認された。頭蓋骨は額が狭く, 頭頂骨にかけての傾斜がなだらかである。後頭骨の隆起がやや強い。歯は奥歯が摩滅しており, また, 椎間板ヘルニアがみられることから, 熟年から老年に近い。

所見 聞き取り調査から, 第1号塚の頂部は戦後, 地域の青年団によって掘り返されていることが判明した。その際に出土した人骨や副葬品が集められて, 再埋葬されたものとみられる。本来の埋葬時期は, 出土土器から18世紀代と考えられる。



第76図 第1号墓坑・出土遺物実測図

第1号墓坑出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師質土器	十能	(7.3)	(7.2)	2.2	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	柄部の破片 柄部中実	覆土中	20% PL13

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	火打金	(7.2)	2.6	0.5	(27.1)	鉄	扇形 断面三角形	覆土中	PL14
番号	器種	長さ	大口径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	燗管	6.0	1.6	0.9	7.2	銅	雁首のみ 銅板丸め後編付け	覆土中	PL14

第2号墓坑 (SK14) (第77図)

位置 調査区北部のN16d4区, 第1号塚の頂部東寄りに位置し, 第2層上面から掘り込まれている。

規模と形状 長径1.05m, 短径0.82mの楕円形で, 長径方向はN-55°-Eである。深さは30cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含み, ブロック状の堆積状況から埋められている。

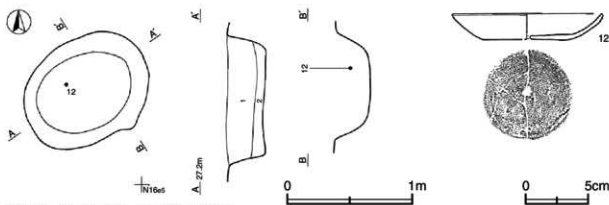
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 中央部北西寄りの覆土中層から土師質土器1点(小皿)が出土している。

所見 覆土が埋められていることや第1号墓坑と同レベルで隣接していることから墓坑とみられる。時期は, 出土土器から18世紀代と考えられる。



第77図 第2号墓坑・出土遺物実測図

第2号墓坑出土遺物観察表(第77図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師質土器	皿	11.8	2.1	7.0	辰石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り痕を残す 尖に微塵量の空孔あり	覆土中層	75% PL13

第3号墓坑 (SK17) (第78図)

位置 調査区南部のN16h5区, 標高25.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.01m, 短径0.78mの楕円形で, 長径方向はN-72°-Eである。深さは57cmで, 底面は平坦である。壁は内傾している。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含み, ブロック状の堆積状況から埋められている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

4 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子微量

2 褐色 ロームブロック多量

5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

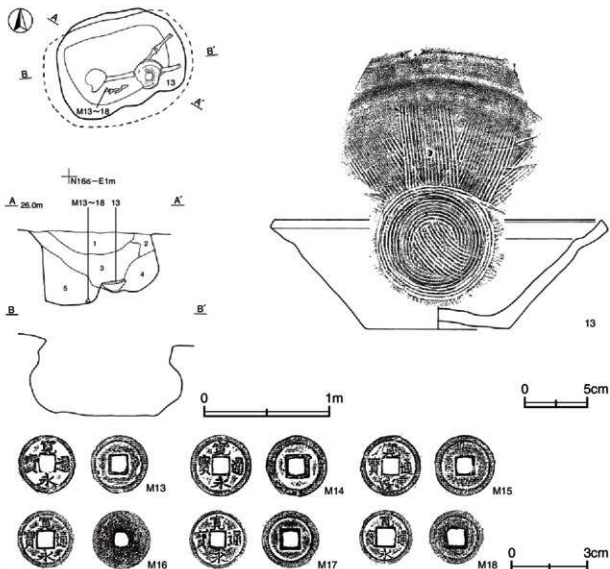
埋葬の状況 西頭位仰向屈葬で埋葬されている。

遺物出土状況 陶器1点(播鉢), 古銭6(寛永通寶)が出土している。13は腰骨上に正位で出土している。M13～M18は西部の底面で右上腕骨の下から出土している。

性別と年齢 男性 壮年

遺骸の特徴 頭蓋骨と体幹骨, 右上腕骨と骨盤の一部, 左右大腿骨が確認できた。骨の腐朽が進んでおり, 頭蓋骨前面, 骨盤, 大腿骨の3分の1は欠損している。骨の一部に火熱痕がみられる。後頭骨の隆起が強く, 上腕骨, 大腿骨が太い。大腿骨の後稜が隆起していることから, 足をよく使う労働をしていたと考えられる。

所見 出土状況から播鉢と古銭は副葬品と考えられる。播鉢は, 頭に被せられた状態で埋葬されたものが, 骨の腐朽に伴って, 滑り落ちたものと想定される。時期は, 出土土器から18世紀代と考えられる。



第78図 第3号墓坑・出土遺物実測図

第3号墓坑出土遺物観察表 (第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
13	陶器	播鉢	26.6	8.7	11.4	長石・石英・鉄釉	暗褐色	普通	16条1單位の羅目 見込羅目 黒豆黄通寶	中央部骨上	80% PL13

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M13	寛永通寶	2.3	0.5	0.11	3.7	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	西部底面	PL14
M14	寛永通寶	2.4	0.6	0.11	3.2	1636	銅	古寛永 無背 銅1文銭	西部底面	PL14
M15	寛永通寶	2.4	0.6	0.11	2.9	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	西部底面	PL14
M16	寛永通寶	2.3	0.6	0.12	3.4	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	西部底面	PL14
M17	寛永通寶	2.3	0.6	0.11	2.9	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	西部底面	PL14
M18	寛永通寶	2.1	0.6	0.09	1.6	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	西部底面	PL14

表10 近世墓坑一覽表

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	N1645	楕円形	N-81°-E	1.04×0.80	12	外傾	平坦	人為	人骨 土師質土器(10点) 金属製品 (鍔首, 火打金)	第1号塚→本跡
2	N1644	楕円形	N-55°-E	1.05×0.82	30	外傾	平坦	人為	土師質土器	第1号塚→本跡
3	N1645	楕円形	N-72°-E	1.01×0.78	57	内傾	平坦	人為	人骨 陶器(鍔跡) 古銭	

(4) 土坑

第6号土坑 (第79図)

位置 調査区中央部のN16e7区, 標高25.6mに位置し, 第8層上面から掘り込まれている。

重複関係 第1号掘立柱建物跡のP3に掘り込まれている。

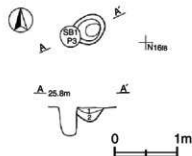
規模と形状 径0.48mの円形である。深さは23cmで, 底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含み, 不均質な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック少量

所見 時期は, 重複関係から18世紀代と考えられる。



第79図 第6号土坑実測図

第7号土坑 (第80図)

位置 調査区中央部のN16e6区, 標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12号土坑の西部を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.70m, 短軸2.30mの長方形で, 長軸方向はN-21°-Wである。深さは39cmで, 底面は皿状である。炭化材が北東部の底面から出土しているが, 底面は焼けた痕跡がないことから埋設時に廃棄されたものと考えられる。壁は外傾して立ち上がっている。

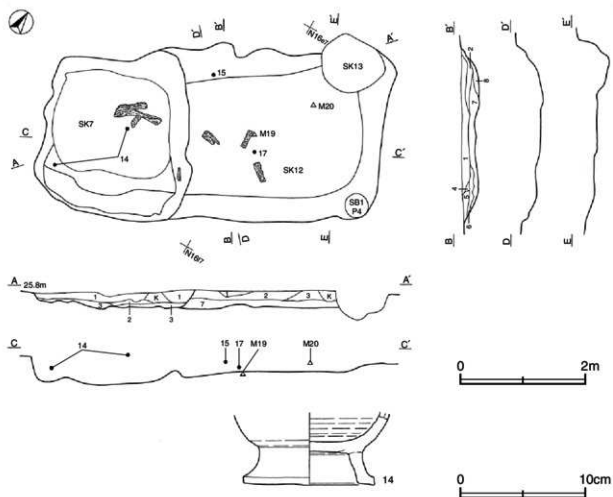
覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含み, 不均質な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器1点(皿), 陶器片3点(碗2, 花瓶1)が出土している。14は中央部の覆土上層と南西コーナー部の壁際から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から18世紀前半と考えられる。



第80図 第7・12号土坑・第7号土坑出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施軸	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
14	陶器	花瓶	—	(5.8)	10.4	長石・細砂・鉄軸	灰褐	良好	尊式花瓶 高台貼り付け	覆土上層	20% PL14

第12号土坑（第80・81図）

位置 調査区中央部のN16e7区、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号土坑に西部、第13号土坑に北東部、第1号掘立柱建物跡のP-4に南東部を掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長軸3.15m、短軸2.82mの長方形で、長軸方向はN-64°-Eである。深さは42cmで、底面は皿状である。炭化材が西部の底面から出土しているが、底面は焼けた痕跡がないことから埋没時に廃棄されたものと考えられる。壁は外傾して立ち上がっている。

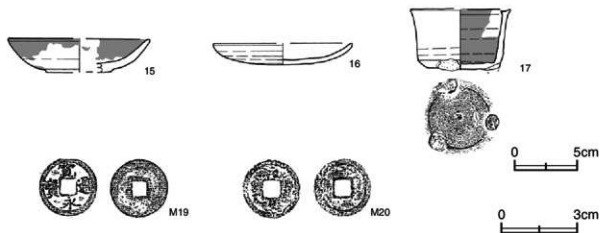
覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含み、不均質な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 7 褐色 ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量 |

遺物出土状況 土師質土器6点(小皿), 陶器片8点(碗6, 皿1, 香炉1), 磁器片1点(碗), 瓦質土器片1点(火鉢カ), 古銭2点(寛永通寶)が出土している。その他, 混入した縄文土器片5点も出土している。M19は中央部の底面, 15は北西壁際, M20は東壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。17は中央部の覆土下層と第5号石塔跡から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から18世紀前半と考えられる。



第81図 第12号土坑出土遺物実測図

第12号土坑出土遺物観察表(第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴ほか	出土位置	備考
15	土師質土器	灯明座	[11.2]	2.7	[5.0]	長石・石英・雲母	にぶい碧	普通	ロケロ成形 底部周縁糸切り痕と 縦状凹線	覆土中層	75%
16	陶器	小皿	[11.0]	1.7	—	細砂・錆粒	褐	良好	体部下部露胎 内外底面に重ね 糸肌	覆土中	75%
17	陶器	香炉	[8.0]	(4.8)	5.0	長石・石英・雲母・ 炭粒	オリーブ 灰	一次焼成	口縁部内外面につまみ出し 底部 外縁部付外装	覆土下層	75% PL13

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M19	寛永通寶	2.3	0.5	0.11	2.9	1668	鉄	新寛永 無背 銅1文銭	底面	PL14
M20	寛永通寶	2.3	0.6	0.09	1.9	1668	銅	新寛永 無背 銅1文銭	覆土中層	PL14

表11 近世土坑一覧表

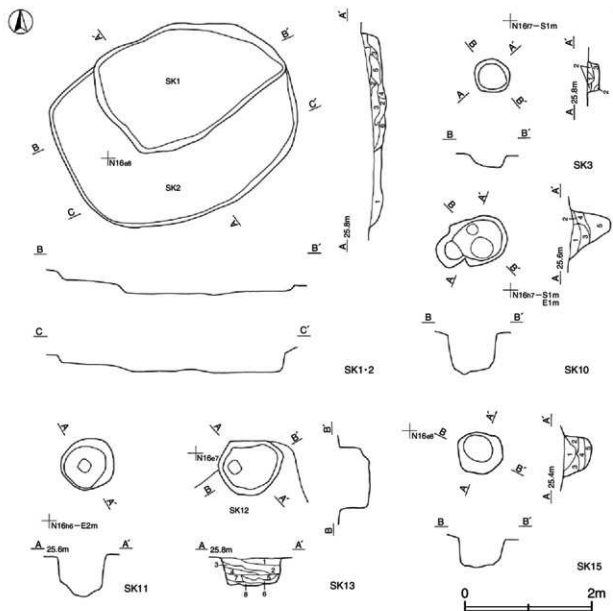
番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
6	N16e7	円形	—	0.48×0.47	23	外傾	崖状	人為	—	本跡→SB1
7	N16e6	長方形	N-21'-W	2.70×2.30	39	外傾	崖状	人為	土師質土器 陶器	SK12→本跡
12	N16e7	長方形	N-64'-E	[3.15]×2.82	42	外傾	崖状	人為	土師質土器 陶器 古銭	本跡→SB1・SK7・SK13

2 その他の遺構と遺物

時期や性格の明確でない遺構として, 土坑7基が存在する。以下それらの遺構については, 実測図と一覧表を掲載する。

(1) 土坑(第82図)

時期及び性格が明確でない土坑7基については, 実測図と一覧表を掲載する。



第82図 土坑実測図

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 灰褐色 砂質粘土粒子中量, ローム粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック少量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック少量
- 2 黒色 炭化粒子中量, ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量

- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 灰褐色 砂質粘土粒子中量, ロームブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 炭化物中量, ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック微量
- 8 灰褐色 砂質粘土粒子中量, ローム粒子少量

第15号土坑土層解説

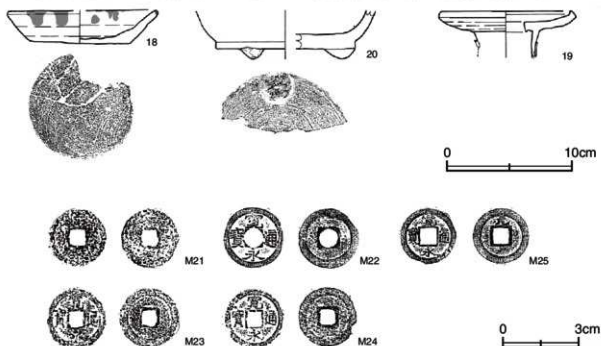
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

表12 土坑一覽表

番号	位置	平面形	長径方向	規模 (m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	N16d 8	不整形	N-56°-E	2.70×1.80	8~16	外傾	平坦	人為	陶器	SK2→本跡
2	N16d 8	精円形	N-56°-E	3.80×2.75	12~26	直立	平坦	人為	陶器 磁器	本跡→SK1
3	N16f 6	円形	-	0.55×0.53	15~20	直立	平坦	人為	-	-
10	N16g 7	不整形円形	N-61°-E	1.15×0.75	81	直立	壙状	人為	-	-
11	N16g 6	円形	-	0.85×0.85	75	直立	壙状	人為	-	-
13	N16e 7	円形	-	1.00×0.95	43	直立	壙状	人為	-	SK12→本跡
15	N16g 8	円形	-	0.75×0.74	46	直立 表立 外傾	壙状	人為	-	-

(2) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図(第83図)と観察表を掲載する。

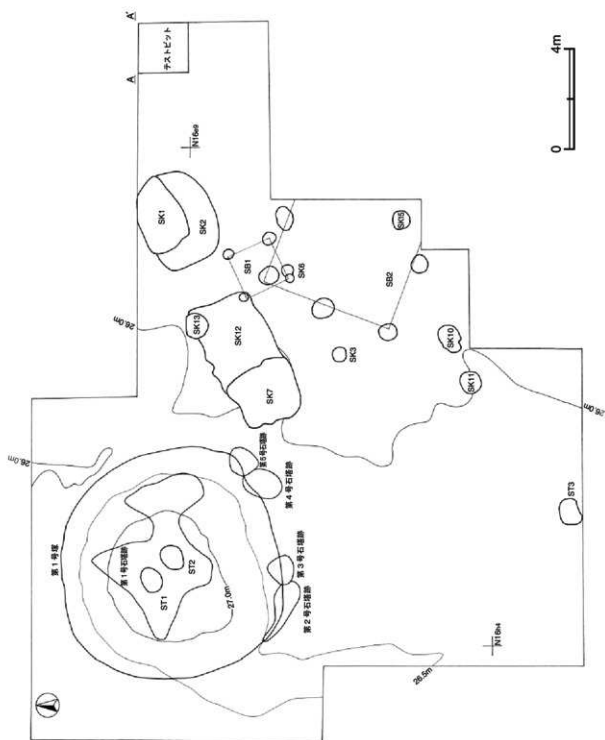


第83図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴ほか	出土位置	備考
18	土師質土器	皿	[11.7]	2.7	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	良好	底部回転糸切り痕 内面強いナゲ口縁部に鋭み1ヶ所	表採	60% PL13
19	陶器	仏花瓶	10.4	(3.7)	-	細砂・灰釉	にぶい黄赤	良好	瀬戸式瀬水 唇口部 肩部に耳取留付	表採	15% PL14
20	陶器	香炉	-	(3.8)	[11.0]	細砂・鉄釉	浅黄	普通	瀬戸式瀬水 底部外周に粘土塊貼付3ヶ所(残存)	表採	5%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	初鋳年	材質	特	徴	出土位置	備考
M21	寛永通寶	2.3	0.6	0.11	1.9	1741	銅	新寛永 背元 高津鼓 劃1文銭	表採		
M22	寛永通寶	2.4	0.7	0.10	2.5	1636	銅	古寛永 無背 劃1文銭	表採	PL14	
M23	寛永通寶	2.4	0.5	0.11	2.3	1668	銅	新寛永 無背 劃1文銭	表採	PL14	
M24	寛永通寶	2.3	0.6	0.11	2.5	1668	銅	新寛永 無背 劃1文銭	表採	PL14	
M25	寛永通寶	2.2	0.7	0.09	1.6	1668	銅	新寛永 無背 劃1文銭	表採	PL14	



第84図 石川塚遺構全体図

第4節 ま と め

今回の調査の結果、近世の塚1基、掘立柱建物跡2棟、墓坑3基、土坑3基、時期不明の土坑7基が確認された。また、調査前には塚の頂部と南裾部に、紀年銘から17世紀末から18世紀後葉にかけて建立された石塔が造立されていた。

『小川町史』及び「ひたち小川の文化」等によると、当遺跡付近は「貝谷の大日堂」と称された真言宗に属する花館山瑞祥院昌讃寺が存在していた場所とされている。この寺の開基は権大僧都秀海上人で、本尊に大日如来を祀り名刹であった。1807（文化4）年に焼失し、以後再建されたが現在は廃寺となり、本尊の大日如来像は現在、貝谷共同墓地の入口にある貝谷寮と呼ばれる屋内に安置されている¹¹。また、地域には秀海上人の偉業を称える伝承¹²があり、その中ではこの地に灰塚が築かれたとされている。

ここでは、確認された遺構と遺物、造立されていた石塔の性格について述べ、まとめとしたい。

1 確認された遺構と遺物について

調査区の北部に、塚1基が盛土によって構築されていた。基部は地山面であり、旧表土を掘り込んで整地した後に土を積み上げている。塚頂部及び裾部には多数の墓石や台座が砕かれた礫片が散在しており、また、塚頂部の封土である第1～3層はローム土を少量含む暗褐色土であり、下層の土とは含有物や土色が若干異なっている。出土遺物は、塚頂部及び裾部の調査前に石塔が造立されていた付近に集中してみられる。陶磁器が主体で、器種は碗・皿の他、仏飯器や仏花瓶、香炉が確認されている。時期は18世紀代のものが主体で、近代のものも若干混入している。また、塚頂部の東寄りで封土の第8層上面から掘り込まれた第1号墓坑が確認されており、人骨が出土している。人骨の出土状況を見ると、頭骨と頸骨が離れて検出され、また、上腕骨が頭骨より上層で確認されていることから、一度埋葬した後掘り返し集骨し、再埋葬したものとみられる。

封土の盛土状況と礫片の検出状況及び人骨の出土状況から、塚頂部は構築後に掘り返されており再度盛土されたものとみられる。あるいは、本来の塚は、墓坑の検出されたレベルを頂部とし、墓坑を構築した後に現況の高さまで盛土された可能性も考えられる。いずれにしても、発掘調査の結果からは、塚頂部の封土は動かされているものと判断される。また、聞き取り調査によると、当遺跡の調査区域外には、東部の参道沿いに塚群が、西部に昭和初期に再建された御堂があったという話が得られた。昭和19年頃から米軍艦載機の空襲に備えて防空壕や掩体壕等の施設を構築する際に、塚群や御堂は解体され、建立されていた石塔が本跡周辺に集められたようである。また、塚頂部は戦後になって地域の青年団によって掘り返されているという情報も得た。

調査区の南東部には掘立柱建物跡2棟、南部には人骨と副葬品とみられる鐙鉢や六道銭が出土した第3号墓坑が検出されている。また、第2号掘立柱建物跡の柱穴から出土した灯明皿は18世紀代のものであり、塚の出土遺物とほぼ同時期のものであることから、塚との関連性が想定できる。当遺跡周辺が、花館山瑞祥院昌讃寺の寺領内と想定すれば、検出された遺構は寺社に関連する堂跡や墓坑とみることもできる。

2 造立されていた石塔について

塚頂部に造立されていた石塔は2基で、元禄元（1688）年建立の戒名「権大僧都秀海上人」と刻まれた墓石、元禄7（1694）年建立の「奉讀誦普門品七千貳百卷成就所 秀海上人 重海」と刻まれた讀誦塔である。

両石塔に刻まれた僧名「秀海上人」は前述の人物であり、讀誦塔の銘文からは、秀海上人が普門品（法華經の中の觀世音菩薩普門品第二十五）を7200回唱えたことを顕彰したものとみられる。普門品は觀世音菩薩が衆生の諸難・苦惱を救済することを説く諸宗の説誦經典であることから、「日照りて苦悩する庶民を救済するために」秀海上人が普門品を7200回唱えたという伝承が事実であったことを物語っている。

塚部南西側には3基の石塔が造立されていた。石塔3は宝永5（1738）年建立の「法師源信靈位」と刻まれた僧侶の墓石である。石塔4は享保16（1731）年建立で、如意輪觀音像があることから十九夜供養塔と考えられる。石塔5は宝永5（1708）年建立の「道保押定信士」と戒名が刻まれた一般庶民の墓石である。

塚部南東側にも3基の石塔が造立されていた。石塔6は元禄13（1700）年建立の庚申塔で、石塔7は同年建立の廿三夜供養塔、石塔8は安永4（1775）年建立の「淨圓法師」と刻まれた僧侶の墓石である。

紀年銘からは、江戸時代元禄期のものが4基あり、他は宝永、享保、元文、安永と17世紀末から18世紀後葉にかけて建立されたものである。また、銘文から読み取れる石塔の性格は、僧侶の墓石が3基、一般庶民の墓石が1基、讀誦塔・庚申塔・十九夜供養塔・廿三夜供養塔が各1基である。

これら石塔は、時期や性格に違いがみられることから、前述の聞き取り調査の成果と合わせ、戦中・戦後の開発や開拓によって、周辺にあった石塔が移設されたものとみられる。しかし、塚頂部にあった「秀海上人」銘のある2基の石塔については、発掘調査の結果から、移設された痕跡はあるが塚に伝承にある「灰塚」であると想定すれば、塚に伴う石塔の可能性も否定はできない。

確認された石塔の銘文一覧表

番号	種別	形態	像容	銘文	紀年銘	出土位置
石塔1	墓石	舟型	地藏菩薩	正面「梵字」正面右「權大僧都秀海上人」 正面左「元禄元戌辰年十月四日」	1688	塚頂部
石塔2	讀誦塔	舟型	大日如来	正面右「奉讀誦普門品七千卷百卷成教所」 正面左「元禄七甲戌天八月十八日秀海上人 兼海」	1694	塚頂部
石塔6	庚申塔	櫛型	—	正面「奉移庚申二世安穩地」 正面右「元禄十三谷村宮久保村」 正面左「辰七日晦日懸旦那」 正画下部に三體を彫刻	1700	塚部南東側
石塔7	二十三夜塔	胸型	—	正面「梵字 奉移廿三夜月待供養成并移」 正面右「干時元禄十三年貝谷村」 正面左「庚辰九月廿三日」	1700	塚部南東側
石塔5	墓石	胸型	—	正面「梵字 道保押定信士（靈）」 正面右「宝永五年」 正面左「子 九月廿二日」	1708	塚部南西側
石塔4	石仏	舟型	如意輪觀音菩薩	正面右「享保十六辛寅天」 正面左「十一月吉日」	1731	塚部南西側
石塔3	墓石	舟型	地藏菩薩	正面右「法師源信靈位」 正面左「元文三年二月廿四日」	1738	塚部南西側
石塔8	墓石	舟型	地藏菩薩	正面「梵字」 正面右「淨圓法師」 正面左「安永四乙未四月三日」	1775	塚部南東側

3 むすび

今回の調査によって、石川塚は17世紀末から18世紀にかけて所在したとされる花館山瑞祥院昌讚寺跡に関連する遺構である可能性が見出された。当遺跡の伝承や聞き取り調査をもとにした想定については、推測の域を超えないが、本跡は地域に伝わる伝承や出土遺物から、長期間にわたって人々の信仰の対象であったことがうかがわれる。

註

- 1) 檜山寿夫「貝谷大日堂の今昔」『ひたち小川の文化』第20号 小川町郷土文化研究会 2000年4月
- 2) 宮塚正一「塚談義」『ひたち小川の文化』第7号 小川町郷土文化研究会 1987年4月

参考文献

- ・小川町史編さん委員会「小川町史 上巻」小川町 1982年3月
- ・小川町史編さん委員会「小川町史 下巻」小川町 1988年3月
- ・玉里村石仏・石神調査団 玉里村立史料館「玉里村の石仏たち 玉里村石仏・石神調査報告書」玉里村教育委員会 2000年3月
- ・茨城町史編さん委員会「茨城町の石仏・石塔」茨城町教育委員会 2000年3月

第5章 旧百里原海軍飛行場掩体壕群

第1節 調査の概要

旧百里原海軍飛行場掩体壕群は、小美玉市の東部に位置し、巴川右岸の標高30mの台地上に立地している。航空自衛隊百里基地の西側に位置していたとされる旧百里原海軍飛行場の周辺には、半径1.5～2.1kmの範囲に17基の掩体壕が確認されており（平成17年8月の小美玉市教育委員会調査による）、最盛期には約80基の掩体壕があったとされている。今回報告するのは、平成17年度に調査を行った第1・2号掩体壕、平成18年度に調査を行った第3～7号掩体壕の7基についてである。調査面積は平成17年度が4,681㎡、平成18年度が9,120㎡であり、各掩体壕の調査面積は右表のとおりである。調査前の現況は山林・篠藪である。

平成17年度の調査では、掩体壕2基の測量調査のほか掩体部及び外壕部のトレンチ調査を行っている。また、平成18年度調査では、掩体壕7基のトレンチ試掘及び測量調査を実施している。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に3箱が出土している。主な遺物は、金属製品（機銃弾・飛行機関連部品）、ガラス製品（電球・ビール瓶）、縄文土器（深鉢）、石器（磨製石斧）などである。

調査年度	遺跡名	調査面積(㎡)
平成17年度	第1号掩体壕	1,881
	第2号掩体壕	2,800
平成18年度	第3号掩体壕	1,979
	第4号掩体壕	1,372
	第5号掩体壕	2,447
	第6号掩体壕	946
	第7号掩体壕	2,376

第2節 基本層序

N 8a7区にテストピットを設定し、深さ2mまで掘り下げて基本土層（第85図）の観察を行った。土層は8層に分層でき、観察結果は以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土で、粘性・締まりとも普通である。層厚は30～45cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は15～30cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性は強く、締まりは普通である。層厚は28～32cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層への漸移層で、粘性・締まりとも強い。層厚は25～35cmである。

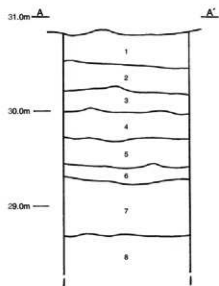
第5層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりとも強い。層厚は26～30cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層で、鹿沼バミスを中量含み、粘性・締まりとも強い。層厚は15～22cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりとも強い。層厚は55～65cmである。

第8層は、浅黄橙色を呈する常総粘土層で、粘性・締まりとも強い。下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は第2層上面で確認されている。



第85図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

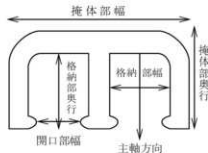
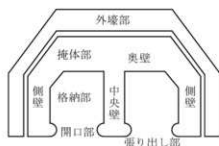
1 近代の遺構と遺物

旧百里原海軍飛行場は、昭和13年に筑波海軍航空隊百里原分遣隊が開隊したことに始まる。昭和14年には百里原海軍航空隊として独立し、飛行機の操縦訓練が行われた。基地機能が増強されるのは、艦上爆撃機・艦上攻撃機を増やし、実用機の操縦及び偵察教育を兼任するようになった昭和18年以後のことである。その基地施設の多くは、現在の航空自衛隊百里基地の西側に存在していたとされ、正門跡、百里神社、機銃試射場跡などが現存している。また、滑走路は基地施設の東側に菱形に展開していたようで、その滑走路の外側に誘導路を介して72基の掩体壕が存在していたとされる。

掩体壕とは、主に陸軍・海軍航空基地内やその近辺に作られた飛行機を隠蔽するための格納庫である。その機能から、構築時期は空襲が激しくなる太平洋戦争末期の頃と考えられている。掩体壕には、コンクリートもしくは木材でドーム状や切り妻状の蓋を構築した有蓋掩体壕と、格納部の側面と奥面に土塁状の壁を土盛りして構築し、天井部を造らない無蓋掩体壕の2種類があるが、当遺跡の掩体壕はすべて無蓋掩体壕である。以下、検出された遺構と遺物について記載する。

(1) 掩体壕の記載方法

掩体壕実測図の縮尺は、掩体壕測量図と断面図は200分の1、土層断面図は100分の1で掲載した。掩体壕各部の名称については、特に正式な記録はなく、詳細については不明であるため、本報告では次のように呼称する。飛行機を格納する部分を格納部、その周囲に築かれた土塁状の部分を掩体部、飛行機を出し入れする部分を開口部とする。開口部を閉塞するように側壁と中央壁から延びた部分がみられる掩体壕もあり、これを張り出し部とする。また、掩体部外面にみられる溝状の部分は、掩体部を構築する際に土取りをしたと考えられる部分であり、外壕部と呼称する。また、掩体壕の各部の計測値については、掩体部の幅と奥行は外法の最大値を、格納部の幅と奥行は内法底面の最大値を計測した。掩体部の「主軸」は奥壁から開口部への軸線とし、主軸方向は、座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例N-10°-E)。なお、掩体壕に付属すると考えられる土坑等の遺構が構築されている場合には、掩体壕の解説の中で項目を設けて紹介する。



(2) 掩体壕

当遺跡の掩体壕はすべて無蓋掩体壕であり、飛行機を隠蔽する目的の他、至近弾からの機体の損傷や被弾した機体からの類焼を避ける程度のものではなかったかと考えられる。1947年に米軍が撮影した当遺跡周辺の航空写真から、掩体壕には平面形状がC字形、E字形の2種類あったことが分かる。C字形は1機、

E字形は中央部に仕切り状の壁があることから2機の飛行機を格納したものと考えられる。以下、個々の掩体壕について記述する。

第1号掩体壕（第86・87図）

位置 調査区M7d8～M9i1区、標高30mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 最大幅51.1m、奥行26.1mで、平面形はE字形を呈する。主軸方向はN-0°で、東西方向に構築されている。

掩体部 奥壁は上幅0.3～1.4m、下幅6.7～8.9mで、現地表面から頂部までの高さは3.3mである。側壁は上幅0.6～1.2m、下幅7.2～8.8mで、現地表面から頂部までの高さは3.2mである。中央壁は上幅0.7～1.2m、下幅7.0～7.4mで、現地表面から頂部までの高さは3.3mである。格納部を囲んで盛土によって構築されており、断面形は台形状である。

掩体の構築状況 奥壁、東西側壁、中央壁からなり、土層は34層に分層できる。中央壁と東側壁は旧表土を掘り込んだ地山面を基底部とし、ローム土を主体とした褐色土・明褐色土・暗褐色土を概ね水平に積み上げて構築している。上層の第1～10層はやや締まりのない層であるが、中層から下層の第11～34層は強く締まりがあることから、積み上げた土を平坦に均し、突き固めて構築したものと考えられる。また、奥壁H土層断面と西側壁の土層断面から、奥壁H土層断面では内側、西側壁では外側に、高さ1mほどの小規模な土留めのための土堤を築いたあと、反対側から盛土を行い土堤上面まで積み上げた後、水平に盛土をしている状況がみられる。

土層解説（各トレンチ共通）	18	褐色	ローム粒子中量
1 黒褐色	19	褐色	ローム大ブロック・粒子多量、ローム中ブロック中量
2 褐色	20	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
3 暗褐色	21	褐色	ローム粒子多量
4 褐色	22	明褐色	ローム大ブロック多量、ローム中ブロック・粒子中量
5 暗褐色	23	暗褐色	ローム粒子中量、ローム大・中ブロック少量
6 褐色	24	明褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量
7 暗褐色	25	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
8 褐色	26	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
9 褐色	27	明褐色	ローム中ブロック・粒子多量、ローム大ブロック中量
10 褐色	28	褐色	ローム中ブロック・粒子多量、ローム大ブロック少量
11 明褐色	29	明褐色	ローム粒子多量、ローム大・中ブロック少量
12 極暗褐色	30	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・粘土粒子微量
13 褐色	31	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
14 褐色	32	暗褐色	ローム粒子中量（締まり強い）
15 明褐色	33	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
16 明褐色	34	褐色	ローム小ブロック中量
17 褐色			

格納部 2か所。東側格納部は幅14.2m、奥行15.0mの方形を呈し、面積213.0㎡である。開口部幅は左側壁の内面が崩落しているが14.0mほどである。開口部方向はN-0°である。西側格納部は幅14.3m、奥行15.3mの方形を呈し、面積218.8㎡である。開口部幅は14.5mで、開口部方向はN-0°である。両格納部とも、底面はほぼ平坦で、旧表土を地山面まで削った後に、黒褐色土の第1層を埋土し、平坦に突き固めて整地されている。開口部付近は特に硬化が著しい。開口部北側の調査区外に、東西方向に延びる誘導路が構築されていたことが、米軍撮影の航空写真から判明している。

外壕部 掩体部の奥壁外の等高線に、現地表面から20～90cm低く窪地状になった地形が3か所みられる。この部分の土を掘削し、掩体部に積み上げていったものと考えられる。

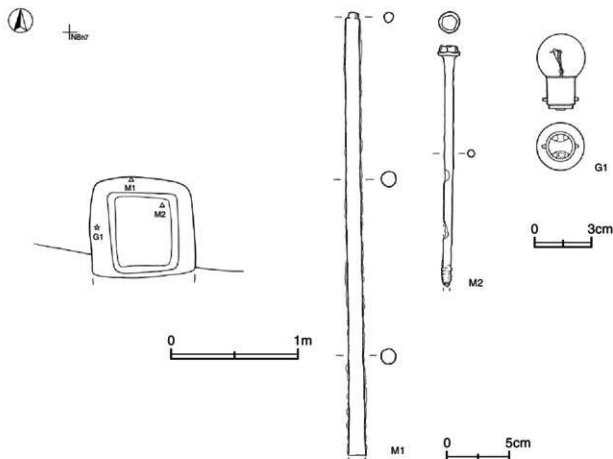
土坑 東側格納部の奥壁際に土坑1基が検出されている。規模は長軸0.84m、短軸0.80mの方形で、深さは20cmである。底面は平坦で、強く硬化していることから、重量のあるものが据えられていた可能性がある。土坑の覆土中から金属部品が出土しており、格納部にあった飛行機関連の部品類が埋められていたものと考えられる。

横穴 掩体部の東側壁外面に構築土を掘り込んだトンネル状の横穴が2か所検出された。横穴1の全長は7.81mで、平面形はL字状である。上幅0.88~1.20m、下幅0.68m、底面から天井部までの高さは140~160cmで、断面形は長方形を呈している。出入口部は、長径3.22m、短径2.67mで、平面形は楕円形を呈し、現地表面から深さ130cmまで階段状に掘り込まれている。出入口部から北西方向へ5.00mほど直線状に掘り込まれ、M8h9区で北東方向に屈曲し、2.00mほどで奥壁となっている。奥壁部には構築時の工具痕がみとめられる。

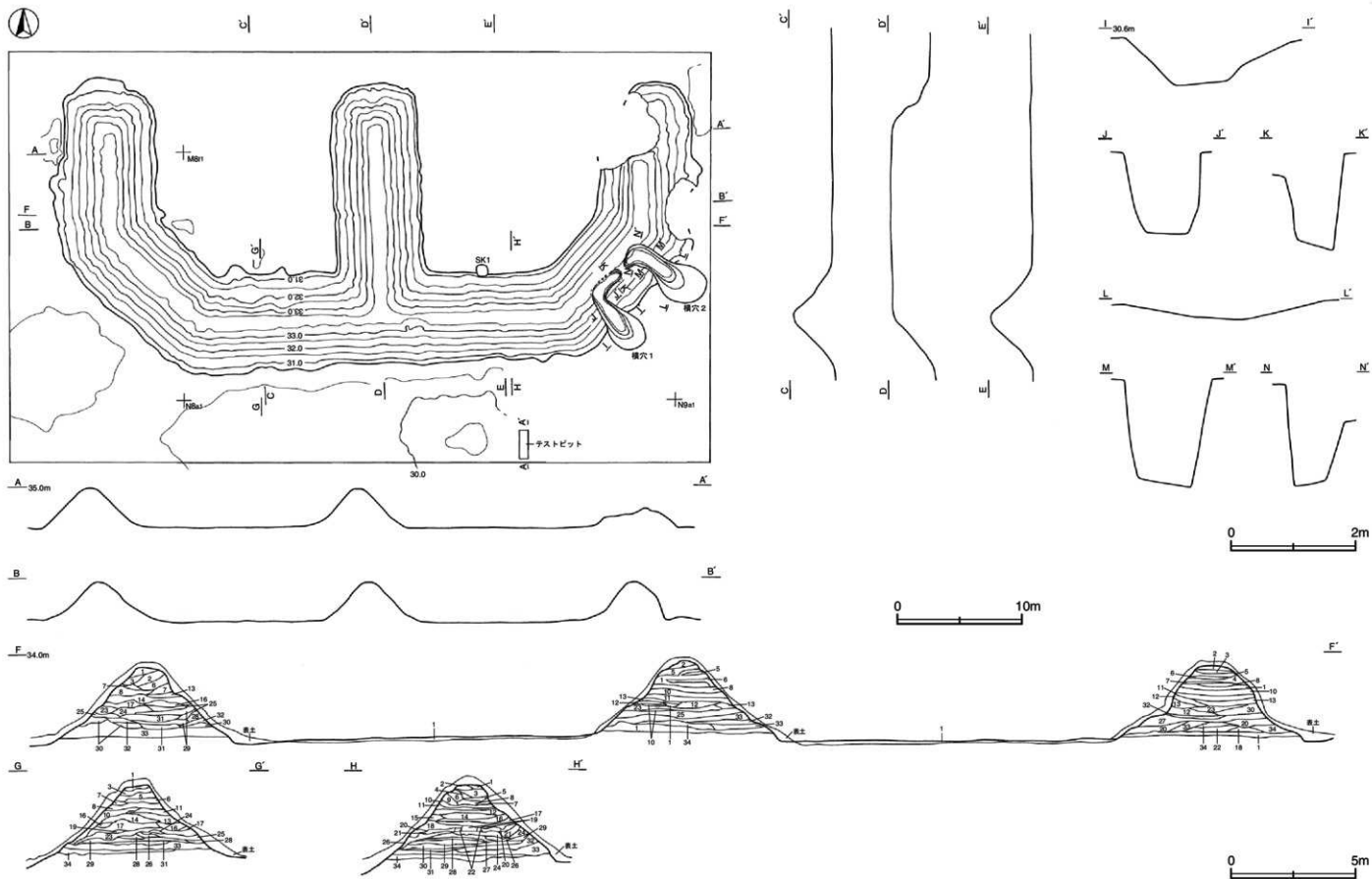
横穴2の全長は7.00mで、平面形はL字状である。上幅1.44m、下幅0.56~0.88m、底面から天井部までの高さは160cmで、断面形は長方形を呈している。出入口部は、長径4.14m、短径3.27mで平面形は楕円形を呈し、現地表面から深さ120cmまで階段状に掘り込まれている。出入口部から北西方向へ4.60m直線状に掘り込まれており、M8h0区で南西方向に屈曲し、1.00mほどで奥壁となっている。防災上の理由から完掘していない部分があるため明確ではないが、規模や形状から防空壕跡の可能性はある。

遺物出土状況 東側格納部から金属片1点、西側格納部から金属片2点、横穴1から金属片13点、土坑から金属部品25点（釘1、ボルト2、鉄製部品18点、銅線2、アルミニウム部品2点）、プラスチック部品2点、電球1点が出土している。M1・M2、G1は土坑内から出土しており、飛行機関連の部品とみられる。

所見 平面形がE字形であることから、2機の飛行機を格納したものである。構築状況から、掩体部及び格納部は、基底部を整地した後に造られているとみられる。



第86図 第1号掩体壕内第1号土坑・出土遺物実測図



第87図 第1号掩体壕，第1・2号横穴実測図

第1号掩体壕出土遺物観察表 (第86図)

番号	種別	長さ	軸径	ネジ山径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	ボルト	(35.4)	1.2	0.8	(113.0)	鉄	断面円形 先端部にネジ山	東橋納部内SK 遺土上層	PL20
M2	ボルト	(19.2)	0.6	0.6	(44.9)	鉄	頭部六角形 軸部断面円形 先端部にネジ山	東橋納部内SK 遺土上層	PL20

番号	種別	長さ	ガラス 径径	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G1	電球	4.0	2.5	1.5	4.8	ガラス・真鍮	口全部の縦断面は長方形 下端に突起2か所	東橋納部内SK 遺土上層	PL20

第2号掩体壕 (第88図)

位置 調査区R10f1～S11j6区、標高30mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 最大幅50.5m、奥行23.0mで、平面形はE字形である。主軸方向はN-35°-Eで、北西から南東方向に構築されている。

掩体部 格納部を囲んで盛土によって構築されている。奥壁は上幅0.8～1.8m、下幅7.5～8.5mで、高さは3.2mである。断面形は台形で、内・外法面は斜度40度で盛土されている。側壁は上幅1.5～2.3m、下幅7.0～9.2mで、高さは3.1mである。断面形は台形で、内・外法面は斜度35～40度で盛土されている。東・西側壁の北端は、開口部方向に屈曲しており、側壁内面から3.0mほど張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.75mまでスロープ状に構築されている。中央壁は上幅0.5～1.5m、下幅7.2～8.2mで、現地表面から頂部までの高さは2.9mである。断面形は台形で、内・外法面は斜度40度で盛土されている。中央壁の北端は、翼状に左右とも3.5mずつ張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.25mまでスロープ状に構築されている。

掩体の構築状況 奥壁、東西側壁、中央壁からなり、土層は54層に分層できる。各壁は、旧表土と考えられる黒褐色土の第29層を平坦に均して基底部とし、その上にローム土を主体とした褐色土・明褐色土・暗褐色土を概ね水平に積み上げて構築している。上層の第1～12層はやや締まりのない層であるが、中層から下層の第13～54層は締まりが強いことから、積み上げた土を突き固めて構築したものと考えられる。第55～84層は、各壁の端部にみられる張り出し部の土層であり、締まりが弱く、旧表土に近い暗褐色土、黒褐色土を主体として構築されていることから、掩体部を構築した後に、周辺の土を盛土して造ったものと考えられる。

土層解説 (各トレンチ共通)

1 褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック中量 (締まり弱い)	13 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
2 褐色	ローム中・小ブロック・粒子多量、ローム大ブロック中量	14 褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック少量、炭化粒子微量
3 明褐色	ローム大・中・小ブロック・粒子多量	15 明褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック中量 (締まり普通)
4 褐色	ローム中・小ブロック・粒子多量、ローム大ブロック中量、炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量
5 明褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック中量 (締まり弱い)	17 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量 (締まり普通)
6 褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量	18 明褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量
7 褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック中量 (締まり普通)	19 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量 (締まり弱い)
8 褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック少量 (締まり普通)	20 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
9 暗褐色	ローム小ブロック・粒子中量	21 暗褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量、ローム大ブロック微量
10 暗褐色	ローム小ブロック・粒子中量、ローム中ブロック少量	22 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量 (締まり普通)
11 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量 (締まり弱い)	23 暗褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量
12 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量 (締まり弱い)	24 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量 (締まり強い)
		25 褐色	ローム小ブロック・粒子多量、ローム大・中ブロック中量 (締まり強い)

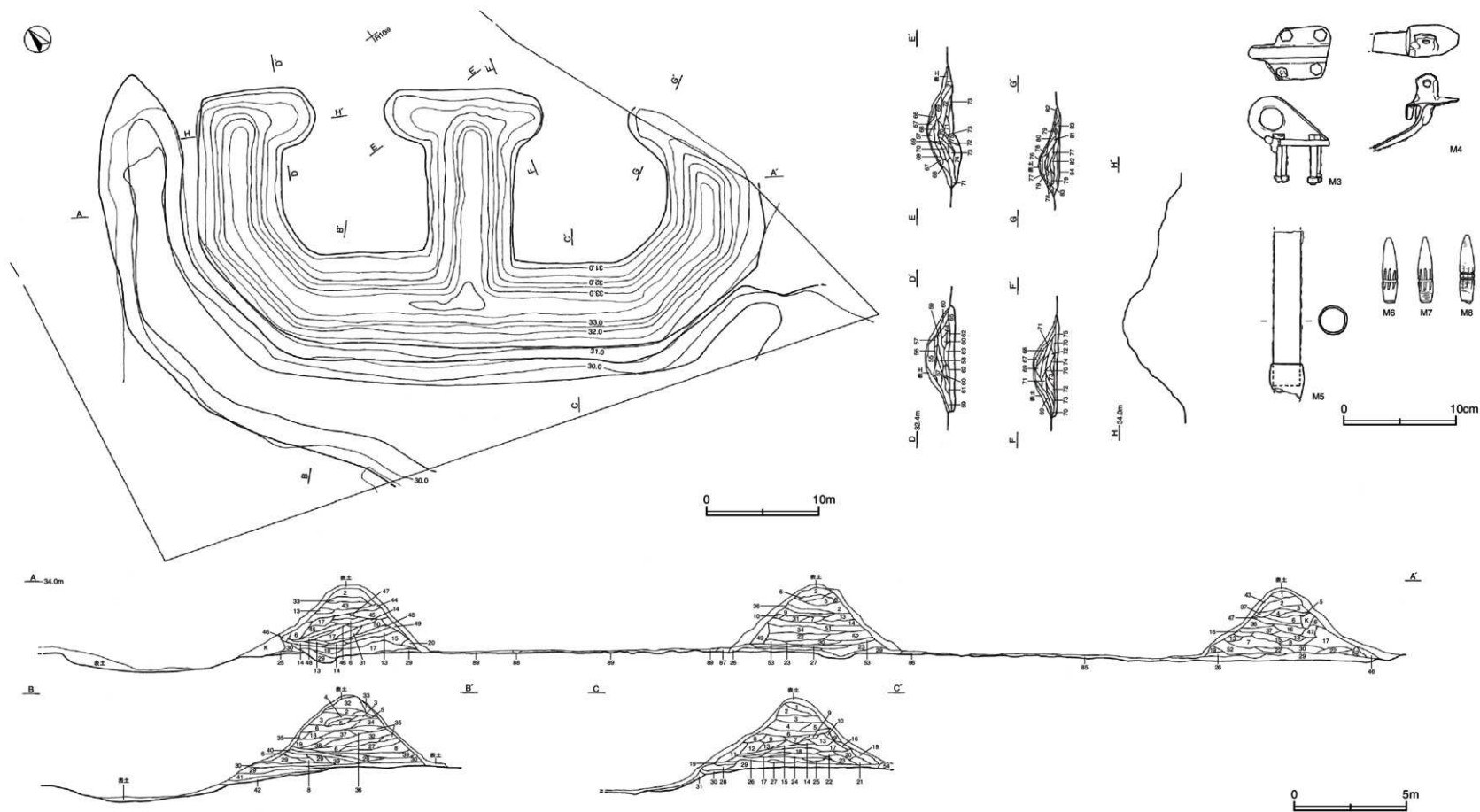
26	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量，ローム中ブロック少量	52	褐	色	ローム小ブロック・粒子少量
27	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量（締まり強い）	53	暗	褐色	ローム粒子微量（締まり強い）
28	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量（締まり弱い）	54	黒	褐色	ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
29	黒	褐色	ローム粒子少量（締まり強い）	55	黒	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
30	暗	褐色	ローム小ブロック・粒子少量（締まり強い）	56	黒	褐色	ローム小ブロック・粒子少量（締まり弱い）
31	暗	褐色	ローム小ブロック・粒子中量	57	暗	褐色	ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック微量
32	褐	色	ローム小ブロック多量，ローム中ブロック・粒子・炭沼パミス中量，ローム大ブロック少量	58	暗	褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量
33	暗	褐色	ローム小ブロック・粒子・炭沼パミス少量	59	黒	褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
34	暗	褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量（締まり普通）	60	黒	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
35	暗	褐色	ローム粒子少量	61	暗	褐色	ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
36	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量，ローム大・中ブロック少量（締まり弱い）	62	暗	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
37	褐	色	ローム中・小ブロック・粒子中量，ローム大ブロック微量	63	黒	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
38	暗	褐色	ローム中・小ブロック・粒子中量	64	黒	褐色	ローム小ブロック少量
39	褐	色	ローム小ブロック・粒子中量，ローム大・中ブロック微量	65	黒	褐色	ローム粒子少量（締まり弱い）
40	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック微量	66	暗	褐色	ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
41	褐	色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック微量	67	暗	褐色	ローム小ブロック・粒子少量
42	黒	褐色	ローム小ブロック・粒子少量（締まり強い）	68	暗	褐色	ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック微量
43	褐	色	ローム大・中・小ブロック多量，ローム粒子中量	69	黒	褐色	ローム粒子微量
44	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量，ローム大・中ブロック微量	70	暗	褐色	ローム粒子中量，ローム中・小ブロック微量
45	褐	色	ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，ローム中ブロック微量	71	暗	褐色	ローム中・小ブロック・粒子微量
46	暗	褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量，炭化粒子微量	72	黒	褐色	ローム大・中・小ブロック・粒子微量
47	褐	色	ローム小ブロック・粒子多量，ローム大ブロック微量	73	黒	褐色	ローム小ブロック微量
48	褐	色	ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック微量	74	黒	褐色	ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック微量（しまり強い）
49	黒	褐色	ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・粒子微量	75	黒	褐色	ローム中・小ブロック少量，ローム粒子微量
50	暗	褐色	ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック・粒子微量	76	暗	褐色	ローム中ブロック・粒子微量
51	暗	褐色	ローム粒子微量（締まり弱い）	77	黒	褐色	ローム小ブロック・粒子少量，ローム中ブロック微量
				78	褐	色	ローム粒子中量，ローム中・小ブロック微量
				79	黒	褐色	ローム粒子少量，ローム中ブロック微量（しまり弱い）
				80	褐	色	ローム中ブロック・粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
				81	暗	褐色	ローム粒子少量，ローム大・中・小ブロック微量
				82	黒	褐色	ローム大ブロック・粒子微量
				83	黒	褐色	ローム中・小ブロック・粒子微量
				84	黒	褐色	ローム粒子少量，ローム大・小ブロック微量

格納部 2か所。東側格納部は幅14.0m，奥行15.5mの方形で，面積217.0㎡である。開口部は，東側壁と中央壁の端部から開口部を閉じるように内側に向かう張り出し部によって狭められている。そのため，開口部幅は7.5mと格納部幅の約半分になっている。主軸方向はN-35°-Eで，北東方向に向いて開口している。西側格納部は幅13.0m，奥行15.0mの方形を呈し，面積195.0㎡である。開口部は東側格納部と同様に狭められており，開口部幅は6.2mで，主軸方向はN-35°-Eである。両格納部とも，床面はほぼ平坦で，旧表土を地山面まで削った後に，黒褐色土の第85～89層を埋土して平坦に突き固めて整地されており，著しく硬化している。開口部北東側の調査区外に，北西から南東方向に誘導路が構築されていたことが，米軍撮影の航空写真から確認できる。

土層解説

85	黒	褐色	ローム小ブロック中量，炭化物・焼土粒子少量（締まり特に強い）	87	黒	褐色	ローム小ブロック・炭化粒子中量，ローム小ブロック・粒子少量
86	黒	褐色	炭化粒子中量，ローム粒子少量	88	黒	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
				89	黒	褐色	炭化粒子中量，ローム小ブロック・粒子少量

外壕部 全長83.0m，上幅0.70～1.25m，下幅0.25～0.75mで，掩体部の外周に沿って溝状に巡っている。深さは50～80cm，底面は皿状で，壁は緩やかに立ち上がっている。この部分の土を掘削し，掩体部に積み上げていったものと考えられる。



第88图 第2号掩体壕・出土遺物実測图

遺物出土状況 機銃弾3点、鉄製品15点（ボルト2、部品カ13）、アルミ製品24点（部品カ）、ガラス製品4点（電球2、不明2）、プラスチック片2点、ゴム片2点が出土している。その他、掩体部の構築土から縄文土器片6点、瓦1点も出土している。M3～M5は西側格納部の中央部底面から出土しており、飛行機関連の部品とみられる。M6～M8は、米軍の戦闘機から発射された12.7mm機銃弾である。M6・M7は中央壁北側のR10i9～R10i0区から、M8は西側格納部の南コーナー部底面から出土しており、米軍の機銃掃射を受けた際のものである。

所見 平面形がE字形であることから、2機の飛行機を格納したものである。構築状況から、掩体部及び格納部は、基底部を整地した後に造られたものとみられる。米軍機動部隊による百里原飛行場への爆撃は昭和20年2月16日が最初で、これ以降たびたび米軍の攻撃を受けるようになったことから、本跡付近が攻撃を受けた時期は、終戦直前と考えられる。

第2号掩体壕出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	長さ	幅(㎜)	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	部品	7.9	7.3	2.0	210.0	鉄	頭部に径2cmの孔有り 4脚のボルト止め アルミ片付着	西側格納部底面	PL20
M4	部品	(6.9)	3.0	0.5	(47.1)	鉄	頭部に孔有り フック状の張り出し部	西側格納部底面	PL20
M5	部品	(15.0)	2.4	2.5	(61.6)	鉄・ゴム	断面円形 中空 端部にゴムの溝り止めを嵌め込んでいる	西側格納部底面	PL20

番号	種別	全長(m)	口徑(m)	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	機銃弾	58.0	12.7	41.6	真鍮・鉛	12.7mm機銃弾 8本右旋のライフルマーク 胴中央部に1本のくぼみ 後端部のくぼみに白い粉状の物質が付着 曳光弾	R10i0	PL20
M7	機銃弾	58.0	12.7	41.3	真鍮・鉛	12.7mm機銃弾 8本右旋のライフルマーク 胴中央部に1本のくぼみ 後端部のくぼみに白い粉状の物質が付着 曳光弾	R10i9	PL20
M8	機銃弾	60.0	12.7	39.7	真鍮・鉛	12.7mm機銃弾 8本右旋のライフルマーク 胴中央部に2本のくぼみ 後端部のくぼみに白い粉状の物質が付着 曳光弾	西側格納部底面	PL20

第3号掩体壕（第89図）

位置 調査区S12h5～U14b1区、標高30mの台地平坦部に位置している。

確認状況 西半部は遺存しているが、東半部の奥壁・側壁と中央壁は削平されている。

規模と形状 遺存する掩体部の最大幅は28.2m、奥行23.0mで、平面形はE字形である。主軸方向はN-37°-Wで、東西方向に構築されている。

掩体部 奥壁は西半部だけが遺存しており、上幅0.5～1.0m、下幅7.1～8.7m、高さは3.1mである。断面形は逆U字形で、内・外法面は斜度40～50度で盛土されている。西側壁は上幅0.7～1.5m、下幅6.9～7.0mで、高さは3.3mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度40度で盛土されている。西側壁の北端は、開口部方向に屈曲しており、側壁内面から4.0mほど張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.32mまでスロープ状に構築されている。中央壁は、北端西側の張り出し部の一部が幅5.0m、高さ1.0mほど遺存しているだけである。

掩体の構築状況 確認できた奥壁と西側壁は、旧表土である黒褐色土の第3層を基底部とし、ローム土を主体とした褐色土・暗褐色土を積み上げて構築している。掩体部の外面には幅2.0～2.5mの犬走り状のテラス面がみられ、調査開始時には掩体部の土留めのための有段構築が想定された。トレンチ調査の結果、テラス面の土は表土であり、その直下には旧表土が確認されたことから、意識的な有段構築ではなく、外壕部から若干の間隔を空けて掩体部を構築した痕跡であり、構築時の土取り作業や構築土の運搬作業の足場として使用された部分と考えられる。

土層解説 (A-A', D-D' 共通)

- | | | | |
|-------|--|-------|-----------------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量 (締まり強い) | 4 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子中量 (外壕部覆土) |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, ブロック大ブロック微量 (締まり強い) | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子中量, ローム中ブロック少量 (外壕部覆土) |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 (締まり普通) 旧表土 | | |

格納部 2か所。西側格納部は幅11.4m, 奥行15.0mの方形で, 面積171.0m²である。開口部は, 西側壁と中央壁の端部から開口部を閉じるように内側に向かう張り出し部によって狭められている。そのため, 開口部幅は5.5mと格納部幅の約半分になっている。主軸方向はN-37°-Wで, 北西方向に向いて開口している。格納部の底面はほぼ平坦で, 旧表土である黒褐色土の第6層を基底部とし, 第1~5層を充填して突き固められている。特に西側格納部の開口部付近は強く硬化しており, 飛行機の搬出入のために強く填圧したものと想定される。第7層は東側壁の構築土, 第8~10層は中央壁の構築土がそれぞれ遺存したものである。第11・12層は外壕部に崩落した東側壁の構築土である。調査区域外に, 開口部から続いて北西方向に延びる誘導路が構築されていたことが, 米軍撮影の航空写真から確認できる。

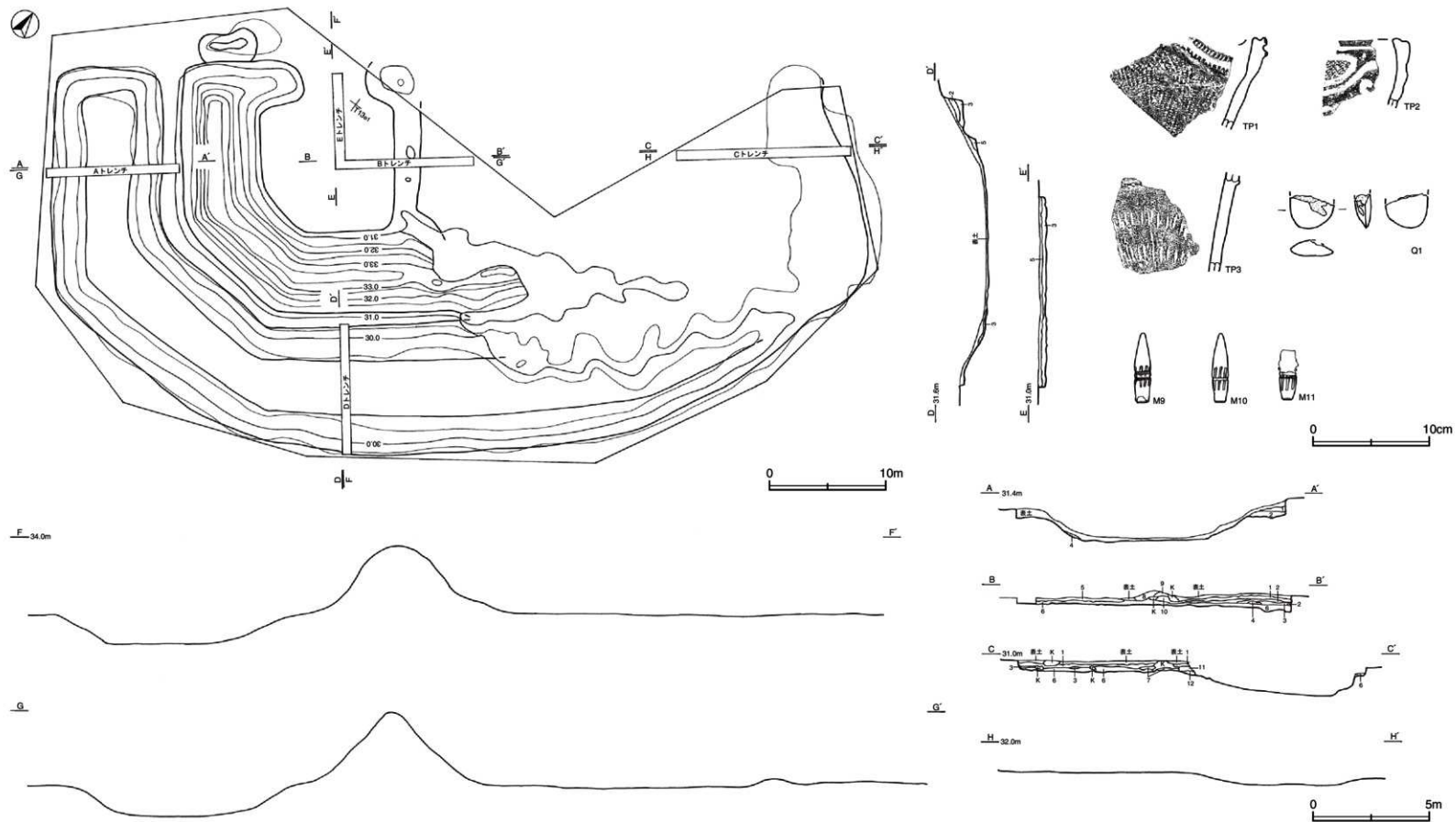
土層解説 (B-B', C-C', E-E' 共通)

- | | | | |
|-------|---|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, ローム大ブロック微量 (締まり強い) | 7 褐色 | ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム中・小ブロック・粒子少量, ローム大ブロック微量 |
| 3 褐色 | ローム中ブロック・粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム中・小ブロック・粒子中量 | 10 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子中量, ローム中ブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ローム中・小ブロック・粒子・焼土粒子微量 | 11 褐色 | ローム小ブロック・粒子多量, ローム大・中ブロック中量 |
| 6 黒褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 (締まり普通) 旧表土 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |

外壕部 全長101.3m, 上幅9.3~11.2m, 下幅3.5~4.9mで, 掩体部の外周に沿って溝状に巡っている。深さは120~130cm, 底面は皿状で, 壁は緩やかに立ち上がっている。この部分の土を掘削して, 掩体部に土を積み上げていったものと考えられる。Cトレンチの調査から, 本跡の廃絶後, 掩体部の盛土を崩して外壕部を整地したものとみられる。

遺物出土状況 機銃弾3点が出土している。その他, 構築土中に混入した縄文土器片41点 (前期2, 中期39), 陶器片1点 (蓋), 石器1点 (磨製石斧) も出土している。M9~M11は米軍の12.7mm機銃弾である。M9・M11は西側格納部に設定したB・Eトレンチ内, M10は外壕部西側に設定したAトレンチ内からそれぞれ出土しており, 米軍の機銃掃射を受けた際のものと考えられる。

所見 平面形がE字形であることから, 2機の飛行機を格納したものである。構築状況から, 掩体部は旧表土の上に, 外壕部から土取りしたローム土を積み上げて構築したものとみられる。また, 格納部は, 旧表土に盛土した後, 平坦に均して突き固め, 整地したものと考えられる。出土遺物から, 第2号掩体壕と同時期に攻撃を受けたものと考えられる。



第89図 第3号掩体壕・出土遺物実測図

第3号掩体壕出土遺物観察表（第89図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部2条の黒目列 単編織文を縦方向に編文	Dトレンチ内	PL20
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	注瀬による溝布文と区画文 区画内は単編織文を縦方向に編文	Eトレンチ内	PL20
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐色	普通	輪縁に沿って黒目列	Bトレンチ内	PL20

番号	種別	全長(mm)	口径(mm)	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M9	機銃弾	59.0	12.7	41.6	真鍮・鉛	12.7mm機銃弾	8条右旋のライフルマーク 真中央部に2条のくぼみ 後薬室のくぼみに白い粉状の物質が付着 発光弾	Eトレンチ内	PL20
M10	機銃弾	59.0	12.7	41.3	真鍮・鉛	12.7mm機銃弾	8条右旋のライフルマーク 真中央部に1条のくぼみ 後薬室のくぼみに白い粉状の物質が付着 発光弾	Aトレンチ内	PL20
M11	機銃弾	(43.0)	12.7	(29.8)	真鍮・鉛	12.7mm機銃弾	8条右旋のライフルマーク 真中央部に2条のくぼみ 真中央部から先端部の真鍮の層が剥がれている 後薬室のくぼみに白い粉状の物質が付着 発光弾	Bトレンチ内	PL20

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	磨製石斧	(2.9)	3.7	(1.4)	(15.5)	凝灰岩	基部欠損 全面を下側に研磨 刃部におわずかな刃こぼれ	Eトレンチ内	

第4号掩体壕（第90図）

位置 調査区K12g1～L12g0区、標高30mの台地平坦部に位置している。

確認状況 遺存状況は悪く、東・南半部は削平されており、西側格納部の北部と奥壁、外壕部の一部だけが確認されている。

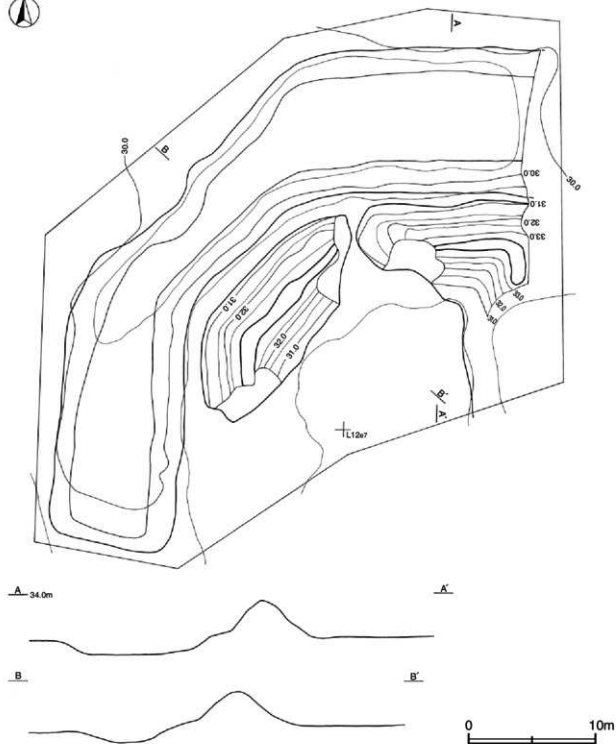
規模と形状 遺存する掩体部の最大幅は27.0m、奥行18.0mである。米軍撮影の航空写真から、平面形はE字形であったことが確認できる。主軸方向はN-180°で、東西方向に構築されている。

掩体部 奥壁は西半部だけが遺存しており、上幅0.4～0.5m、下幅5.0～7.5m、高さは3.0mである。断面形は山形で、内法面は斜度35度、外法面は斜度50度で盛土されている。西側壁は上幅1.2～1.5m、下幅6.2～8.5mで、高さは2.8mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度40度で盛土されている。断面図から、外壕部の上端と掩体部の基部との間に、幅2.0～2.5mの犬走り状のテラス面がみられるが、第3号掩体壕と同様に、外壕部から若干の間隔を空けて掩体部を構築した痕跡であり、構築時の土取りや運搬作業の足場として使用したものと想定される。

格納部 航空写真から2か所あったことが確認できるが、東側格納部は湮滅している。西側格納部は北半部だけが遺存しており、幅14.0m、確認できた奥行は10.5mで、平面形は方形と推測できる。南半部は湮滅しており、開口部も確認できなかったが、主軸方向はN-180°で南方向に向けて開口していたものとみられる。格納部の底面はほぼ平坦で、硬化している。南側の調査区外に、東西方向に誘導路が構築されていたことが、米軍撮影の航空写真から確認できる。

外壕部 全長55.5m、上幅6.5～11.6m、下幅2.0～7.0mで掩体部の外周に沿って、溝状に巡っている。深さは90～130cm、底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。この部分の土を掘削して、掩体部に土を積み上げていったものと考えられる。

所見 平面形がE字形であることから、2機の飛行機を格納したものである。



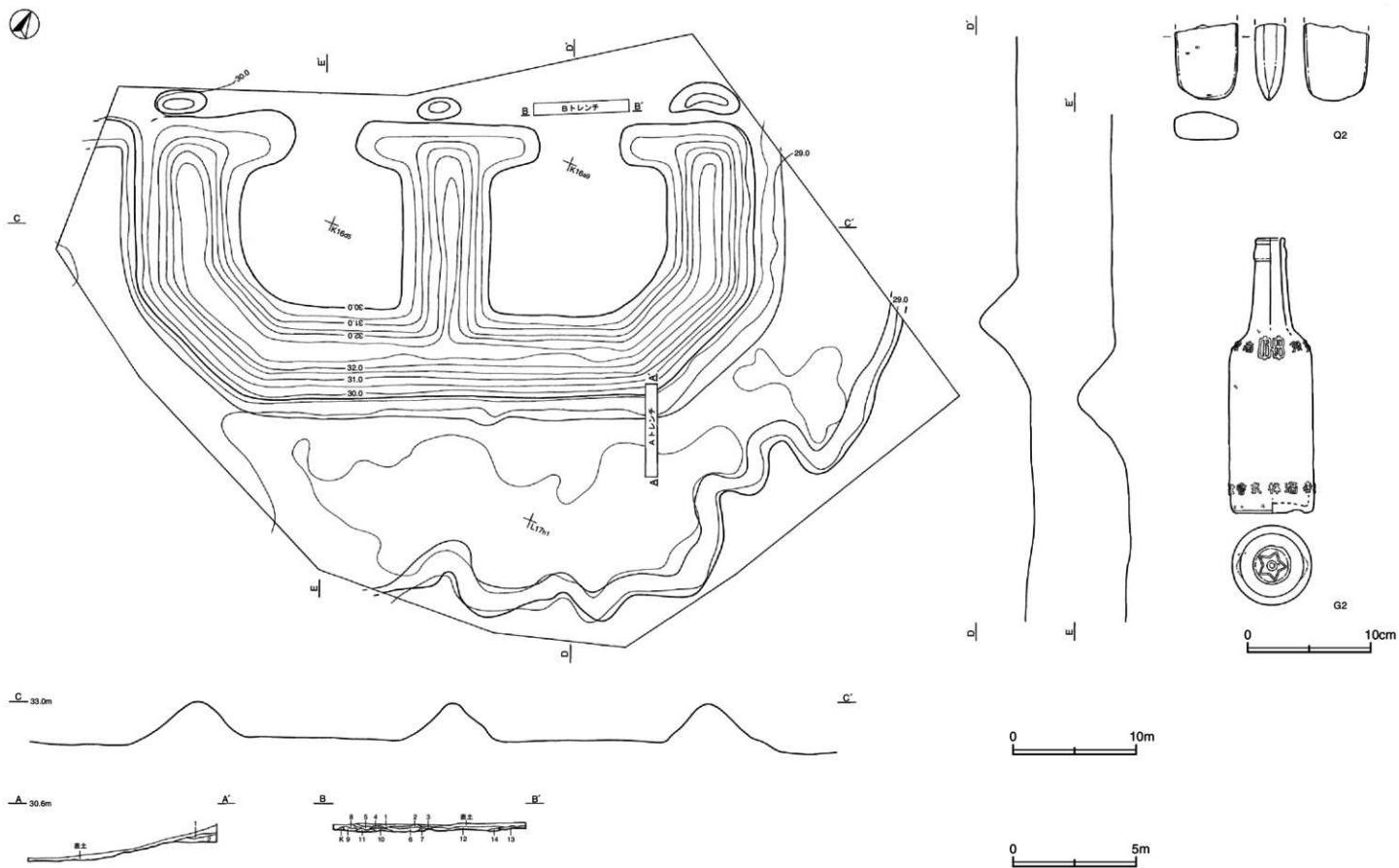
第90図 第4号掩体壕実測図

第5号掩体壕 (第91図)

位置 調査区J15j0～K17j6区、標高30mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 最大幅50.2m、奥行23.6mで、平面形はE字形である。主軸方向は $N-25^{\circ}-W$ で、東西方向に構築されている。

掩体部 奥壁は上幅0.3～1.1m、下幅6.6～7.7m、高さは3.1mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度40



第91図 第5号掩体壕・出土遺物実測図

度で盛土されている。側壁は上幅0.8～2.1m、下幅7.1～9.0mで、高さは3.0～3.1mである。断面形は山形で、内・外法面は傾度40度で盛土されている。側壁の北端は、開口部方向に屈曲しており、側壁内面から4.5～5.0mほど張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.0～1.2mまでスロープ状に構築されている。中央壁は、上幅0.7～1.5m、下幅7.0～7.4mで、高さは3.1mである。断面形は山形で、内・外法面は傾度35～40度で盛土されている。中央壁の北端は、翼状に左右とも5.0mずつ張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.23mまでスロープ状に構築されている。

掩体の構築状況 旧表土である黒褐色土の第2層を基底部とし、ローム土を主体とした褐色土を積み上げて構築している。各壁端部にみられる張り出し部は、黒褐色土を主体として盛土されている。等高線を見ると、各壁端部の前面に長径3.5～5.8m、短径1.5～2.4mの楕円形を呈する、深さ50cmほどの窪みが確認できることから、張り出し部はこの窪みから採取した土を盛土したものとみられる。

土層解説 (A-A')

- | | | | |
|------|------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量 (締まり強い) | 2 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子微量 (締まり普通) |
|------|------------------------------|-------|-----------------------|

格納部 2か所。東側格納部は幅14.5m、奥行15.5mの方形で、面積224.8㎡である。開口部は、東側壁と中央壁の端部から開口部を閉じるように内側に向かう張り出し部によって狭められている。そのため、開口部幅は6.6mと格納部幅の約半分になっている。主軸方向はN-25°-Wで、北西方向に向けて開口している。

西側格納部は幅13.4m、奥行15.5mの方形で、面積207.7㎡である。開口部は東側格納部と同様に狭められており、開口部幅は5.5mで、主軸方向はN-25°-Wである。両格納部とも、床面はほぼ平坦で、硬化している。東側格納部の開口部に設定したBトレンチの土層断面から、開口部付近にはローム土と黒褐色土を交互に突き固めた様相がみられる。また、西半部には碎石を敷設し、開口部付近の補修を行った痕跡がみられる。開口部北西側の調査区域外に、北東から南西方向に誘導路が構築されていたことが、米軍撮影の航空写真から確認できる。

土層解説 (B-B')

- | | | | |
|-------|--|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・碎石微量 | 7 褐色 | ローム大・中・小ブロック・粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック中量 | 8 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 | 9 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子少量、ローム中ブロック微量 | 10 暗褐色 | ローム中・小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム中・小ブロック中量、ローム粒子・碎石少量 | 11 黒褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム中ブロック中量、ローム小ブロック・粒子・碎石少量、ローム大ブロック微量 | 12 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子微量 (締まり普通) |
| | | 13 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子微量 (締まり強い) |
| | | 14 褐色 | ローム中・小ブロック・粒子中量 |

外壕部 確認できた範囲では、全長92.8m、上幅10.0～18.2m、下幅5.5～14.3mで、掩体部の外周に沿って溝状に巡っている。深さは130cm、底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。この部分の土を掘削して、掩体部に土を積み上げていったものと考えられる。Aトレンチの調査で、外壕部の覆土の大半が掩体部の構築土と同じ褐色のローム土であることが確認されており、本跡の廃絶後、掩体部の盛土を崩して外壕部を整地したものとみられる。

遺物出土状況 鉄製品1点(不明)、ガラス製品1点(ビール瓶)が出土している。その他、構築土中に混入した縄文土器片1点(中期)、石器1点(磨製石斧)も出土している。G2は、外壕部の表土から出土している。

所見 平面形がE字形であることから、2機の飛行機を格納したものである。盛土の状況から、掩体部は旧表土の上に、外壕部から土取りしたローム土を積み上げて構築したものとみられる。各壁が完成した後、開口部付近の土を採取し、各壁端部の張り出し部を構築したものと考えられる。また、格納部の開口部付近にみられる碎石の敷設は、飛行機搬入のためにできた轍の補修痕と想定することもできるが、明確ではない。外壕部

の表土から出土したビール瓶下端の刻印には、右から横書きで「大日本麦酒株式会社製造」とある。同社は、1906年から1949年にかけて操業しており、本跡の構築時期は同社の晩年にあたることから、本跡に伴う遺物と捉えた。

第5号掩体壕出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	口径	器高	底径	色調	材質	特徴	出土位置	備考
G2	ビール瓶	2.5	22.5	6.5	淡青	ガラス	大日本ビール 口部まで金むせ目 肩部に「豊前曲瓶」とロゴマークの烙印 ヒールに右から横書きで「大日本麦酒株式会社製造」の烙印 底部に「金」の烙印 ガラス内に黒点	外壕部表探	PL20
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	磨製石斧	(6.2)	5.1	2.5	(111.7)	凝灰岩	基部欠損 全面を丁寧に研削 刃部にわずかな刃こぼれ	外壕部表探	PL20

第6号掩体壕（第92図）

位置 調査区G17e3～H17f0区、標高30mの台地平坦部に位置している。

確認状況 遺存状況は悪く、東半部は削平されており、掩体部の奥壁と外壕部の一部だけが確認されている。

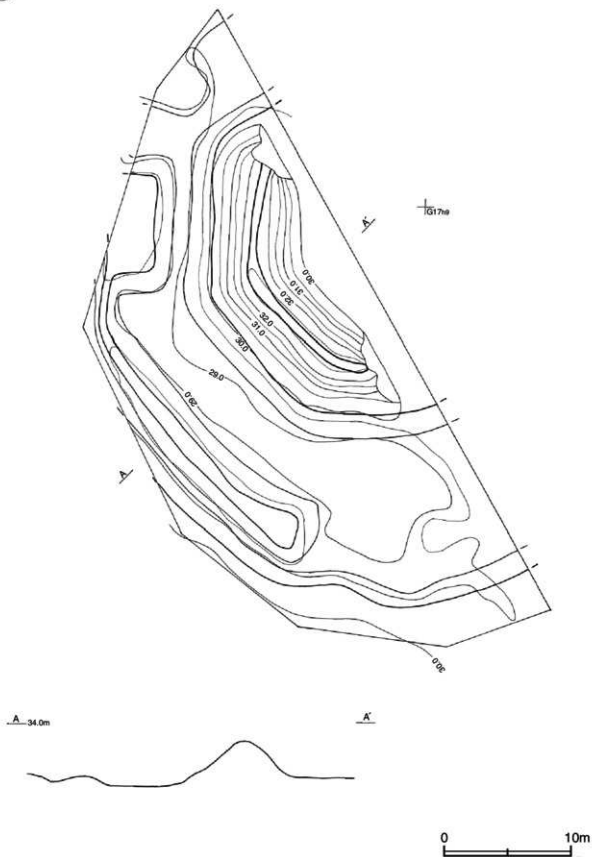
規模と形状 遺存する掩体部の最大幅は26.5m、奥行7.4mである。米軍撮影の航空写真から、平面形はC字形であったことが確認できる。主軸方向はN-90°-Eで、南北方向に構築されている。

掩体部 奥壁の一部だけが遺存しており、上幅0.6～1.2m、下幅7.0～7.8m、高さは2.8mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度40度で盛土されている。

格納部 航空写真からは、格納部1か所で東方向に向けて開口していたことが確認できるが、格納部は湮滅している。東側の調査区域外に、南北方向に半円状に屈曲する誘導路が構築されていたことが、米軍撮影の航空写真から確認できる。

外壕部 確認できた範囲では、全長55.0mで、中州状に掘り残し部分があり、二重の溝が掩体部の外周に沿って巡っている。内側の溝状部は上幅1.5～5.5m、下幅1.0～6.0m、深さは50cmである。外側の溝状部は上幅2.0～4.0m、下幅0.7～1.0m、深さは40cmである。H17c7～H17e8区にかけては、内外の区別なく掘り込まれており、上幅11.0～13.0m、下幅10.5～12.5m、深さは37cmである。外壕部の底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。外壕部を区画する中州状の掘り残し部分の土は、薄い表土を除去するとすぐにローム土の地山が確認されていることから、本跡の構築時に掘り残された部分であると判断した。土取りの際に、土砂運搬用の足場として使用されたものとも想定できるが、明確ではない。

所見 平面形がC字形であることから、飛行機1機を格納したものである。



第92図 第6号掩体壕実測図

第7号掩体壕（第93図）

位置 調査区K19e2～K20e8区、標高30mの台地平坦部に位置している。

確認状況 遺存状況は概ね良好であるが、西側壁の北端部と中央壁の西側張り出し部、西側格納部の開口部付近は削平されている。また、外壕部の東・西の北端部は埋め戻されている。

規模と形状 最大幅50.4m、奥行23.0mで、平面形はE字形である。主軸方向はN-28°-Eで、東西方向に構築されている。

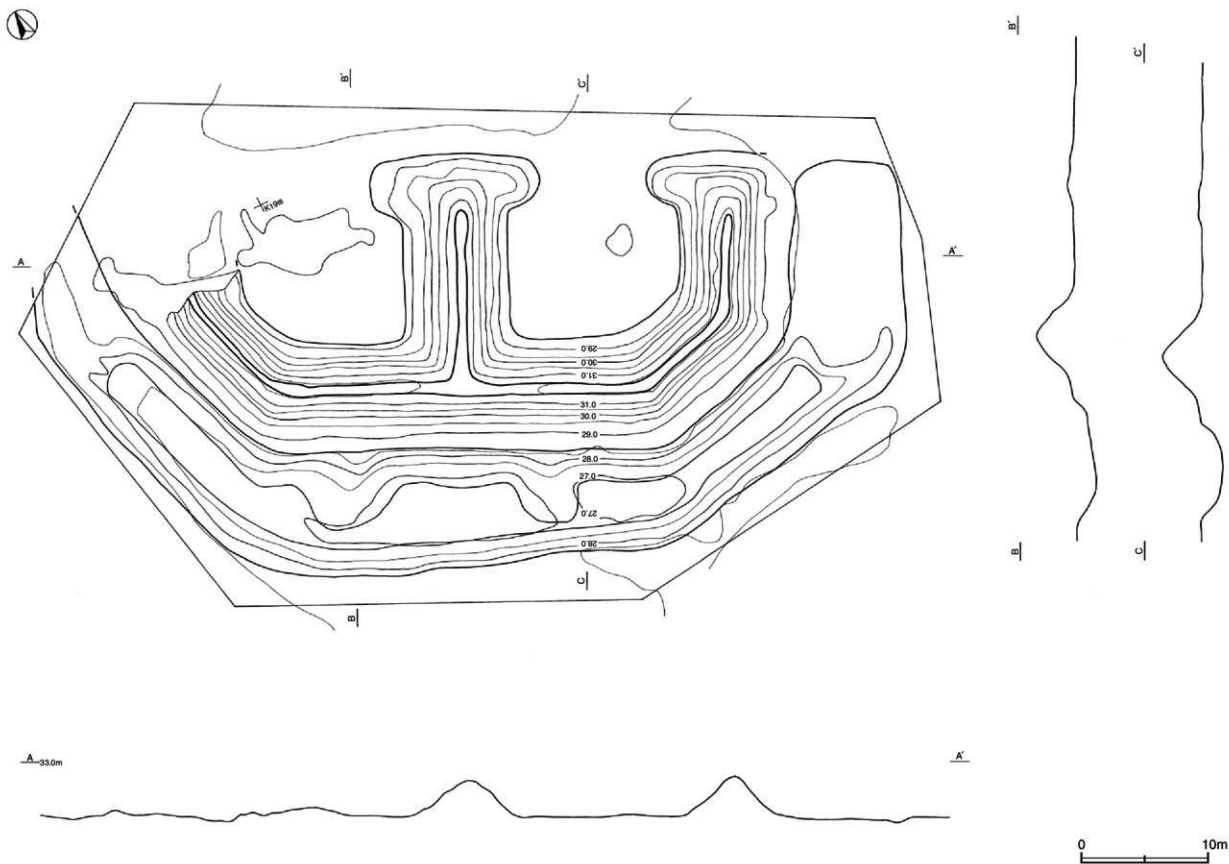
掩体部 奥壁は上幅0.7～1.0m、下幅7.5～7.9m、高さは2.9mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度40度で盛土されている。側壁は上幅0.4～0.9m、下幅6.8～7.0mで、高さは3.3mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度38～40度で盛土されている。側壁の北端は、開口部方向に屈曲しており、側壁内面から4.0mほど張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.45mまでスロープ状に構築されている。中央壁は、上幅0.6～0.9m、下幅8.0～8.3mで、高さは2.8mである。断面形は山形で、内・外法面は斜度32～40度で盛土されている。中央壁の北端は、翼状に左右とも4.0mずつ張り出している。この張り出し部は、開口部底面から側壁高1.45mまでスロープ状に構築されている。

格納部 2か所。東側格納部は幅14.2m、奥行15.0mの方形で、面積213.0㎡である。開口部は、東側壁と中央壁の端部から開口部を閉じるように内側に向かう張り出し部によって狭められている。そのため、開口部幅は8.4mと狭くなっている。主軸方向はN-28°-Eで、北東方向に向けて開口している。西側格納部は、開口部付近が削平されており、幅13.2m、奥行15.0mだけが確認されている。平面形は方形と推測できる。開口部は東側格納部と同様に狭められていたとみられるが、開口部付近が削平されているため明確ではない。両格納部とも、床面はほぼ平坦で、硬化している。開口部北東側の調査区域外に、北西から南東方向に半円状に屈曲する誘導路が構築されていたことが、米軍撮影の航空写真から確認できる。

外壕部 東・西の北端部は埋め戻されているため、確認できた全長は90.0mである。上幅6.4～9.5m、下幅0.5～4.4mで掩体部の外周に沿って、溝状に巡っている。深さは150～170cm、底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。この部分の土を掘削して、掩体部に土を積み上げていったものと考えられる。本跡の外壕部は、他に比べて、上幅が狭く、掘り込みが深い。1947年撮影の航空写真を見ると、外壕部の背後に林が存在しており、そのため外壕部の幅が確保できず、その分深く掘って掩体部の構築土を確保したものと想定される。また、等高線に、掩体部奥壁の外側に2か所、外壕部の底面に向かってスロープ状の張り出し部がみられる。この張り出し部は、深い底面の土を運び上げるために掘り残されたスロープと考えられる。

所見 平面形がE字形であることから、2機の飛行機を格納したものである。外壕部が、他の掩体壕に比べて、上幅が狭く、深く掘られているのは、背後に林を負う地形上の制約を受けたためと考えられる。

掩体部の盛土確保のため、深く掘る必要があり、2か所の土砂運搬用のスロープを構築して作業効率を上げたものと考えられる。



第93图 第7号掩体壕实测图

表13 掩体壕一覽表

番号	位置	主軸方向	掘 壕 部					格 納 部			外 壕 部				主な 出土遺物	備考 （古→新）			
			平面形	幅×奥行	上幅	下幅	高さ	断面形	幅×奥行	扉幅 [m]	開口深	扉出部	長さ	上幅			下幅	高さ (m)	断面形
1	M748 ～ M911	N-0°	E字形	51.1 ×26.1	裏側 0.5-1.4	6.7 ～8.9	3.3	台形	14.2 ×15.0	213.0	[17.5]	無し	-	-	-	-	-	金属部品 磁石	横穴2- SK16新出
					扉側 0.6-1.2	7.2 ～8.8	3.2	台形											
2	R101 ～ S11β	N-35°-E	E字形	50.5 ×23.0	裏側 0.8-1.8	7.5 ～8.5	3.2	台形	14.0 ×15.5	217.0	(7.5)	有り	(83.0)	0.7 ～1.25	0.25 ～0.75	50 ～80	磁状	金属部品 機銃弾	
					扉側 1.5-2.3	7.0 ～8.2	3.1	台形											
3	S125 ～ U14b1	[N-37°-W]	E字形	(28.2) ×23.0	裏側 0.5-1.0	7.1 ～8.7	3.1	逆U 字形	-	-	-	-	101.3	9.3 ～11.2	3.5 ～4.9	120 ～130	磁状	機銃弾	
					扉側 0.7-1.5	6.9 ～7.0	3.3	山形											
4	K12g1 ～ L12g0	N-180°	E字形	(27.0× 18.0)	裏側 0.4-0.5	6.2 ～7.5)	3.0	山形	-	-	-	-	(55.5)	6.5 ～11.6	2.0 ～7.0	90 ～130	磁状	-	
					扉側 1.2-1.5	6.2 ～8.5	2.8	山形											
5	J15β ～ K17β	N-25°-W	E字形	50.2 ×23.6	裏側 0.3-1.1	6.6 ～7.7	3.1	山形	14.5 ×15.5	224.8	6.6	有り	(92.8)	10.0 ～18.2	5.5 ～14.3	130	磁状	ビール瓶	
					扉側 0.8-2.1	7.1 ～8.0	3.1	山形											
6	G17a ～ H170	[N-90°-E]	C字形	(26.5 ×7.4)	裏側 0.6-1.2	7.0 ～7.8	2.8	山形	-	-	-	-	(55.0)	内側 1.5-5.5	1.0 ～6.0	50	磁状	-	二重の 外壕部
					扉側 -	-	-	-						外側 2.5-4.0	0.7 ～1.0	40			
7	K19a2 ～ K20a8	N-28°-E	E字形	(50.4) ×23.0	裏側 0.7-1.0	7.5 ～7.9	2.9	山形	14.2 ×15.0	213.0	8.4	有り	(90.0)	6.4～9.5	0.5 ～4.4	150 ～170	磁状	-	
					扉側 0.4-0.9	6.8 ～7.0	3.3	山形											
					中央部 0.6-0.9	8.0 ～8.3	2.8	山形											

第4節 ま と め

戦時下において、軍用機を隠蔽し、空襲から守る目的で構築された掩体壕は、その規模や形状に一定の規格性が認められる。以下、発掘調査で明らかになった掩体壕の様に、文献史料及び聞き取り調査によって得られた情報を加えて、若干の考察を行いまとめたい。

1 百里原海軍飛行場について

(1) 茨城県内における軍事施設跡の発掘調査状況と調査区周辺の軍事施設跡について

茨城県内における太平洋戦争中の軍事施設跡は数多く残されている。そのうち旧海軍飛行場は当遺跡を含めて霞ヶ浦・土浦・新ノ池・筑波・西筑波・谷田部・鹿島の8地区にあったとされ、その跡地付近に遺存している掩体壕も確認されている。石岡市では東府中掩蔽壕群（遺跡番号08 205 075）にコの字形の無蓋掩体壕2基が遺存しており、近代遺構として遺跡登録されている。また、有蓋掩体壕は霞ヶ浦と神之池の海軍航空隊跡付近にそれぞれ遺存している。掩体壕の調査例は平成19年9月から12月にかけて、小美玉市教育委員会による旧百里原海軍飛行場掩体壕群第12・13号掩体壕の発掘調査が行われている。また、戦争関連施設の調査例は、稲敷郡阿見町に所在する実穀寺子西遺跡で霞ヶ浦海軍航空隊基地の防衛を担当した防空砲台跡2基と関連施設の、ひたちなか市に所在する武田西端遺跡で高射砲陣地跡などの調査例がある¹⁾。

今回の旧百里原海軍飛行場掩体壕群の調査は、県内でも数少ない戦争関連遺跡の調査例である。調査された掩体壕は、飛行場滑走路帯路の東側に位置する一群であり、誘導路を介して飛行場と繋がっていたことが、米軍撮影の航空写真から判明している。基地施設の多くは、現在の航空自衛隊百里基地の西側に存在していたようで、正門跡、機銃試射場跡、百里神社が現存している。滑走路は旧飛行場関連施設から東側に菱形に形成されており、この滑走路の外側に誘導路を介して80基余りの掩体壕群が構築されていた。平成17～18年度にかけて、茨城県教育委員会による近代化遺産の調査が実施され、当遺跡内に16基の無蓋掩体壕が遺存することが確認されている。その後、当財団による発掘調査が行われた際に、新たに1基の掩体壕が確認されたため、17基の掩体壕が遺存していたことになる。

(2) 百里原海軍飛行場の概要

先述した茨城県内の海軍飛行場は、満州事変以降特に日中戦争勃発前後に集中して建設され、航空隊・飛行部隊が設置されている²⁾。当飛行場跡も、筑波海軍航空隊友部分遣隊の飛行場として、1937（昭和12）年に建設が始まり、翌年には筑波海軍航空隊百里原分遣隊として開隊していることから、他の飛行場と同時期に建設されたものである。1939（昭和14）年12月には、百里原海軍航空隊として独立、開隊し、艦上爆撃機・艦上攻撃機・練習機の基地として、主に飛行練習生の中練（中間練習機教程）教育が行われていた。1945年9月30日付けの「引渡目録 奥羽海軍航空隊百里原基地」によると、飛行場の敷地は1,600m×1,300mの208万㎡で、教育飛行場として全面を離着陸訓練に使用した面飛行場としての規格どおり建設されていたことが分かる³⁾。

戦局の悪化とともに、当飛行場の基地機能は増強され、1943（昭和18）年秋以後は、中練の操縦訓練を他の航空隊に移管し、実用機の操縦と偵察員の教育が行われ、大航空隊へと変化していった。1943（昭和18）年には艦上爆撃機45機、練習機108機であった当部隊の保有機体数は、1944（昭和19）年6月には艦上爆撃機・艦上攻撃機135機、陸上攻撃機16機、機上練習機36機と実用機が増強され、練習機が削減され

ていることから、実戦訓練部隊としての性格を強めていったことが読み取れる。当部隊は練習航空隊とはいえ、所有機が実用機であったため、必要に応じて作戦任務が与えられ、訓練不十分なまま索敵任務等に赴くこともあったといわれている。

当部隊が実戦訓練部隊へと移行した後、昭和19年末頃から日本本土空襲が激化し、飛行機の損耗は増加した。また、飛行機工場への爆撃も激しくなり、生産機数は著しく低下した。各部隊においては、米軍の本土上陸に備えて現有機の確保が重要課題とされ、飛行場周辺の地形を利用した飛行機の分散及び秘匿が急務となり、掩体壕が盛んに構築されるようになった。これら飛行場の整備のための作業量は莫大であったが、民間人の労力も使い、本土法戦準備のため飛行場の強化を行った⁴⁾。当飛行場周辺において、掩体壕が構築されるのはこの頃と考えられる。また、この頃から当部隊では、主に艦上攻撃機による特攻訓練が行われるようになり、昭和20年3月末に沖縄作戦が発動されると同時に、菊水作戦に参加した多くの兵士が犠牲となっている。

1945（昭和20）年になると、日本本土空襲は一層激しくなり、当飛行場も2月16日に米軍グラマン戦闘機によるロケット弾攻撃を受け、隊舎が炎上し戦死者を出すに至った。日本本土空襲はこれ以降8月15日まで、ほぼ間断なく続いた。末期には機動部隊艦載機や硫黄島から飛来する単発機による爆撃や機銃掃射も行われた。これら攻撃の様相は、国立国会図書館憲政資料室所蔵の米国戦略爆撃調査団報告資料（USSBS文書）Entry No. 55「太平洋戦争米国海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」に詳しい。百里原飛行場関連の戦闘報告書は31件あり、その内の1件であるRoll No. 5の1136-1139は、1945年8月15日午前8時30分の戦闘報告書で、終戦日当日にも空襲があったことが記録されている。

2 掩体壕について

掩体壕とは、航空基地内やその近辺に作られた軍用機を隠蔽し、空襲から守るための格納庫である。今回調査した7基の掩体壕は全て土盛りによって構築された無蓋型である。聞き取り調査によると、上部にネットをかけて飛行機を隠蔽したという証言もあったが、掩体部幅50mを超える規模から、隠蔽の目的は期待できないと考えられる。これら無蓋掩体壕は、至近弾からの機体の損傷や、被弾した機体からの類焼を避ける目的で構築されたものと想定される。

ここでは、調査によって明らかとなった掩体壕の規模と形状、構築状況からその特徴を考察するとともに、資料や聞き取り調査によって判明した情報も併せて記述する。

(1) 規模と形状の規格性

掩体壕は、太平洋戦争の末期、全国の航空基地周辺に1000基以上作られたとされ、その形状や規模は、全国的に共通する特徴と同時に地域差も併せもつとされる⁵⁾。今回調査した掩体壕7基を含む遺跡の掩体壕群は、形状に規格性がみられることから、調査担当者の荒蒔氏は極東米軍の航空写真を詳細に調べ、掩体壕の形状を分類している（第94図）。それによると、平面形は、2機体を格納できる「E字形」のもの、1機体を格納する「C字形」がある。「E字形」は掩体端部に翼状の張り出しがあり格納部の開口幅が狭められているものをⅠ型a類、そうでないものをⅠ型b類に分類している。また、「C字形」は規模が小さいⅡ型と、規模がⅡ型の約2倍となるⅢ型に分類している。この分類による7基の内訳は、Ⅰ型6基（内第1号掩体壕だけがb類で他はa類）は、Ⅱ型1基であり、本調査区においては、Ⅰ型が主体的に構築されていたことが分かる。

また、測量調査の結果明らかとなった掩体壕7基の規模を比較すると、Ⅰ型の掩体部は幅50m前後、奥

行24m前後の範囲で構築されている。掩体部を構築する土堤状の高まりは、幅8m前後、高さ3m前後の規模で土盛りされている。また、格納部の規模は、第3号掩体壕が幅11.4mと狭いが、他は幅13～14m前後、奥行15m前後である。翼状の張り出しをもつⅠ型a類については、開口部の幅が6m前後で構築されている。これら計測値から、Ⅰ型の掩体壕については、規模において規格性が認められる。掩体壕の構築は、綿密な計画のもとに実施されていたことがうかがえる。

他の航空基地に構築された無蓋掩体壕との比較は、資料が少ないためにできなかったが、Ⅰ型に類似する掩体壕として、茨城県土浦市烏山A遺跡の掩体壕が報告されている⁴⁾。ここは霞ヶ浦海軍航空隊飛行場地区に程近く、野外飛行機保留地として戦中に掩体壕が多数構築された場所である。測量調査を行った掩体壕の規模は、最大幅約54m、奥行約21mで、掩体部の高さは約3.8mと報告されており、中央部に仕切り状の壁が設けられていた可能性が指摘されている。規模は当遺跡の掩体壕とほぼ同程度であるが、烏山A遺跡の掩体壕は中央の奥壁から長さ4mほど仕切り状の壁が突出しているのに対し、当遺跡の掩体壕は中央壁が開口部まで延びている点に違いがみられる。

2006.07.06 Aramaki

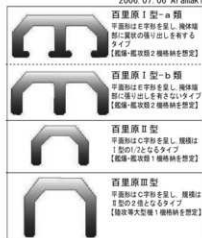


表14 掩体壕の計測値

番号	位置	主軸方向	掩体部			格納部			土の出入 設備	土倉状況	類型			
			平面図	幅×奥行	掩体の幅(高さ)	幅×奥行	幅×高さ	開口部幅				開口部高		
1	M704 ～ M910	N-0°	E字形	31.1×26.1	0.3-8.9	3.0	14.2×15.0	213.0	(17.5)	無し	金属部 品-電線	良好	Ⅰ型-a類	
2	R1001 ～ S1105	N-30°-E	E字形	30.5×23.0	0.5-9.2	3.2	14.0×15.5	217.0	(7.5)	有り	金属部 品-電線	良好	Ⅰ型-a類	
3	S1203 ～ U1401	[N-30°-W]	E字形	(28.2)×23.0	0.5-8.7	3.3	-	-	-	-	-	埋設済	両手部分 は遺存	Ⅰ型-a類
4	K1201 ～ L1202	N-180°	E字形	(27.0×18.0)	0.4-8.5	3.0	14.0×(10.0)	-	-	-	-	-	埋設済 土壁部の 一部は遺存	Ⅰ型-a類
5	J1501 ～ K1705	N-20°-W	E字形	30.2×23.6	0.3-9.0	3.1	14.5×15.5	224.8	6.6	有り	電線	一部 良好	Ⅰ型-a類	
6	G1701 ～ H1701	[N-90°-E]	C字形	(26.5×7.4)	0.6-7.8	2.8	13.4×15.5	207.7	5.5	有り	無し	-	掩体部の 残壁だけ 遺存	B型
7	K1802 ～ K2008	N-28°-E	E字形	(30.4)×23.0	0.4-8.3	3.3	14.2×15.0	213.0	8.4	有り	-	-	良好	Ⅰ型-a類
							(13.2×15.0)	-	-	[有り]	-	-		

第94図 百重原海軍飛行場掩体壕の模型

(2) 掩体壕の構築状況

聞き取り調査によると、当遺跡の掩体壕は昭和18～20年にかけて作られたようである⁷⁾。掩体壕の構築にあたっては、「千人手間」と呼ばれた勤労奉仕の割り当てによって、地域の人々の奉仕作業が求められたようである。戦時中の供出により鉄製品は回収されており、乏しい道具での掩体壕作りは困難を極めたことは想像に難くない。外壕部の土をシャベルで掘り集め、縄で編んだ1m角ほどの大きさの「もっこ」に土を入れて、2人1組になって竹の棒で肩に担いで掩体部に運び上げるのは、女性と老人、子ども達が主であった。また、1日に数回響く空襲警報の度に作業を中断し、付近の林に逃げ込むなど命懸けの奉仕作業であったという⁸⁾。

第1・2号掩体壕については、掩体部の断ち割り調査を行い、土層断面の観察を行っている。観察の結果判明した掩体壕の構築状況について、両掩体壕を比較して記述する。第1号掩体壕では、盛土の基底部は旧表土を掘り込んだ地山面である。また、格納部の底面は地山面まで削り出した後に黒褐色土の埋土を行い平坦に填圧した状況がみられた。これに対して第2号掩体壕では、格納部の構築状況は同じであるが、掩体部構築に際しての整地事業は行われず、旧表土を平坦に均してから填圧して盛土の基底部としている。また、両者とも掩体部の土盛りはローム土を主体とした褐色土・明褐色土・暗褐色土を概ね水平に積み上げる方法

で行われている。上層の構築土にはローム土の他、鹿沼バミスも若干混じっていることから、外壕部を1.0～1.5mほど掘り込んで集めた土を「もっこ」で運び上げた状況がみられる。土層断面に中層までの締まりが強いことから、積み上げた土を突き固めながら構築されたものとみられる。第1号掩体壕の奥壁Aトレンチと西側壁の土層断面からは、一方に高さ1mほどの小規模な土留めを行った後に、反対側から土盛りを行っている状況がみられたが、第2号掩体壕にはみられない。第2号掩体壕では、掩体端部に翼状の張り出しが構築されているが、旧表土に近い暗褐色土・黒褐色土で土盛りされていることから、掩体部が完成した後に周辺の土を使って作られたものと想定される。

このように、第1・2号掩体壕の構築状況を比較すると、構築前の整地事業の有無、掩体部への土盛りの方法、張り出し部の構築に違いがあることが判明した。こうした構築状況の違いの要因については、構築時期の差、作業工程の違い、構築位置の地形的な制約などが考えられるが、正確なところは不明である。

(3) 掩体壕群の配置

1947年10月25日撮影の極東米軍航空写真をみると、83基の無蓋掩体壕とみられる構造物が確認できる⁹⁾。米軍の日本本土上陸に備え、現有機の秘匿温存を目的に作られたこれらの掩体壕は、当飛行場周辺に分散して配置されており、その分布は大きく5群に分かれている。ここでは、便宜上それぞれの群にA～E群までの名称を付けて記述する。飛行場北部に2群（北東部をA群、北西部をE群）、南東部にB群、南部にC群、西部にD群がそれぞれ位置し、本調査区はB群にあたる。各群に属する掩体壕は、誘導路を介して飛行場沿走路に接続されていたことが、「施設現状目録」¹⁰⁾から読み取れる。今回調査したB群の掩体壕群は、誘導路を挟んで互い違いに配置されていることから、誘導路の建設後に掩体壕を配置していったものと想定される。各群に配置された掩体壕の類型及び基数については表15の通り¹¹⁾であり、当飛行場周辺に構築された掩体壕83基の内訳をみると、I型が主体的に構築されていたことが分かる。また、これら5群の内、A群とD群に掩体壕が多く配置されている。これはA群の北東部には第601海軍航空隊分散地区が、D区の西部には本隊分散地区がそれぞれ位置しており、本部や兵舎等の施設が置かれていたため、飛行機搬出入の利便性を考慮したものと想定される。

表15 旧百里原海軍飛行場掩体壕群の掩体壕構築数

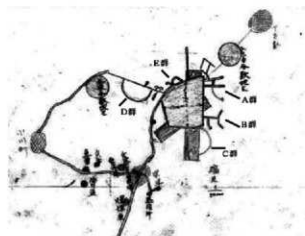
群	I型	II型	III型	計
A群	26	6	0	32
B群	11	2	0	13
C群	5	0	0	5
D群	14	8	0	22
E群	7	1	3	11
計	63	17	3	83

当時は、各地の航空基地において、掩体壕による飛行機の分散秘匿が行われており、司令部によって飛行場の秘匿例も示されている¹²⁾。また、陸軍関係の資料ではあるが、昭和20年3月5日付けの「空襲二依ル飛行場及諸施設ニ関スル教訓」¹³⁾によれば、「(ロ) 無蓋掩体ハ今次ノ如キ攻撃ニ對シテハ効果ナシ 遮蔽又ハ偽装ノ対策ヲ講スルヲ用ス」「(ハ) 位置ノ選定ハ飛行場使用ノ目的ニヨリ異ナルモ防衛的態勢ニ在リテハ敵ノ意表外ノ位置ニ分散秘匿遮蔽ノ対策ヲ講スルヲ用ス」とあり、無蓋掩体壕の空襲に対する防衛機能の不十分さを指摘し、遮蔽や偽装によって対策を行うように提言されている。当飛行場においてもA群からE群までの無蓋掩体壕群は、地域の自然地形等を利用して飛行機及び誘導路を隠蔽できる場所を選んで構築されている。

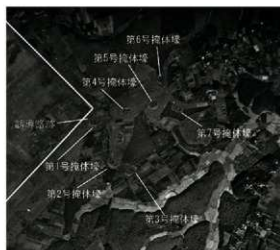
しかし、米軍機によって各地の飛行場の様子はすでに空撮されており、当飛行場も攻撃目標に加えられていたことは、米国防略爆撃調査団報告資料から明らかである¹⁴⁾。



第95図 旧百里原海軍飛行場掩体壕群全景 1947年極東米軍撮影航空写真より (国土地理院所蔵 一部加筆、合成)



第96図 施設現状目録 奥羽海軍航空隊百里原基地 (第16画像目) (防衛省防衛研究所所蔵資料に加筆)



第97図 旧百里原海軍飛行場掩体壕群 B群 (国土地理院所蔵 一部加筆)

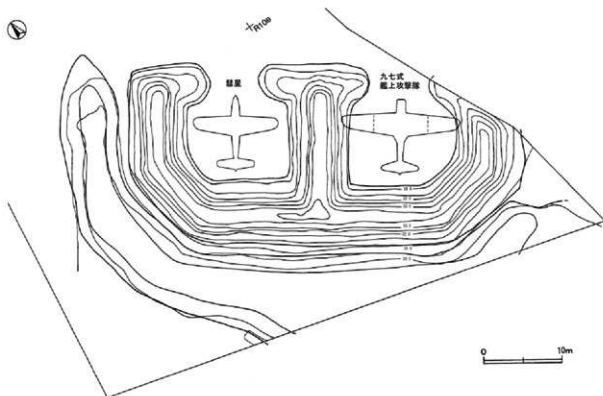
(4) 格納された軍用機

旧百里原海軍飛行場の主力機種は、九〇式機上作業練習機、白菊、九三式艦上爆撃機、九六式艦上爆撃機、九九式艦上爆撃機、九七式艦上攻撃機、零式艦上戦闘機等であり、終戦時の引渡目録¹⁵⁾によると、「九九式艦爆67機、九六式艦爆17機、九七式艦攻58機、彗星21機、天山10機、銀河1機」とあることから、最終的に残った軍用機は174機であったことがわかる。

今回調査したI型掩体壕の格納部規模は、幅14m前後、奥行15m前後であり、掩体部の壁高は3.2m前後であることから、格納できる機体は限られる。第98図は第2号掩体壕実測図に、参考のため当飛行場の主力機種であった九七式艦上攻撃機と彗星を同縮尺で加えたものである。格納部は、銀河等の大型の陸上爆撃機は不可能であるが、零式艦上戦闘機や彗星等の小型機は十分に格納できる規模である。全幅が15mを超える九七式艦上攻撃機については、主翼が上方折畳式で、翼折畳時の全幅は7.3mであることから、格納が可能である。また、機体が主脚と尾脚を出して接地している場合には、主翼端部は接地面から1.5～2.0mの高さに位置する。格納部底面の規模では格納できない寸法の軍用機であっても、掩体部の内壁には斜度35～40度で法面が付けられているので、底面から1.5mの位置での格納部幅は15m前後となり、全幅15mまでの軍用機を格納できるものとみられ、機数の多い九九式艦上爆撃機も格納できたと考えられる。

表16 主力機種寸法一覧

制式名または名称	全幅(m)	全長(m)	全高(m)	引渡機体数
九〇式機上作業練習機	15.780	9.560	3.820	—
白菊	14.980	9.980	3.100	—
九三式中間練習機	11.000	8.050	3.200	—
九六式艦上爆撃機	11.400	9.400	—	17機
九九式艦上爆撃機	14.365	10.195	3.847	67機
九七式艦上攻撃機	15.520	10.300	3.700	58機
零式艦上戦闘機	11.000	9.060	3.509	—
彗星	11.493	10.220	3.295	21機
天山	14.890	10.865	3.700	10機
銀河	20.050	15.000	4.300	1機



第98図 軍用機の格納状況イメージ図(第2号掩体壕実測図に加筆)

3 わすび

旧百里原海軍飛行場掩体壕群は、近現代の戦争遺跡である。十五年戦争末期の軍事施設跡であり、戦争の記憶が薄れていく昨今、地域の戦争の歴史を後世に伝える貴重な遺跡である。今回の調査によって、旧百里原海軍飛行場に付属する飛行機用掩体壕の規模や形状の記録がなされ、それらが規格性の高い構築物であり、綿密な計画に基づいて配置されていたことが判明した。今後は、文献史料調査や聞き取り調査等によって、当遺跡周辺のより詳細な情報分析が行われ、地域の歴史が正確に記録されていくことを期待するものである。

註

- 1) a 宮崎修士・柴田博行〔(仮称) 荒川本郷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 実教寺子西遺跡〕「茨城県教育財団文化財調査報告」第156集 2000年3月
b 白石真理「武田重 1993年度武田遺跡群発掘調査の成果」〔(財) 勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告〕第9集 1994年3月
- 2) 相沢一正「3 戦時下の百里原」『日本民衆の歴史 地域編5 百里原農民の昭和史 茨城百里の人びと』三省堂 1984年12月
- 3) 「昭和20年8月31日 兵器 施設 備品引渡目録 奥羽空百里原航空隊」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C 08011371000 (第4画像目から) 防衛省防衛研究所所蔵
- 4) 前掲2)
- 5) 十妻敏武・菊池実「掩体壕が語る戦争の実相」『続 しらべる戦争遺跡の事典』柏書房株式会社 2003年6月
- 6) 作山智彦「島山A遺跡の掩体壕」『専修考古』第10号 2004年12月
- 7) 小美玉市下吉影地区在住の和田常信氏からの聞き取り。氏は戦時中に掩体壕の構築に携わったとのことであった。
- 8) 石田源「百里横古」『ひたち小川の文化』第9号 小川町郷土文化研究会 1989年4月
- 9) 調査担当者の荒馬氏による。なお、前掲3) のJACAR:C 08011370500 (『施設現状目録』第12画像目) によれば、引き渡された掩体壕は72基とある。基数の違いは、遺存状態の良いものだけが引き渡されたためと考えられる。
- 10) 前掲3) JACAR:C 08011370500 (『施設現状目録』第16画像目)
- 11) 前掲9)
- 12) 「本土防空作戦」『戦史叢書』朝雲新聞社 1968年10月
- 13) 「陸密昭和20年 空襲に依る飛行場及諸施設に関する教訓」JACAR:C 01007863800 (第6画像目)
- 14) 国立国会図書館憲政資料室所蔵
- 15) 前掲3) JACAR:C 08011060400 (『軍需品目録 (1)』第5画像目)

参考文献

- ・小川町史編さん委員会「小川町史 上巻」小川町 1982年3月
- ・小川町史編さん委員会「小川町史 下巻」小川町 1988年3月
- ・十妻敏武・菊池実「掩体壕が語る戦争の実相」『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房株式会社 2002年6月
- ・菊池実「戦争遺跡の発掘・陸軍前橋飛行場」新泉社 2008年6月
- ・菊池実「陸軍前橋飛行場物語ー日米両軍の発掘資料からー」『研究紀要』第22号 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004年3月
- ・田中大輔「ロタコ(御勅使河原飛行場跡) 滑走路および掩体壕跡の埋蔵文化財確認調査」『南アルプス市埋蔵文化財報告書』第13集 南アルプス市教育委員会 2007年3月
- ・小玉秀成「特別展 近現代遺跡、発掘!」玉里村立史料館 2001年11月
- ・市村慎太郎「大阪府下出土弾丸について」『大阪文化財研究』第20号 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2001年7月
- ・大谷内一夫「ジャパニーズ・エア・パワー 米国防略爆撃調査団報告/日本空軍の興亡」光人社 1996年8月

写 真 図 版

石 川 遺 跡

石 川 塚

旧百里原海軍飛行場掩体壕群

第 1 号住居跡
完 掘 状 況



第 1 号住居跡
炉 完 掘 状 況



第 2 号住居跡
完 掘 状 況



石川遺跡
PL 2



第2号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
完掘状況

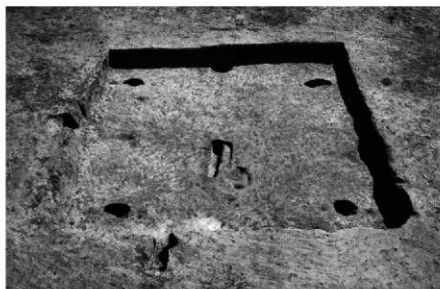


第3号住居跡
遺物出土状況

第 3 号 住居 跡
竈 遺物 出土 状況



第 4 号 住居 跡
完 掘 状 况



第 4 号 住居 跡
遺物 出土 状況





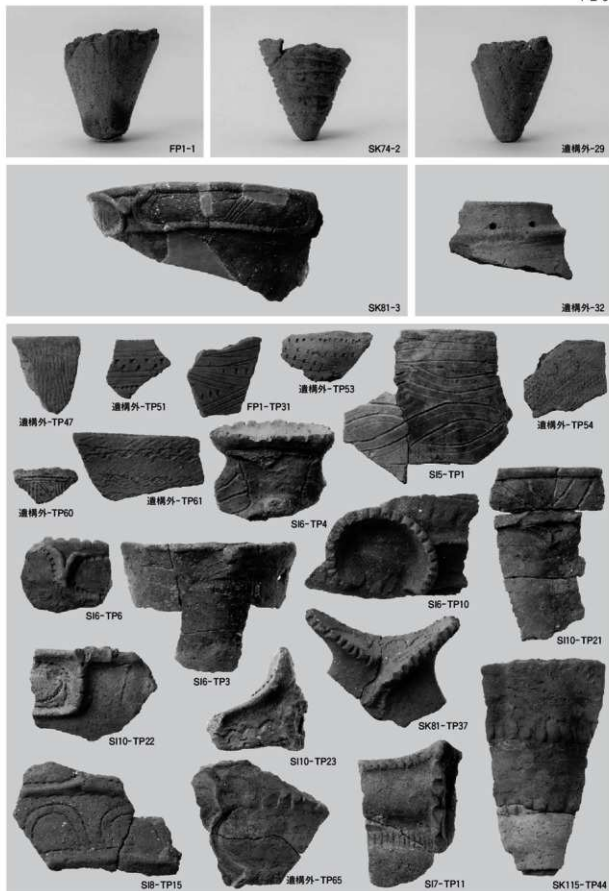
第5号住居跡
完掘状況



第6～9号住居跡
完掘状況



第1～6号炭焼窯跡
完掘状況

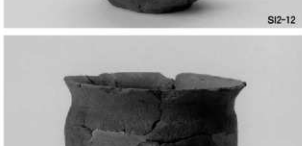


出土縄文土器

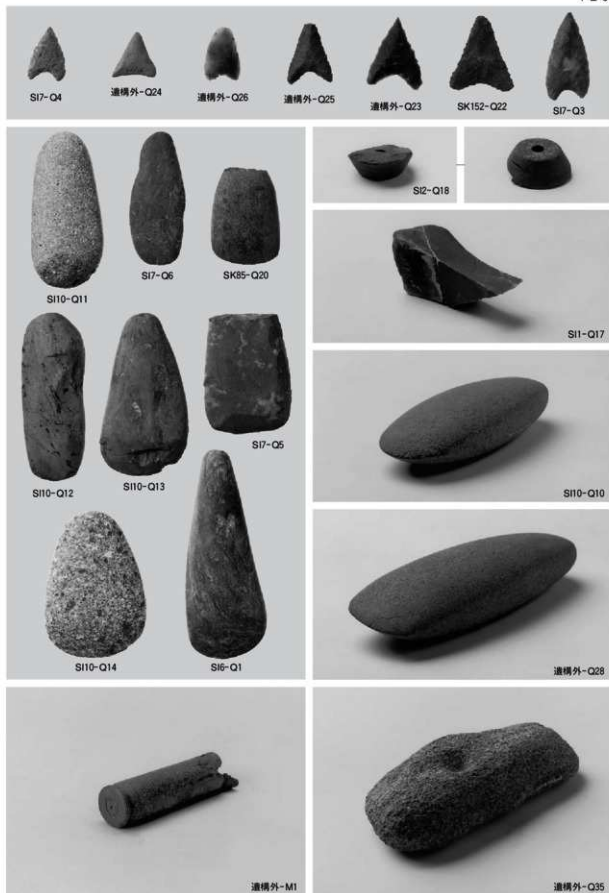
石川遺跡
PL 6



出土縄文土器・弥生土器・土製品







出土石器・石製品・金属製品



第1号塚全景



石塔1・2



石塔3～5



石塔6



石塔7・8



第 1 号 墓 坑
遺 物 出 土 状 況



第 3 号 墓 坑
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 掘 立 柱 建 物 跡
完 掘 状 況 (北 東 从 ち)

石川塚
PL12



第 1 号 石 塔 跡
遺 物 出 土 状 況



第 3 号 石 塔 跡
遺 物 出 土 状 況



第 4 号 石 塔 跡
遺 物 出 土 状 況





SK7-14



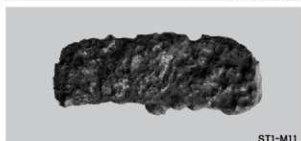
遺構外-19



第1号石塔跡-Q2



第1号石塔跡-Q1



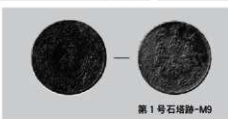
ST1-M11



ST1-M12



第1号石塔跡-M2~6



第1号石塔跡-M9



遺構外-M25



第1号石塔跡-M1



第1号石塔跡-M7



ST3-M13



ST3-M14



ST3-M15



第1号石塔跡-M8



SK12-M20



ST3-M16



ST3-M17



ST3-M18



SK12-M19



SB1-M10



遺構外-M22



遺構外-M23



遺構外-M24

第1号掩体壕
全景



第1号掩体壕
横穴1・2確認状況



第1号掩体壕
遺物出土状況



旧百里原海軍飛行場掩体壕群

PL16



第 1 号 掩 体 壕
B トレンチ土層断面



第 1 号 掩 体 壕
E トレンチ土層断面



第 2 号 掩 体 壕
全 景



第 2 号掩体壕
硬化面確認状況



第 2 号掩体壕
中央壁土層断面



第 2 号掩体壕
西側壁土層断面



第 2 号 掩 体 壕
F トレンチ土層断面



第 3 号 掩 体 壕
全 景



第 4 号 掩 体 壕
全 景

第 5 号 掩 体 壕
全 景



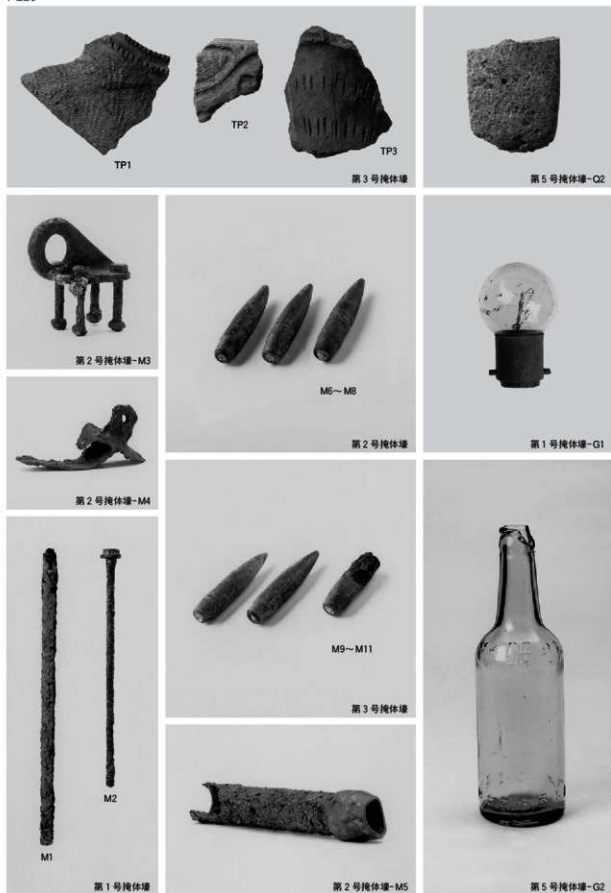
第 6 号 掩 体 壕
全 景



第 7 号 掩 体 壕
全 景



旧百里原海軍飛行場掩体壕群
PL20



出土土器・石器・金属製品・ガラス製品

抄 録

ふりがな	いしかわけき いしかづか きょうやくりほらかいてんひょうじょうえんたいごうぐん							
書名	石川遺跡 石川塚 旧百里原海軍飛行場掩体壕群							
副書名	茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第320集							
著者名	小野政美 前島直人							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587							
発行年月日	2009 (平成21) 年3月23日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
石川遺跡	茨城県小美玉市 大字下吉影字石川 2164番地ほか	08236 - 303014	36度 06分 26秒	140度 07分 35秒	28m	20051001 ～ 20060331	31,800㎡	茨城空港テクノ パーク整備事業 に伴う事前調査
石川塚	茨城県小美玉市 大字下吉影字石川 2189番地の1ほか	08236 - 303227	36度 11分 04秒	140度 26分 01秒	27m	20051001 ～ 20051130	43.25㎡	
旧百里原海軍 飛行場掩体壕群	茨城県小美玉市 大字下吉影字新田 出口四番2408番地の 2ほか	08236 - 303230	36度 10分 59秒	140度 25分 51秒	30m	20051001 ～ 20051130 20060401 ～ 20060731	4,681㎡ 9,120㎡	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石川遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡 6軒 炉穴 1基 土坑 6基		縄文土器、土製品(土器片・土 製円盤)、石器(石鏃・砥石・ 磨石・凹石・磨製石斧・打製石 斧・石匙)			
		古墳	竪穴住居跡 4軒 土坑 2基		土師器(坏・高坏・甕・甌)、 石製品(紡錘車)			
	生産跡	近代	炭焼窯跡 6基					
	その他	中世 不明	地下式坑 1基 溝跡 1条 土坑 164基 不明遺構 1か所					
石川塚	塚	近世	塚 1基		土師質土器(皿・灯明皿)、瓦 質土器(香炉)、陶磁器(碗・ 皿・播鉢・香炉・花瓶・仏飯 器)、石器(砥石)、金属製品 (煙管)、古銭、人骨			
		墓域	墓坑 3基					
	その他	不明	掘立柱建物跡 2棟 土坑 3基 土坑 7基					
旧百里原海軍 飛行場掩体壕群 第1～7号掩体壕	軍事施設跡	近代 (昭和時代)	掩体壕 7基		機銃弾、鉄製品(飛行機関連部 品カ・導線)、ガラス製品(電 球・ビール瓶)			
要約	<p>石川遺跡は、縄文時代前期後半と中期前半の住居跡が検出され、小規模な集落が形成されていたことが判明した。また古墳時代前期と後期の住居跡が谷津頭部から検出され、小規模な集落が断続的に営まれていたことがうかがえる。</p> <p>石川塚の周辺は「貝谷の大日堂」とよばれ、寺院があったとされてきた場所である。調査の結果、堂跡と思われる掘立柱建物跡が検出された。また、塚頂部や周辺に埋葬された人骨も検出された。なお、塚の調査前には、周辺部に石塔が8基設置されていた。</p> <p>旧百里原海軍飛行場掩体壕群は、太平洋戦争末期に百里周辺に80基ほど造られた、軍用機を蔽う空襲から守るための格納庫である。高さ3mほどの盛土によってE字形に造られていることから、2機の飛行機を格納していたものと考えられる。</p>							

茨城県教育財団文化財調査報告第320集

石 川 遺 跡
石 川 塚
旧百里原海軍飛行場掩体壕群

茨城空港テクノパーク整備事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

平成21(2009)年3月18日 印刷
平成21(2009)年3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 いばらき印刷株式会社
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松字平原3115-3
T E L 029-282-0370

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第320集

石川遺跡遺構全体図



付図 石川遺跡遺構全体図「茨城県教育財団文化財調査報告第320集」

